

388  
207



始



388-207

時 276  
240

# 新釋徒然草

文士學士 岩崎臨洋  
早大文士學士 妹尾薇谷  
共著



大正  
9. 2. 6  
内交

この書を讀むものゝ爲に

本書は吉田兼好法師の著はした徒然草を註釋し、且つ其の意義をわかり易きやうに現代的口語にて譯解し、講議したるものである。凡そどんな書籍にても、之を研究せんと欲する者は、先づ其の書籍に記載せられたる所を研究する前に於て其の書籍を著はしたる者のどんな人であるのか、及び其の書籍の題號等に就いても一應その概略を知つて置くの必要があらう。

▽著者吉田兼好法師の素情

徒然草の著者吉田兼好法師と云へるは、如何なる素情の人であるかと曰ふに、吉田兼顯の子にして後宇多法皇の北面の臣たり、普通に云ふ所では官は累進して佐兵衛佐に至つた。法皇の崩御せられ給ふや、遂に桂冠して遁世し、僧となつた。天臺の學に達し、且つ儒學にも造詣深く、

殊に老聃莊周の學を好んだ、とのことである。國書に精通し、和歌にも  
妙才あり。當時頓阿・淨辨・慶運と並び稱して、歌道の四天王との稱を  
得た。後村上天皇の御宇正平五年庚寅の歲（北朝崇光院 觀應元年）四月八日壽六十八  
歳を以て没した。徒然草は彼れが書て置いた文章を兼好法師が没後に編  
纂したるものである。

▽徒然草は誰れの編纂したるものか？

徒然草の文章は吉田兼好法師の書いたもので、徒然草は誰れの著はし  
たものかと曰はば、开は何ん人も吉田兼好法師と答へるのであらうが、  
其の編纂をして書籍にしたのは、兼好法師のやつたのではない。されば  
これは誰がしたるものであるかと云ふに、命松丸と今川貞世との二人の  
手にて編纂されたるものである。されば其の『徒然草』の書籍の標題も  
吉田兼好法師の命名したものでないことは勿論であるので、後桃園天

皇の御宇安永二年（紀元二千四百年三十三）癸巳の歲閏三月十五日に伊勢平藏貞丈が記  
したと云ふ兼好墓所圖の追書の中に云つて居るのに『三光院御作の崑玉  
集に云ふ、兼好法師のつれづれ草は其の世には知る者なかりしをわらは  
の命松丸、今川了俊（了俊は貞丈が剃髪後の法名である）のもとに仕へてありしに、兼好もし  
や歌など残れるか、作の物語やあると問はれしが、書を捨てられし藻鹽  
草あるは、歌のすすること葉もげにや多くは庵の壁に張られて候。爰に  
もおはしませしども自からは重寶にも形見にもと、貯へ候と語りければ、  
それ尋ねさせよとて、吉田の威神院へは命松丸を遣はし伊賀の草庵（伊賀  
田井の庄國見丘の草庵にて兼好法師が晩年に住み居たるところ）へは從者伊豫の太郎光貞と云ふもの歌の志あり  
とて遣はされしが、歌の集は伊賀の草庵にて五拾枚ばかり集め、つれ  
づれ草は吉田にて多く壁に張られ、あるは經卷などを寫せる裏書にてあ  
りしを取り來たりぬ。之を了俊、命松丸など取り揃へ、命松丸がもと

ありしをも又二條の侍従の方に讀みつかはされしをも、問ひ蒐め、歌の集二冊とし、又草子を二冊とせし也。つれづれなるまゝにと書きいだせし語意の面白く、哀れ深きになぞらへて、つれづれ草と云ふ題號は附せられたり」とある。乃ち之に依て推すに、『徒然草』と云ふ標題の名號も亦兼好法師の命名ではなくて、今川貞世等が勝手に命名したるものなのであることが知られやう。これ其書籍の標題も吉田兼好の命名したるものではないことの勿論であると云へる所の理由も判明さる事であらう。

▽官名と歿せし月日の不審

吉田兼好法師の官名は左兵衛佐とし、又その歿したる月日は四月八日とするのは、一般普通にさう云ふて居るのであるけれども、印本大系圖には右兵衛佐になして居る。左か、右か、大日本史の兼好法師傳に據ると左兵衛なるも佐にてはあらずして、尉となり、左兵衛尉としてある。

孰れが正當なるものにや。徳川光圀侯監修の大日本史は今日凡べて史實を見るに於いて正偽を判明するの鑑定鏡となつて居るやうであれば、左兵衛尉とするのが或ば正當たるべきのであらうか？。これには他に種々なる研究をなし居れる人ありて、既に世に發表され居るものもあるが、まだ研究すべきの餘地があると思へるので、爰には余は暫らく大日本史の説に左祖して置く。又前に兼好法師の歿せし月日の四月八日としたのは紀州高野山西光院に兼好法師の位碑があつて、これに『觀應元年四月八日六十八歳卒』と記せるものあるのに基づいたのであるけれども『結阨錄』と云ふ書の中に記せる所に據ると、吉田兼好法師の墓の圖を載せ居つて、それに掲げたるは『觀應元年二月十五日』とありて、兼好法師の卒去の日は應に觀應元年二月十五日たるべきことになつて居る。又『春湊浪語』には兼好の高師直のために艶書を書いたと太平記に傳へたる所の

ものに對し、批評を試みたるの後に於いて、『觀應元年二月十八日に伊賀の國見山の麓、田奈保村の庵に寂す』と書いて居る。依つて兼好法師の歿日は四月八日、二月十五日、及び二月十八日の三つとなつて居るのであるが、果して孰が正當なるものなのであらうか？。或人の説に據れば二月十八日が正しいので、四月八日とあるは、二月十八日入寂して四月八日は七々日にあたる日にて、其の日に位牌を西光院に建て、直に其の日を書き付けたるものであらうとなし居るも、兼好法師が終焉の地たる伊賀の國見山の麓、田奈保村に其の墓があつて墓碑に『觀應元年二月十五日』とし刻し居ることなれば、これが何よりの證據で正當なるものとせねばならぬ。

▽兼好法師が高師直の爲に鹽谷高貞の妻に遣はす艶書を書いたか？

吉田兼好法師が高武藏守師直の爲に鹽谷判官高貞の妻に遣はした艶書を書いたと云ふことは、坊間の普通専ら傳ふる所で、太平記卷の二十一鹽谷判官讒死の事あるの條に、高貞の妻を師直が慕へる事を記して、

『武藏守いと心を空に成し、度重らばなさけによはることもこそあれ、文をやり見ばやとて、兼好と云ひける能書の遁世者を呼び寄せて、紅葉重ねの薄様の取る手もくゆる計りにこがれたるに、言を盡してぞ聞えける。』

とあるを以て證となし、讀耕林子の本朝遯史にも吉田兼好のしたることなりとし、『何某不<sub>レ</sub>辭<sub>ニ</sub>師直之示諭<sub>ヲ</sub>而艶簡染<sub>レ</sub>筆乎信。一世之過錯也。』と云ひ、以て大に慨責をなし居るも、今日では種々なる方面より考證を求め、以て研究をなしたるの結果、之を書いたのは、卜部兼好にて、この徒然草の文章を作つた吉田兼好ではないと云の説に略一致して居る。吾

この書を讀むものゝ爲に

八

人もこれに左袒するものである。

之を要するに『徒然草』は南北分朝時代の頃に出でたる吉田兼好法師なる學僧が書いて居つた雜文を拾ひ蒐めて、命松丸と今川了俊とが協力纂輯したるものにして、『つれづれ草』と云ふ題號も、又其の之を上下の二冊に編綴したのも共に今川了俊及び命松丸の意に依つてなつたものである。随つて徒然草の書に收められたる文章の編輯上の排列及び其の撰輯の取捨の如きは、文案者たる吉田兼好法師の心になつたものではないと云ふことをも思ふべく、又其本書の研究者は吾人が上來述べ來たつた所の吉田兼好法師のことに關しての事どもをも考へ置くべきの必要があらう。

大正八年初夏四月

著者 薇谷述記

### 新釋徒然草目次

序	つれづれなるまゝに……………	一
一段	いでやこの世に生れては……………	二
二段	古への聖の御代の政……………	六
三段	萬にいみじくとも……………	七
四段	後の世の事に忘れず……………	八
五段	不幸に憂ひに沈める人……………	九
六段	我身のやんごとなからん……………	一〇
七段	化し野の露消ゆる時……………	一一
八段	世の人の心惑はず事……………	一四
九段	女は髪をめてたからんこそ……………	一五
一〇段	家居の似合しく……………	一七
一段	神無月の頃……………	二〇
二段	同じ心ならん人と……………	二三
三段	獨り燈火の下に文を展げて……………	二四

目次

一四段	和歌こそ猶をかききもの……………	二四
一五段	いづくにもあれ……………	二六
一六段	神樂こそなまめかしく……………	二八
一七段	山寺にかき籠りて……………	三〇
一八段	人は己をつまやかにし……………	三〇
一九段	折節の移り變るこそ……………	三三
二〇段	某とかや云ひし世捨人……………	三三
二一段	萬の事は月見るにこそ……………	三九
二二段	何事も古き世のみぞ……………	四一
二三段	衰へたる末の世とはいへ……………	四三
二四段	齋宮の野宮におはします……………	四四
二五段	飛鳥川の瀬瀬……………	四六
二六段	風も吹きあへず……………	四八
二七段	御國讓りの節會行はれて……………	五三

一

二八段 諒闇の年ばかりあはれなる……………三  
 二九段 静かに思へば萬に……………五  
 三〇段 人の亡き後ばかり……………五  
 三一〇段 雪の面白う降りたりし朝……………五  
 三二段 九月二十日の頃……………六  
 三三段 今の内裏造り出されて……………六  
 三四段 甲香は……………六  
 三五段 手のわろき人の……………六  
 三六段 久しく音づれぬ頃……………六  
 三七段 朝夕隔てなく馴れたる人……………六  
 三八段 名前に使はれて……………六  
 三九段 或人法然上人に……………七  
 四〇段 因幡の國に……………七  
 四一段 五月五日の賀茂の競馬……………七  
 四二段 唐橋中將といふ人の子……………七  
 四三段 春の暮つ方……………七  
 四四段 あやしの竹の編戸……………七

四五段 公世の二位の兄……………八  
 四六段 柳原の邊りに……………八  
 四七段 或人清水へ参りけるに……………八  
 四八段 光親卿……………八  
 四九段 老來りて……………八  
 五〇段 慶長の頃……………八  
 五一〇段 龜山殿の御池に……………八  
 五二段 仁和寺に或る法師……………九  
 五三段 これも仁和寺の法師……………九  
 五四段 御室にいみじき稚兒……………九  
 五五段 家の造りやうは……………九  
 五六段 久しく隔たりて逢ひたる人……………九  
 五七段 人の語り出てたる歌物語……………九  
 五八段 道心あらば住む所に……………九  
 五九段 大事を思ひ立たん人は……………九  
 六〇段 眞乘院に盛親僧都とて……………九  
 六一〇段 御産の時……………九

六二段 延政院門幼く……………三  
 六三段 後七日の阿闍梨……………三  
 六四段 車の五緒は……………三  
 六五段 此の頃の冠は……………三  
 六六段 岡本關白殿……………三  
 六七段 賀茂の岩本……………三  
 六八段 筑紫に……………三  
 六九段 書寫の上人は……………三  
 七〇段 元應の清原堂の御遊に……………三  
 七一〇段 名を聞くより……………三  
 七二〇段 世に語り傳ふるもの……………三  
 七三段 蟻の如くに集りて……………三  
 七四段 つれづれ侘びる人は……………三  
 七五段 世の覺え花やかなる……………三  
 七六段 世の中に其の頃の人……………三  
 七七段 今様の事共の珍らしき……………三  
 七八段 ………………三

七九段 何事も入り立たぬ様……………八  
 八〇段 人毎に我身に疎き事……………八  
 八一〇段 屏風障子などの繪も文字……………八  
 八二段 羅の表紙は疾く損するが……………八  
 八三段 竹林院入道左大臣殿……………八  
 八四段 法顯三藏の天竺に渡りて……………八  
 八五段 人の心素直ならねば……………八  
 八六段 惟繼中納言……………八  
 八七段 下部に酒飲まする事……………八  
 八八段 或者、小野道風の書ける……………八  
 八九段 奥山に猫またといふ物……………八  
 九〇段 大納言法印の召し仕ひ……………八  
 九一段 赤舌日といふ事……………八  
 九二段 或る人弓射る事を習ふ……………八  
 九三段 牛を賣る者あり……………八  
 九四段 常盤井の相國出仕し……………八  
 九五段 箱のくりかたに……………八



九六段 めなもみといふ草あり……………一六九  
 九七段 その物につきて……………一六九  
 九八段 尊き聖の云ひ置き……………一七〇  
 九九段 堀川の相國は……………一七〇  
 一〇〇段 久我の相國は……………一七一  
 一〇一段 或人任大臣の節會の内辨……………一七二  
 一〇二段 尹大納言光忠入道……………一七三  
 一〇三段 大覺寺殿にて……………一七三  
 一〇四段 荒れる宿の人目無きに……………一七四  
 一〇五段 北の屋陸に消え残りたる雪……………一七五  
 一〇六段 高野の證空上人……………一七六  
 一〇七段 女の物言ひかけたる返事……………一七六  
 一〇八段 寸陰惜む人無し……………一七七  
 一〇九段 高名の木のぼり……………一七八  
 一一〇段 双六の上手といひし人……………一七八  
 一一一段 圍碁双六を好みて……………一七九  
 一二二段 明日は遠國へ赴くべし……………一七九

一三三 四十にも餘る人の色めき……………二〇〇  
 一三四 今出川のおほい殿……………二〇一  
 一三五 宿河原といふ所にて……………二〇二  
 一三六 寺院の號……………二〇三  
 一三七 友とするに悪きもの……………二〇四  
 一三八 鯉の羹食らたる日は……………二〇五  
 一三九 鎌倉の海に鯉といふ魚は……………二〇六  
 一四〇 唐の物は……………二〇七  
 一四一 養ひ飼ふ物には馬牛……………二〇八  
 一四二 人の才能は……………二〇九  
 一四三 無益の事をなして……………二一〇  
 一四四 是法法師は……………二一一  
 一四五 人に後れて……………二一二  
 一四六 博奕の負極まりて……………二一三  
 一四七 改めて益なきことは……………二一四  
 一四八 雅房大納言は……………二一五  
 一四九 顔回は志人に勞を施さじ……………二一六

一三〇段 物に争はず……………二二三  
 一三一 貧しき者は財を以て……………二二三  
 一三二 鳥羽の作道は……………二二三  
 一三三 夜の御殿は東御枕なり……………二二三  
 一三四 高倉院の法華堂の三昧僧……………二二三  
 一三五 資季の大納言入道……………二二三  
 一三六 醫者あつしげ……………二二三  
 一三七 花は盛に月は隈なき……………二二三  
 一三八 祭過ぎぬれば……………二二三  
 一三九 家にありたき木は松……………二二三  
 一四〇 身死して財残る事は……………二二三  
 一四一 悲田院の堯連上人……………二二三  
 一四二 心なしと見ゆる者も……………二二三  
 一四三 人の終焉の有様……………二二三  
 一四四 梅尾の上人道を過ぎ……………二二三  
 一四五 御隨身泰の重躬……………二二三  
 一四六 明雲座主……………二二三

一四七 炎治あまた所に……………二二二  
 一四八 四十以後の人……………二二二  
 一四九 鹿茸を鼻にあてて……………二二二  
 一五〇 能をつかんとする人……………二二二  
 一五一 或人の曰く……………二二二  
 一五二 西大寺靜然上人……………二二二  
 一五三 爲兼大納言入道……………二二二  
 一五四 この人、東寺の門に兩宿り……………二二二  
 一五五 世に従はん人は……………二二二  
 一五六 大臣は大變は……………二二二  
 一五七 筆をとれば物書かれ……………二二二  
 一五八 盃の底を捨つる事……………二二二  
 一五九 「みなむすび」と云ふは……………二二二  
 一六〇 門に額かくるを……………二二二  
 一六一 花の盛りは冬至より……………二二二  
 一六二 遍照寺の承仕法師……………二二二  
 一六三 太衝の太の字……………二二二

一六四段 世の人相違ふ時……………三〇三

一六五段 東の人の都の人……………三〇三

一六六段 人間の營みある業……………三〇四

一六七段 一道に携る人……………三〇五

一六八段 年老ひたる人の……………三〇八

一六九段 何事の式といふことは……………三二〇

一七〇段 左したる事なくて……………三二一

一七一〇段 貝を掩ふ人の……………三二三

一七二〇段 若き時は血氣内に餘り……………三二六

一七三〇段 小野小町が事……………三二九

一七四〇段 小鷹によき犬……………三三〇

一七五〇段 世には心得る事の多きなり……………三三一

一七六〇段 黒戸は小松の御門位……………三三二

一七七〇段 鎌倉の中書王にて……………三三三

一七八〇段 或所の侍ども……………三三四

一七九〇段 入宋の沙門道眼上人……………三三五

一八〇〇段 左義長は……………三三七

一八一〇段 降れくこ雲……………三三一

一八二〇段 四條大納言隆親卿……………三三八

一八三〇段 人突く牛をば角を切り……………三三九

一八四〇段 相模守時頼の母……………三四〇

一八五〇段 城陸奥守泰盛は……………三四三

一八六〇段 吉田と申す馬乗り……………三四四

一八七〇段 萬の道の人……………三四五

一八八〇段 或者子を法師になして……………三四七

一八九〇段 今日其の事をなさんと……………三四八

一九〇〇段 妻と云ふものこそ……………三四八

一九一〇段 夜に入りて物の光彩……………三四〇

一九二〇段 神佛にも人のまうでぬ日……………三四三

一九三〇段 暗き人の人を量りて……………三四三

一九四〇段 逢人の人を見る眼は……………三四五

一九五〇段 或者人久我噉を通り……………三四八

一九六〇段 東大寺の神輿……………三三〇

一九七〇段 諸寺の僧のみにもあらず……………三三一

一九八〇段 揚名介に限らず……………三三二

一九九〇段 横川の行宣法師が……………三三二

二〇〇〇段 吳竹は葉細く……………三三三

二〇一〇段 退凡下乗の卒都婆……………三三三

二〇二〇段 十月をかみなづき……………三三四

二〇三〇段 勅勘の所に鞆かくる作法……………三三五

二〇四〇段 犯人を答にて打つ時は……………三三六

二〇五〇段 比叡山に大師勸請……………三三七

二〇六〇段 徳大寺右大臣殿……………三三八

二〇七〇段 龜山殿建てられんとて……………三三〇

二〇八〇段 經文などの紐を結ふに……………三三二

二〇九〇段 人の田を論ずるもの……………三三三

二一〇〇段 呼子鳥は春のもの……………三三四

二一一〇段 萬の事は頼むべからず……………三三五

二一二〇段 秋の月は限りなく……………三三九

二一三〇段 御前の火爐に……………三三九

二一四〇段 想夫憐といふ樂は……………三三〇

二一五〇段 平の宣時朝臣……………三三二

二一六〇段 最明寺入道……………三三九

二一七〇段 大福長者の曰く……………三三九

二一八〇段 狐は人に食ひ付くもの……………四〇一

二一九〇段 四條黄門命せられて曰く……………四〇二

二二〇〇段 何事も邊土は卑しく……………四〇五

二二一〇段 建治弘安の頃は……………四〇八

二二二〇段 竹谷の乗願房……………四〇九

二二三〇段 田鶴のおほいどのは……………四一一

二二四〇段 陰陽師有宗入道……………四二二

二二五〇段 多久資に申しけるは……………四二三

二二六〇段 後鳥院の御時……………四二四

二二七〇段 六時禮贊は……………四二七

二二八〇段 千本の釋迦念佛は……………四二八

二二九〇段 善き細工は……………四二八

二三〇〇段 五條の内裏には……………四二九

二三一〇段 園の別當入道は……………四三〇

二三二段 凡て人は無智無能…………… 四三  
 二三三段 萬の咎あらじと思はゞ…………… 四五  
 二三四段 人の物を問たるに…………… 四六  
 二三五段 主ある家には…………… 四九  
 二三六段 丹波に出雲と云ふ所…………… 四〇  
 二三七段 柳箱に据うるものは…………… 四三  
 二三八段 御隨身近友が自讃して…………… 四四  
 二三九段 八月十五日…………… 四六  
 二四〇段 信夫の浦の海人のみるめ…………… 四六  
 二四一段 望月の圓かなる事は…………… 四〇  
 二四二段 とこしなへに違順に使はる…………… 四五  
 二四三段 八つになりし年…………… 四五

新釋徒然草目次終

新釋徒然草

文學士 岩崎 臨洋 共著  
 文學士 妹尾 薇谷

〔序段〕  
 物淋しく退屈なること  
 日暮らし 終日のこと  
 心にうつりゆく  
 思ひ浮びたること  
 れからそれへとうつり  
 ゆくことにて見たり聞  
 いたりしたことが次へ  
 次へ考えださるること  
 よしなしこと 色々  
 と取りとめもないこと  
 とそこはかとなし何所  
 があてときまりなづけ  
 ることもないあやし  
 うこそ 不思議になが  
 したものと云ふに全じ  
 物ぐるほしけれ 狂  
 氣じみて居る。

序段

〔序段〕  
 つれづれなるまゝに、日暮らし硯に向ひて、  
 心とうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなし書き  
 つくれれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。

〔講譯〕

つれづれと物淋しく退屈であるものから、朝から晩まで  
 終日の間硯に向ひて、心とうつりゆく思ひだした色々の  
 とりとめもない事を、そこあてどころをも定めずして書きつけ、  
 つゞりて見れば随分あやしき不思議にヘンテコなものがでて狂氣  
 じみたものです。

【第一段】  
 ①いでや さても、又は抑もと云ふに全じ②竹の園生 親王を云ふ漢の文帝の皇子梁の孝王三百里に亘る竹園を作りて住居せるに基ける故事なり③人間の種ならぬぞ 菅原文時の詩に「此花是非人間種」とありこれより王孫入學の日「名花在閑軒」を題にして賦したるもの也④一の人攝政關白のこと⑤舍人隨身護衛の武士⑥法師 僧なり佛法を説

【第一段】 いでやこの世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。帝の御位はいとも畏し。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞ、やんごとなき。一の人の御有様は更なり、たゞ人も舍人など賜はる際はゆいしと見ゆ。その子孫までは、はふれにたれど、猶優美し。それより下つ方は、程につけつ、時に逢ひ、したり顔なるも自らはいみじと思ふらめど、いと口惜し。法師ばかり羨ましからぬ者はあらず、人には木の端の様に思はるゝよと、清少納言が書けるも、實にさるぞかし。勢猛に匂りたるにつけて、いみじとは見えす。増加聖の云ひけんやうに、名聞苦しく、佛の御教に違ふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨人は、中々あらま

きて人の師範たるを以て云ふ⑦木の端 木ぎれと云ふこと⑧清少納言 肥後守清原元輔の娘にして一條天皇の皇后定子に奉仕す⑨増加 參議恒平の子にして比叡山の座主慈惠の弟子なり⑩本性 生れつきたる氣性⑪管絃 管は笛・笙・篳篥などを云ひ、絃は琴瑟・琵琶などを云ふ音樂器の總名なり⑫有職 故實に通曉し禮法を司るを云ふ⑬公事 宮中の公事なり⑭いたまし 不便の意なり⑮下戸 白氏文集

ほしき方もありなん。人は容有様の勝れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。物うち云ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて詞多からぬこそ。飽かす向はまほしけれ。めでたしと見る人の心劣りせらるゝ、本性見えんこそ口惜しかるべけれ。人品容貌こそ生れつきたらめ、心はなとか賢きより賢きにも移さは移らざらん。かたち心様よき人も、才なくなりぬれば、品下り、顔憎さげなる人にも立ち交りて、かけず氣おさるゝこそ本意なきわざなれ。ありたき事は、實しき文の道、作文、和歌、管絃の道、又有職に公事のかた、人の鑑たらんこそいみじかるべけれ。手など拙なからず走り書き、聲をかくしく拍手とり、いたましようするものから、

に「酒を飲む者を大戸  
飲まざる者を小戸」と  
いふより轉じて日本に  
ては上戸下戸と云ふ、  
下戸といへるは酒を飲  
まぬものをいへるので  
ある。

下戸ならぬこそ男はよけれ。

(講譯)

さて人として此の世に生れてはあゝもして見たいかうも  
して見たいといろ／＼に思ひて心に願はしい事は多いや  
うぢやよ、天皇の御位は申しまするも畏れ多いことで御座る、皇族  
の御末裔に至るまでこれは人間の種ではなくあるほど格別に貴いこ  
とであります、一の人なる攝政關白の御有様は尙ほ更のこと申すに  
及ばず、攝家以外の人のたゞ人であつても、舍人その他の者を隨從  
することを御勅許になります位の重い身分のあるものはえらく見  
えます、其の子孫などになれば少しは落ぶれては見えるけれどもそ  
れでもまだ優美な所が御座る、それより下になると其の身分に應じ  
一時の勢力を得て得意然といたし威張つて居れるも、自分では大方  
えらいつもりでも其だニガニガシイ事ぢや、僧侶ほど美しくない者  
は御座るまいよ、人には木の端のやうに思はれると清少納言が評し  
て書きたるのも誠に無理からぬ尤のことで御座る、勢盛んに威張り  
ちらした所で頼とえらいとも見えぬよ、増加聖人の申されたるやう  
に世間の人々の評判ばかりに心を苦めて、つまりが佛の御教にも違

ふのだらうと思はれる、それよりは純然たる世捨人として居る方が  
却つて僧侶らしくしてほしくよい點があるだらう。人としてはその  
容貌や様子の勝つて美しうありたいもので御座る、物をちよつと言  
ひましても聞きにくくない、それで愛敬がありて餘計なる事を申さ  
ないと云ふ風なる人はいつまでも向ひやつて居りましてもいやにな  
り飽ぐことがない。立派な人だと思つて居るのに案外に人格の劣り  
たる點が見えたりするのは残念に口惜しいことであらう、人品容儀  
などは生れつきに由るものだらうが、心と云ふものは、何うして賢  
い上にも尙ほ更に賢うになし移さうとすれば、移らないものであら  
うや。移るものぢや。顔だち心さまの宜しき人でも。才智と云ふも  
のがなかつたならば、品格が下り落ちて見へる。顔かたちは悪くし  
て憎さうである人々にも交りて影なくて氣劣りのせられるのは不本  
意なることでありませう。あつてほしいものは。誠なる文學の道、  
文章を作ること、和歌琴を弾し笛を吹くの道。又故實に通じ、禮法  
を司り宮中公事のこと人の手本となるほどであらうこそよいことであ  
らう。字を書くにも「ハタ」でなく走り書きし音樂にも多少達し。

【第二段】

◆聖の御代 聖天子の御代◆損はる 美なることを云ふ◆所  
つけらるゝ◆清ら 華  
せき 所狭きなり、物  
満ちあたりせまきの義  
なり◆うたて なさけ  
なしと云ふに同じ◆九  
條殿 九條師輔を云ふ  
太政大臣忠平の子にし  
て、朱雀、村上の兩朝  
に事ふ◆遺誠 は子孫  
を戒めし書なり、其の  
文に曰く「始自衣冠」

歌の拍手などもとりするに、いたましく不便もするものなれば男は下戸でない方がよろしい。

【第二段】

古への聖の御代の政をも忘れ、民の憂へ國の損はるゝをも知らず、萬に清らを盡していみじと思ひ、所狭き様したる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。衣冠より馬車に至るまで、有るに隨ひて用ゐよ、美麗を求むる事勿れとぞ、九條殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、公の奉りものは、疎なるを以て善しとすところ侍れ。

(講譯)

昔しの聖代の御世の政治が、凡べて儉約を以て主とせられたものであつたのを忘れて、人民が疲弊困難して如何にも悲嘆して居り、國家の損害ともなり國の命脈の廢頓し、すたれることを頓着せず、萬づ何事にも華美を盡して、これぞエライぞ

及子ニ馬車。隨有用  
之。勿求美麗。と  
◆順徳院 人皇第八十  
四代の天子にして、後  
鳥羽天皇の第三の皇子  
なり◆公の奉りものは  
疎なるを善しとす 順  
徳天皇の御撰禁秘抄の  
中に「天位着御物。以  
疎爲美」とあるに依  
る。

【第三段】

◆萬にいみじくとも  
萬事にえらく才藝すぐ  
れても◆さうさうしく  
落莫の意にて何となく  
物たらぬこと◆玉の卮  
底なき心地 文選の三

よと思ひ、驕奢その極度に達して、それをよい事とあたりせましと威張りちらまして居るやうな人は案外になさげなく、如何にも淺はかに分別のないやうに見ます。たとへ高位高官に居つても格別に美を盡すべき必要はない、其の衣冠を始め馬、車の類に至るまで、有り合はせの者を使つて決して立派なる事をするなどは、九條殿の遺し置かれました誠めの語にも見えて居るよ。順徳院が禁城中の事をお書きになりましたにも、公の奉りもの即ち天皇のお召しものは、質素なる方がよいのちやとありますよ。

【第三段】

萬にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうしく、玉の卮の底なき心地ぞすべき、露霜にしはたれて、所定めず惑ひありき、親のいさめ、世の謗りをつゝ、むに心の暇なく、往ふさ來るさに思ひ亂れ、さるは獨り寝がちに微睡む夜なきこそかなしけ

都賦序に『玉卮無用、雖寶無用』とあり、貴重なるも有用の者とならぬを云ふしはたれて、ぬれしはれて往ふさ来るさどつちとも定めぬこと、微睡むちよつとねをする事、**【第四段】**をかし、面白しのこと、**【第五段】**ひたすら一筋に同じ、**【第六段】**たはれたる方、浮氣の方、たやすからず、見下げられぬ、**【第七段】**わざなれ、事ぢやと云ふに同じ。

**【第四段】**後の世、後生若しくは未來といふに同じ、

れ。去<sup>さり</sup>迎<sup>むか</sup>ひたすらたはれたる方にはあらで、女に容易<sup>たやす</sup>からず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

**【講譯】**

凡べての何事をするにもすぐれてえらくあつても、戀愛を解しないやうな男は如何にも物足らず淋しく、所謂玉の卮に底のない心持がします、露や霜に濡れて何所と云ふ事も定めず迷ひあるき、親の意見や世間の人の謗りをさげ忍ぶことに絶えず心を苦め、何歎につけて煩悶し、それで逢ふ事が出来ないで寤寐する事が多くて、夜も寐にれずに歎き明かしますのは面白い事である。併しさうは云ふ者の全然愛に溺れるといふ風ではなくして女に輕々しく思はれませぬやうにあつてこそほしいものであります。

**【第四段】**後の世の事心に忘れず、佛の道にうとからぬこころにくし。

**【講譯】**

人間はたゞこの世のことばかりを考えず死後のことも常に心にかけて忘れず佛敎の道理も一通りは心得て居ると

佛敎に云ふ後世、うとからぬ、一通り心得て居ること、こころにくし、奥ゆかしいとの意なり。

**【第五段】**

**【不幸に】**不仕合にと云ふこと、**【頭剃し】**剃髮して僧尼となり、佛門に歸依すること、**【不束なり】**太つつか、不束なり、太く太く丈夫なること、**【思ひとり】**かく思ひきめむこと、**【有るか無きかに】**住む人の居るのやら居らぬやらわからぬやうに、**【さる方】**そのやうな方、**【顯基中】**

云ふのは奥ゆかしいもので御座る。

**【第五段】**不幸に憂ひに沈める人の頭剃しなど、ふつとかに思ひ取りたるにはあらで、有るか無きかに門閉じ籠めて、待つ事もなく、あかし暮したる、さる方にあらまほし、顯基中納言のいひけん、配所の月罪無くて見ん事、さる覺えぬべし。

**【講譯】**

不仕合で何か深い心配事が出来た人が、かの世間には往々ある極めて淺薄なる悟り方をして、早速頭を剃り落とすと云ふやうな遣り方をなさず、唯ソツと門を閉ぢて居るやら居らぬやらわからぬやうな住居をして、別に何の願ひ待てることのあると云ふのでもなく、悠々として目をあかしくらし、て目を立て、居る世を遁れるものならばそんな風にてありたいものであります。昔し顯基中納言の云つたといふ、左遷の罪人を置く配所で見ると深山遠島へ、罪人となつて、なく世を捨て行つて、閑かに月を見たい

納言 大納言源俊頼の子にして後一條天皇に事へて近習たり長元九年四月十七日天皇崩ぜさせ給ひ顯基時に齡卅七大原にて出家す配所 罪を得たる者が里離れの遠地に遷さるその行き居るところ。

【第六段】

●やんごとなからん 普通ならぬ高貴ならんと云ふことなり●前の中書王 醍醐天皇の皇子兼明親王のことなり 中書とは中務の唐名、王とは親王のことなり ●九條の太政大臣 九

といふ事は、誠にさうも思はれるでありませう。

【第六段】

我身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子と云ふもの無くてありなん。前の中書王、九條の太政大臣、花園の左大臣、皆族絶えん事を願ひ給へり。染殿の大臣も、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろきことなりとぞ、世繼の翁の物語には云へる。聖徳太子の御墓を豫ねて築かせ給ひける時も、此所を切れ、彼所を斷て、子孫あらせじと思ふなりと侍りけるとかや。

(講譯)

自分の身の常並ならぬ尊いものであらうとも、況して取り立て、數へ立られぬまでに卑しいものであらうとも。どちらにしても子供と云ふものはなくてもよいことであらう。前中書王、九條太政大臣、花園左大臣たちも皆血族の絶えるやうにとの

條伊通公の事●花園の左大臣 後三條天皇の御孫輔仁親王の御子有仁公のこと●族絶えん事を 子孫の絶える事の意なり●染殿の大臣 太政大臣藤原良房の事 染殿は良房の邸宅にして拾芥抄に「正親町の北、京極の西一町にあり」とあり●世繼の翁の物語 大鏡の事なり 藤原爲業の著、文徳天皇迄十四代百七十五年間の歴史物語●聖徳太子 用明天皇の皇子、既戸皇子とも上宮太子とも又八耳太子とも申すなり。

事を希望し願はれました。染殿大臣も「子孫のない方がよい、末裔の先祖より劣つたのは悪いことぢや」と云はれたと世繼の翁物語(大鏡)に書いてあります。聖徳太子がかれて自分の御墓を築かれた時にも、墓を築くものに對し此處を切れ、かしこを斷つて仕舞へ、自分は切つて子孫のないやうにしたいと思ふのだ、と仰せられましたたとやのことである。

【第七段】

化し野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住み果つる習ひならば、いかに物のあはれも無からん。世は定めなきこそいみじけれ。命あもるのを見るに、人ばかり久しきはなし。蜻蛉の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮らす程だにも、此上無う長閑けしや。飽かず惜しと思は、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。



【第七段】

◆化し野 山城國嵯峨の奥にありとかいふ、西行の歌に「誰とてもとまるべきかはあだし野の草の葉ことにすがる白露」とあり◆鳥部山 京都東山阿彌陀峰の麓なる火葬場のある處をいふ。化し野、鳥部山は「消ゆる」「立去る」を言はんがための枕詞共に人生の無常死滅を云ひたるなり◆住み果てる習ならば 人生死といふ事なく、何時迄も永く生存し得らるものならばの意なり◆物の哀 時にふれ、物に

住果てぬ世に、醜き姿を待ち得て何かはせん。命長ければ耻多し、長くとも四十に足らぬ程にて、死なんこそ目安かるべけれ。その程過ぎぬれば、形を愧づる心もなく、人に出で交らん事を思ひ、夕の日に子孫を愛し、榮行く末を見ん迄の命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなんあさましき。

（講譯）

人に死ぬると云ふことがなくして、あだし野の露と消えうせることもなく、鳥部の山の煙となりて立ち去ることもなく、いつまでもながくこの世に定住して居られるのが原則であつたならば、人は何の悲哀を感じる事もなからう、畢竟人生は定めなく無常なるのがよいのであります、凡そこの世の中に於ける生物なるものを見るに吾々たる人間程ながいきをするものはない、蟬

感じて起る哀傷◆いみじけれ 趣がある位の意◆蜻蛉 一に蟬とともかく、朝に生れて夕に死する極めて短命なる昆虫なり◆夏の蟬 小形にして翅に美麗なる黒紋あり、莊子に「春生 夏死 夏生 秋死、不見 四時之全」とあり◆長閑けしや ゆつくりとして長いものだから◆住果てぬ世に どうぞいつまでも生きて居られない世の中に◆醜き姿老ばれた姿◆命長ければ恥多し 莊子天地篇に「壽則多辱」と

のやうに朝生れて夕を待つて死に、夏の蟬のやうに春も秋も知らないうで死んで了ふものもあるではないか、物靜かにして居た時分には一ヶ年の歳月を暮らす間だつてそれは、此の上もなくゆつくりとして長いものだよ、いつまでも満足と云ふことがなくして、まだ生きたいまだ生きたいとれ、命を惜いと思つたときには、千年を生き過ぎすと誠に一夜の夢の心持よ、どうぞいつまでも無限には生きられることの出来ない世の中に、醜い老年の姿になる迄生きたつて何になる、命が長くつて久しく世の中に居れば恥辱のことが多い、長生きをしたいとて山々四十になるやならぬで死んだ方が見苦しうなふてよいだらう、四十位から上の年になると皺のよつた醜い容貌を恥かしいとの心もなく人中に出でたり、丁度夕方目の入らんとするやうに、命はかなき時に臨んで子孫を寵愛して、それが立派に成育するを見るまでは死にたくないなど、そんな事を當てに只無暗に戀深く生き居たがつて、慈悲も愛憐も知らないやうになつて行きますのは淺ましくいやなる事だハント……

あり目安かるべけれ見苦しなくつてい  
だろうその程四十  
歳位夕の日に白  
氏文集に「朝露食名  
利夕陽愛子孫」とあ  
り夕の日は離傾きての  
意命をあらまし長  
命をして居たいひた  
すら無暗に世を貪  
る心少しでも長く生  
きて居たいといふ心。

【第八段】

衣裳に薰物す 白氏  
文集に「爲君薰衣裳」  
とあり、薰物を衣類に  
たきこめること得な

【第八段】 世の人の心惑はす事色欲には如かず、人の  
心は愚なるもの哉。匂などは假のものなるに、暫く衣  
裳に薰物すと知りながら、得ならぬ匂ひには必ず心と  
きめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女の肌の  
白きを見て通を失ひけんは、まことに手足肌などの清  
らに肥え膏付きたらんは、外の色ならねばさもあらん  
かし。

（講譯）

世の中の人間の心を迷はし惑はせる事何んだと云つて、  
色情の慾には及ばない、人と云ふものは馬鹿なものであ  
るかな、香なんか云ふやうな者は假のものであるのに、暫らく衣裳  
に薰らして居るのだと知りつゝも、何んとも云へない芳しい香には  
屹度心を動される者ぢや。それから見ると久米の仙人が物を洗つて  
居た女の肌の白いところを見て空中を飛ぶの通力を失ひましたと云

らぬ 得もいはれぬ  
心ときめきす 心動く

【第九段】

久米の仙人 大和葛  
上郡の人、元享釋書に  
「入深山學仙法食  
松葉一服薛荔、一旦騰  
空、飛過故里、會婦人  
以足踏浣衣、其塵甚  
白、忽生梁心、即時墮  
落」とあり通 空中  
飛行の通力 外の色な  
らば 假の色でなく  
眞物の色であるから  
然もあらんかし一通を  
失ひけんは」につけて  
見るべし。

【第九段】  
めでたからん 美し

ふものは、女の手足肌膚の筋肉の工合がよく奇麗でありまして立派  
に發達し脂肪組織のゆたかなのは假の色でない眞誠なる色であるか  
ら尤なる事であらう。

【第九段】

女は髪をめでたからんこそ、人の目立つべ  
かめれ。人の程心ばへなどは、物うち言ひたる氣情に  
こそ物越しにも知らるれ。事に觸れて、うちあるさま  
にも、人の心を惑はし、凡て女の打解けたる寢も寢ず、  
身を惜しとも思ひ足らず、堪ふべくもあらぬ業にもよ  
く堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふが故なり。まことに愛着  
の道その根深く源遠し。六塵の樂欲多しと雖、皆厭離  
しつべし。其の中に只彼の惑の一つ止め難きのみぞ、  
老いたるも若きも、智あるも愚なるも、變る所なしと  
を見ゆる。されば女の髮筋を縫れる綱には、大象もよ

かつたら人の程  
品心ばへ氣質物  
越しにも物を隔て、  
聞いて居てもうちあ  
るさまにも平常の有  
様、不斷より異つた事  
は無きにも意打解  
けたる寝も寝ず夜も  
心を落ちつけて寝ず  
愛着の道 恩愛執着の  
情六塵の樂欲 眼耳  
鼻舌身意を六根とし、  
此六根に觸る、色聲香  
味觸法を六塵といふ樂  
欲は樂みと慾只彼の  
惑色慾をさす。

く繋かれ、女の履ける足駄にて作れる笛には、秋の鹿  
必ず寄るとぞ言ひ傳へ侍る。自ら戒めて、恐るべく慎  
むべきは此の惑ひなり。

(講譯)

女は髪の結び方が美しかつたら人が目をつけるであらう  
人品や氣質などはその物を言ふそぶりで陸で聞いて居つ  
ても大抵はどんなものだらうと推量が出来る、萬づの事につけて一  
寸としたる起居にも人の心を迷はし、總て女が夜もおちついて寝ず  
身だしなみのためには身命をも惜しいと思はずして、堪忍の出來さ  
うもないことによく堪忍しますのは唯自分の様子を善く見せやうと  
思ふからである。實際恩愛執着の情の絶ち難いことは木の根が深く  
て掘絶し難く水の源が遠くて汲み乾すことの六ヶ敷いやうなもので  
あります。六塵の樂慾は多くしても大抵厭ひ離れることが出来るで  
あらうその中に彼の色慾の迷ひだけは止めにくいことは、年をとつ  
た者でも若い者でも智慧のある賢いものでも馬鹿ものでも別に變り

【第十段】

家居の似合しく家  
の各部の建て様がよく  
調節を失はぬこと假  
の宿 一時の露命繋ぎ  
の宿よき人 心ある  
人位の意態とならぬ  
手を入れぬ自然の儘  
の簀子 竹の椽側  
透垣 間の透ひて向ふ  
の見える垣調度 手  
まはりの道具類 心に

【第十段】

家居の似合しくあらまほしきこそ、假の宿

りはないと見える、故に女の髪にて纏つた綱には大象も繋かれ、女  
のはいた足駄でこしらへた鹿笛を吹くと秋の妻戀ふ鹿が是非寄り集  
つて來ると言ひ傳へて居る。自から戒めて恐れ懼まなければならぬ  
者はこの色慾の惑ひであります。

りとは思へど興あるものなれ。よき人の長閑に住みな  
したる所は、さし入りたる月の色も一際しみしみと見  
ゆるぞかし。今めかしく綺麗ならねど、木立ち物古り  
て、故意とならぬ庭の草も心ある様に簀子、透垣のた  
よりをかしく、うちある調度も昔覺えて、安らかなる  
こそ心にくしと見ゆれ。多くの工匠の心を盡して磨き  
たて、唐土の日本の珍らしく、えならぬ調度とも並べ

くし 奥ゆかしい 得  
ならぬ 何とも云へな  
い 心の儘ならず 自  
然の儘でなく手を入れ  
て矯め作ること 〓さて  
もやは そんなにした  
つても 〓時の間の烟  
一時の烟といふ事、即  
ち火事があれば暫しの  
間に焼けて烟となつて  
しまふといふ意 〓うち  
見るよりも 一寸見て  
も 〓後徳大寺の大臣  
大炊御門右大臣公能公  
の子、左大臣實定公 〓  
寢殿 正殿 〓西行 佐  
藤右兵衛尉義清のこと  
後鳥羽上皇の北面武士

置き、前栽の草木まで心の儘ならず作りなせるは、見  
る目も苦しくいとわびし。さてもやは長らへ住むべき。  
また時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思  
はる。大方は家居にこそ、事ざまは推し量らるれ。  
後徳大寺の大臣の、寢殿に鶯居させじとて繩を張られ  
たりけるを、西行が見て、鶯の居たらむ何かは苦しか  
るべき、この殿の御心さばかりにこそとて、その後  
参らざりけると聞き侍るに、綾の小路の宮のおはしま  
す小坂殿の棟に、何時ぞや繩を引かれたりしかば、彼  
の例思ひ出でられ侍りしに、まことや烏の群れ居て、  
池の蛙を取りければ、御覽じ悲しませ給ひてなんと人  
の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしが。徳大

たりしが、保延三年遊  
世して、圓位と號し後  
西行と改む、歌聖なり、  
藤原康清の子 〓綾の小  
路の宮 龜山天皇の皇  
子、性惠法親王 〓さて  
は、それでは 〓いみじ  
くこそと 殊勝な御心  
がらであつたかと。

寺にも如何なる故か侍りけん。

(講譯)

我々の住む家の各部の建築の調節が似つかはしうありた  
いことはどうぞ暫時の命を繋ぐべきところの假りの宿と  
は思ふが面白いものよ心ある人がゆつくりと閑散に住んで居る所は  
さし入つた月の色も一層身にしてみても見えるものだ當世むきにはけ  
ばしくはないけれども庭の木々にも時代がついて態と造り植ゑたの  
でなく自然に生えて草も趣のあるやうに見え簀子すき垣などの便の  
あるところも面白く置いてある手道具類も古風にして安らかに奥ゆ  
かしく見えるものである澤山の木工左官等を入れて出来るだけ立派  
に造つた家から日本即ち内外諸邦の珍品などを並べ置き庭の内の  
植ゑごみの草木に至りますまで手入れをなし自然の形貌をためて造  
つたのは見るも苦しく煩はしいそんなにしたとていつまで生きてそ  
のところに住み居る事が出来るものであらうぞや又火事があると暫  
らくのうちに焼け失せて灰になつて仕舞ふものであらうちよつと見

〔第十一段〕

◆神無月 十月の異名  
◆栗栖野 山城國醍醐

てもそう思はれる大抵はその住んで居る家で主人の性格の推量が出るのである後徳大寺大臣が其の寢殿に鷹を止まらせまいやうにとて繩を張られたるのを西行法師が見られて鷹が止つても何も構ふことはないぢやあないか此の大匠殿の心はこれでわかつたと云つてその後は行かなかつたと聞くが緩小路宮のおいでになる小坂殿の棟にいっつであつたが繩を引かれたので端なく彼の後徳大寺大臣の例が思ひ出されたところがこれは彼の棟に鳥が群がつて居つて御池の蛙をとつたので宮が御覽になつて悲しいことに思し召されたるからこれから鳥をとまらせぬやうにと彼の繩をお引きになつたのだと或人が話したるからさてはさういふ勝れたる御心であつたかと思つたが後徳大寺殿の方にもそんな理由があつたのだらうがその理由は如何にあつたのであらうや。

〔第十一段〕

神無月の頃、栗栖野と云ふ所を過ぎて、

ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙なる苔の細道を

の附近。

◆露 ちつとも ◆関伽 水棚なり。

◆柑子 柑子蜜柑のこ  
と ◆枝も撓に 枝の撓む程に。

踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もる、笈の雫ならでは、つゆ音なふものなし。関伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、流石に住む人の在ればなるべし。斯くてもあられるよと、あはれに見る程に、彼方の庭に大なる柑子の木の、枝も撓になりたるが、周りを厳しく圍ひたりしこそ、少し事醒めて、この木なからましかばと覺えしか。

（講譯）

十月（陰曆）の頃に栗栖野と云ふ所を通つてある山里に尋ね道入つたことがあつた所が昔の生えた細道を随分奥ふかく踏み分け行つた所に心細げに住んで居る庵がありました木の葉に埋れて居る掛樋の雫の外には少しも訪れ尋ね来る者もない様子ではあるが関伽棚に菊、紅葉などを折り來たつて散らかして居るのがあればそれでも住める人があるのであらうと思ひこんな所でも住ん

【第十二段】

◆同じ心ならん人  
 く氣分の合つた人即ち  
 意氣投合した人◆うら  
 なく 心に表裏なく即  
 ち心隔てなく◆露違は  
 ざらんと 少しも相手  
 の心に違はない様にと  
 ◆さはやは思ふ さう  
 思ふや、さうは思はな  
 い◆然るからさぞと  
 斯う云ふ理由だから、  
 かうである◆嘆つ方  
 も とやかくと少々云

で居られるかと思つて感じて見て居ると彼方の庭に大きな柑子の木  
 に實がなりて枝も撓むやうになりたのがぐるりを嚴重に圍みてあつ  
 たので少し興がさめたこの木がなかつたらばなあと覺えられたよ。

【第十二段】

同じ心ならん人としめやかに物語りして  
 をかき事世の果敢なき事も、裏なくいひ慰まんこ  
 そ嬉しがるべきに、さる人あるまじければ、露違はざ  
 らんと對ひ居たらんは、獨りある心地やせん。互に言  
 はんほどの事をば、實にと聞く甲斐あるものから、聊  
 か違ふ所もあらん人こそ、我はさはやは思ふ、など争  
 ひ惡み、然るからさぞ、ともうち語らは、つれなく  
 慰まめと思へど、實には少し嘆つ方も、我と等しから  
 ざらん人は、大方のよしなしごと云はん程こそあらめ。

ひ争ふ方と◆我と等し  
 からざらん人 自分と  
 氣の合はざる人◆大方  
 のよしなしごと つま  
 らぬ世間話◆作しきや  
 不愉快であるの意。

實<sup>まこと</sup>やかなの心の友には、遙<sup>はるか</sup>に隔<sup>へだ</sup>たる所のありぬべきぞ信<sup>まこと</sup>  
 しきや。

（講譯）

身分も意氣も相投合して同じ心であるところの人としん  
 みりと話し合ひて面白い事も世の中の人生の無常なる事  
 も何事でも打ち明けて慰め合つたならば嬉しい事であらうがそんな  
 人はめつたにある者ではないからそれと云つてちよつとも人の心に  
 違はないやうに仕向けて話し合つて居たのでは一人で居る様な氣が  
 する事であらう互に言ふ事を成程尤だと聞く甲斐があつて而も少し  
 は違ふ所もある人と僕はさうは思はないなど言ひ争つたりかういふ  
 理由だからかうやうなる結論になるのであるなど論じ合つたりしたら  
 ば退屈も慰むだらうと思ふがしかし本當は少し意見が違ふといふこ  
 とも自分と氣の合はない人とはたゞつまらない事を言ひ合つてゐるの  
 ならば心慰めになつてよいだらうが眞實ある氣の合つた友に比べる  
 と遙かに隔たつた所があるであらうと思はれるのが不愉快である。

【第十三段】

見ぬ世の人 古人の  
こと 文選 梁の武帝  
の子、昭明太子の選、  
周末より六朝迄の詩文  
を萃む、三十卷あり 白  
白氏文集 唐の詩聖白  
樂天の文集、七十五卷  
あり、今の世行はる、  
は七十一卷 老子のこ  
とば 老子姓は李、名  
は耳、字は伯陽、老聃  
とも云ふ、楚國の人な  
り、「ことば」とは老子  
經のこと也 南華の編  
南華真經とも云ひ世  
に「莊子」と云ふ者は也  
三十三篇、南華は莊周、

【第十三段】

獨り燈火の下に文を展げて、見ぬ世の人  
を友とするこそ、此上無う慰む業なれ。文は文選のあ  
はれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、  
この國の博士どもの書ける物も、古へのはあはれなる  
事多かり。

(講譯)

唯ひとりで燈火の下にて書物をひろげて見ぬ古への世の  
人を友としますのは此の上もない心を慰めるところのこ  
とである書物の中では文選の面白い卷々白氏文集、老子經、莊子の  
著書などが宜しい日本の學者たちの書いたところのもでも昔しの  
ものに哀れに面白いのが澤山ある。

【第十四段】

和歌こそ猶をかきものなれ。あやしの  
しづ山賤の仕業も、言ひ出づれば面白く、恐ろしき猪

字は子休、宋の人 此  
國の博士とも 日本  
の博士たち、博士は博  
得業の人をいふ。

【第十四段】

山賤 樵夫のこと  
恐ろしき猪も 八雲抄  
に「寂蓮法師が云ける  
は歌のやうに、いみじ  
き物はなし、猪なとい  
ふ怖しきものをも、ふ  
すゐの床などいづれば  
優しきなり」とあり  
古き歌 古今集以下三  
代集などを云ふ 貫之  
が糸による云々 古今  
集第カ鞠旅部に紀貫之  
の歌として「糸による

も、臥猪の床といへば優しくなりぬ。この頃の歌は、  
一節をかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き  
歌どもの様に如何にぞや。言葉の外にあはれに氣色覺  
ゆるはなし。貫之が、糸によるものならなくに、とい  
へるは、古今集の中の歌屑とかや言ひ傳へたれど、今  
の世の人の詠みぬべきこととがらとは見えす。その世の  
歌には、姿詞此の類のみ多し。この歌に限りて、斯  
く言ひ立てられたるも知り難し。源氏物語には、物と  
はなしに、とぞ書ける。新古今には、残る松さえ峯に  
寂しき、といへる歌をぞ云ふなるは、誠にすこし碎け  
たる姿にもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時  
よろしき由沙汰ありて、後にも殊更らに感じ、仰せ下

ものならなくに別れ路の、心細くもおもほゆる哉」とあり。古今集紀貫之外數氏の撰、淳仁帝天平寶字三年より醍醐帝延喜五年迄の歌を奉む。歌屑とかや貫之の此歌を歌屑と批難せしは飛鳥井榮雅著古今集抄にもあり。その世の歌、古今集當時の歌、物とはなしに源氏物語には「糸によるものとはなしに云々とあり。残る松さへ新古今集冬の部、祝部仲成の歌として「冬きて山もあらはに木の

されける由、家長が日記には書けり、歌の道のみ古へに變らぬなどといふ事もあれど、不知や、今も詠みあへる同じ詞、歌枕も、昔の人の詠めるは更に同じ物にあらず。安くすなほにして、姿も清げにあはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の鄙曲の詞こそ、またあはれなる事は多かめれ。昔の人は、たゞ如何にいひ捨てたる言種も皆いみじく聞ゆるにや。

(講譯)

漢詩漢文前段に云つてあつたからそれにつけて漢詩文も面白いが和歌も矢張り面白いものである見苦しい農民や樵夫などのして居る事も歌にて言ひだせば面白い恐ろしい野猪でも臥猪の床といふとやさしうに聞えるよ此の頃は一寸一所のある一部分は面白く云ひかなひたものと見えるがあるけれど古代の歌のやうに言外に餘情がある面白いに出来て居ると思ふのはない様にと思は

葉ふり、残る松さへ峰に淋しき」とあり。衆議判、御歌所にて時の歌人寄集ひて批判するを云ふ。沙汰、風評、感じ仰せ下されける由、後鳥羽上皇御感ありたるをいふ。家長が日記、後鳥羽院の時の歌人源家長の御歌所の記録、いさや、如何であらうか。歌枕、和歌の枕言に詠み入れてよき名所の名、こゝでは詞のつゞき枕詞などの事をいふ。梁塵秘抄、後鳥羽天皇の御作、神樂、備馬樂の類を擇び集め

れる紀貫之が「糸によるものならなくに」と詠じたる歌は古今和歌集の中にあつて一番なつて居らぬつまらぬ歌だと云ひ傳へて居るが今の世の人の到底詠み得らるべき詞の姿とは見えないその時代の歌には歌の詞も斯う云ふ風になつたる類が多いそれをこの歌に限つてかやうに批難を言ひ立てられたのは如何にも不審なる次第ぢやよ源氏物語には「糸によるものとはなしに」と書いてある新古今集では「残る松さへ嶺にさびしき」といふ歌をその中の歌のくすぢやと云ふのは成程少し調子がくだけて見えるかも知れないがしかしこの歌も衆議判の時にはよい歌だと云つてその後も(後鳥羽天皇より)殊更に観感の由仰せ下されたといふことが家長の日記に書いてあるぢや歌の道ばかりは今も古に異りはないなど申します事もあるけれどどうであらう今の人も昔の人のやうに詠むことが能く出来やうか同じ詞や材料を使つてやつても昔の人の詠んだのは今のものと同じことぢやあないよ流暢にサラ／＼と素直に詠んであつて調子も高くその餘情も深く見えるわ梁塵秘抄にある神樂備馬樂など鄙曲の



たるもの、鄧曲の詞歌謡を云ふ、鄧は楚國の都。

【第十五段】

善きはよく 調度迄も善いものは都にあるよりも田舎では一層よく見える。常よりははかしくとこそ 平生都で見るときは田舎では一層目立つて見えるの貴。忍びて籠りたる人知れず参籠すること

言葉には又あはれに面白いのが澤山ある昔しの人には只如何に言ひ捨てたる言ひぐさなる一寸のものにでもどうして皆すぐれて聞えるのであらうや。

【第十五段】

いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ目醒むる心地すれ。其わたり此所彼所見歩き、田舎びたる所山里などは、いと目馴れぬ事のみぞ多かる。都へ便り求めて文遣る、その事かの事便宜に忘るな、など言ひ遣るこそをかしけれ。左様の所にてこそ、萬に心遣ひせられ。持てる調度迄善きはよく、能ある人容貌よき人も常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びて籠りたるもをかし。

【講譯】

何處へでも一寸旅に行つたのは目のさめるやうな心持ちのするものであるその近邊をあちこちと方々にあるいて

【第十六段】

神樂 内侍所にて行はる御神樂、一條天皇の御代に起り、隔年十二月に行はる。なまめかしく 優美で物の音 器樂のこと。筆樂 一に悲慄と云ふ其聲

【第十六段】

見ると田舎びた所や山里などは色々なる見慣れない事ばかり澤山ある都へ序のあるときに手紙を遣つてこれ／＼の物を此のたよりに忘れないで寄越せと言つてやるのは面白いものぢやそんな所では萬づの事に心遣ひがせられますものだ自分が持つて居る手道具類に至るまで善いものは一層よく見えるし藝能ある人容貌のよい人もいつも都で見るときよりは一層目立つて美しくえらく見えるお寺や神社などに人に知らせぬやうに忍びて参籠して居まするのも亦珍らしくつて面白いものである。

【第十六段】

神樂こそなまめかしく面白けれ。大方物の音には笛、筆樂、常に聞きたきは琵琶、和琴。

【講譯】

神樂と云ふものは優美で面白いものである大抵樂器の音聲には笛筆樂がよいよいつも常に聞きたいのは琵琶とあづま琴ぢや。

悲調を帯ぶるが故也、  
笛に似て堅に吹く樂器  
支那傳來なり。和琴  
一に吾妻琴と云ふ。

【第十七段】

佛に仕うまつる 讀經  
供養などすること。心  
の濁 佛敎で云ふ所の  
煩惱のこと。

【第十八段】

つゞまやか 約の字  
儉約のこと也。いみじ  
かるべき 優れたもの  
即ち立派な行といふ意  
許由 堯が其賢なる  
を見て、天下を譲らん  
とせしも受けずして去

【第十七段】 山寺にかき籠りて、佛に仕うまつるこそ  
つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。

（講譯）

人里を遠く離れた閑靜なる山の中の寺に參籠して佛に仕  
えて居ると退屈に無聊なることもなく心の濁りも自然に  
清くなる心持ちがする。

【第十八段】

人は己をつゞまやかにし、奢りを退けて  
財を持たず、世を貪らざらんぞいみじかるべき。昔よ  
り賢き人の富めるは稀なり。唐土に許由と云ひつる人  
は更に身に隨へる貯へもなく、水をも手してさゝげ  
て飲みけるを見て、瓢箪と云ふ物を人の得させたりけ  
れば、ある時木の枝に懸けたりければ、風に吹かれて  
鳴りけるを、喧がましとて捨てつ。又手にむすびてぞ

欠

# 欠

## 〔第二十段〕

◆出捨人 出家のこと  
 ◆ほだし 手足纏ひの  
 意◆持たらぬ身 持た  
 らぬ身。

## 〔第二十一段〕

◆沅湘日夜 唐の戴叔倫の詩「虚橋花開楓葉衰、出門何處望三京都、沅湘日夜東流去、不爲三愁人住少時」とあり沅水湘水共に川の

うれしさうなのは又面白いものであります。

## 〔第二十段〕

某なにがしとかや云ひし世捨人よすてひとの此の世のほだし持たらぬ身に、只空ただの名残なごりのみぞ惜しきと言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。

### (講譯)

なんと云ふ出家のかたが「この浮世には何も自分をつなぎとめる手足まとひのものはないが只自然界の移り變りに名残り惜い心持がする」と云つたが成程誠にさうも思へるであらう。

## 〔第二十一段〕

萬よろづの事は月見るにこそ慰むなぐさものなれ。或人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに、又一人、露つゆこそあはれなれと争あそひしこそをかしけれ。折かたに觸ふれば何かはあはれならざらん。月花は更さらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎くだけて清きよく流る、水の

名<sup>名</sup>〇嵇康 字を叔夜と云ひ、竹林七賢人の一也<sup>也</sup>〇山濤に遊びて、嵇康山濤に與へて交を絶ちし時の書中に「遊<sup>遊</sup>山濤<sup>山濤</sup>觀<sup>觀</sup>魚鳥<sup>魚鳥</sup>心甚樂<sup>心甚樂</sup>之<sup>之</sup>一行作<sup>一行作</sup>吏此事便廢<sup>吏此事便廢</sup>安能捨<sup>安能捨</sup>其所<sup>其所</sup>樂而從<sup>樂而從</sup>其所懼<sup>其所懼</sup>哉」とあり。

景色こそ、時をも分かすめでたけれ。沅湘日夜東に流  
れ去る、愁人の爲に住まること少時もせずと云へる詩  
を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も山濤に遊びて  
魚鳥を見れば心樂むといへり。人遠く水草清き所に彷徨  
ひ歩きたるばかり、心慰む事はあらし。

(講譯)

悲しみのある時でも愁ひのある時でもどんな時でも大抵  
の心配事は月を見るとその心が慰まれるものである或る  
人が「月ほど面白いものはあるまい」と云つたと云つたところが又一人は「露  
が一番に面白いよ」と云つて互に争ひをやつたと云ふ話があるがま  
ことに面白いことであるしかし世の中のことに面白いか面白くない  
とか云ふのは單にそれが月であるから又露であるからと云ふ理  
由のものではないその場合々に依りて何でも人の心に感興を起さ  
せる者だ月と花との面白さは云ふ迄もないが風と云ふものは殊に人

【第二十二段】

今様は 當世風のも  
の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>無<sup>無</sup>下<sup>下</sup>に<sup>に</sup>之<sup>之</sup>より  
下<sup>下</sup>無<sup>無</sup>しの意<sup>の意</sup>、むやみに  
位<sup>位</sup>の意<sup>の意</sup>〇木の道の工匠  
大工<sup>大工</sup>或は指物師<sup>或は指物師</sup>〇文の  
詞<sup>詞</sup> 文章<sup>文章</sup>或は手紙<sup>或は手紙</sup>の類  
をいふ<sup>をいふ</sup>〇只云ふ詞<sup>只云ふ詞</sup> 平

【第二十二段】

何事も古き世のみぞ慕はしき。今様は  
無下に卑しくこそなり行くめれ。かの木の道の工匠の  
作れる美しき器も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文  
の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき。只云ふ詞も口  
惜しうこそなりもて行くなれ。古へは、車もたげよ、

の心を動かさせるものである又岩にくだけて流れる水の有様は四時  
とも常に立派であるこの水にて思ひ出したるが古人の詩に「沅水湘  
水共に日夜を分たす東へ東へと流れてゆく去らむとして去り得ず愁  
に沈める人の爲には只暫らくも止まらぬ」と云ふ句があるのを見  
てしみぐと感したることがあつた嵇康と云へる人も山や澤邊に遊  
びて鳥や魚を見ると心が愉快になると云つたことがあるがそれは實  
際である人里を離れて靜かに水草のあるところの清いところを逍遙  
するほど其の心を慰めるものはあるまい。

生の常語 主殿寮の人数たて 主殿寮は燈燭松柴炭等を司る所にし、夜の行幸には庭燎を焼く事あり。先きには「人数立て」と云へばタイマツを焼く事と心得たるを、今は「立明し白くせよ」と云ふに至れりとの意 最勝講 五月吉日を卜して清涼殿にて東大、興福、延暦、園城の四大寺の僧に命じて最勝王經を講せしめらる、天下太平の爲めの御修法とぞいふ一條天皇の長保四年五月七月初めて行はる。

火か、げよ、とこそいひしを、今様の人は、持てあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の人数たてといふべきを、たちあかししろくせよ、といひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御講の廬とこそ云ふべきを、かうろといふ、口惜しとぞ古き人の仰せられし。

(講譯)

萬事昔しばかり慕はしうに思はれる當世風は極端に賤しくなつて行くやうであるあの指物師の造つた立派なる道具でも比べて見ると古代の道具の形の方が面白く見える手紙の言葉なども昔しの反古類を見るに美しく立派に書いてあるそれに今ばチヨツと云ふ言葉にも段々とがくしく賤しいところの言葉になつて行き居る昔しは車もたげよ火掲げよと云つた者を當世の人はもてあげよかきあげよと云ふ又主殿寮の人数立てと云はなければならぬのを立明白くせよと云ひ最勝講の御聽聞所を御講の廬と云ふのを今

【第二十三段】

九重 皇居のこと 世つかす 萬事頼れた世の有様に似つかすの意 露臺 内裏御殿の間の名 朝餉 天皇朝の御膳をいふ、茲では朝餉の間の事、清涼殿内の南にある二室なり 何殿、何門 内裏の中の諸殿、諸門を云ひたる也 小葺 上半分の格子戸、光を障ふるものにて神社佛閣等に今もあり 小板敷 狭き板間、今の椽側の類

は略して講廬といふにがくしい事ではあると或る年老ひたる人仰せられました。

【第二十三段】

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかすめでたきものなれ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小葺、小板敷、高遣戸などもめでたくこそ聞こゆれ。陣に夜の設けせよ、と云ふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、搔燈疾うよなどいふ又めでたし。上卿の陣にて事行へる様は更なり、諸司の下人共のしたり顔に慣れたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、此所彼所に睡り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なる物なりとぞ、徳

◆高遣戸 遣戸は引戸とも云ふ、普通の戸の類、高所にあるを以て高遣戸と云ふ◆陣 公卿達の坐席ある所武士の陣取の様に座する故に陣と云ふ◆夜の設け 灯などの用意する事◆夜の御殿 天皇の御寢所◆揺燈疾うよ 燈火を早くともせと云ふ事◆上卿 大臣、大中納言の公卿◆事行へる 惣奉行をして居るの意◆諸司の下人 百官職寮司の下に使はる、人々◆内侍所 三種の神器の中の神鏡を奉安せ

大寺の太政大臣は仰せられける。

(講譯)

衰へたる末の世とは云へるもの、矢張り九重の禁中の神々しいところの有様は世俗を離れて結構なる所がある、露臺、朝餉、何殿、何門などと云へるものは其の名が既に立派であるもので普通のところにはないものだから勿論ちよつと聞いて見ても立派らしいが、賤しいもの、所にもある小部、小板敷、高遣戸など云ふものでも禁中にあるものは又格別で立派なるものに聞えるなほ禁中のことを云ふと日暮れなどに主殿寮の役人が「陣に夜の用意をせよ」など云つて居るのはよいものである又これを陛下の御寢所では「かいともしようよ」など云ふ即ち早く燈をつけよといふのがその云ひ振がいかにもよいそれから儀式などの折に大臣や大納言中納言などの上卿が陣の坐で惣奉行をして居る有様は勿論百官の下々の人までが職務に慣れて何んでも知つて居る様な顔をして居るのも面白い随分寒い晩にそれ等の連中が夜どほしをして彼方此方に下

る神殿、今の賢所也、内侍の女官常に奉仕せしを以て内侍所と云ふに至る◆徳大寺の太政大臣 従一位藤原定基公後深草天皇の朝に仕ふ【第二十四段】◆齋宮 御歴代の天皇未婚の内親王を伊勢大神宮に奉仕せしめらるゝをば云ふ、其起源は崇神天皇の朝皇女豊鍬入姫命をして大神に奉仕せしめられしに初まる、齋宮の齋は伊勢の大神を齋き奉るの意◆野宮 嵯峨の有栖川にあり、齋宮の伊勢に赴

役人たちが居睡つて居るのをかしいものぢや内侍所の鈴の音は結構な上品なものでありますよと徳大寺太政大臣も仰せられた。

(第二十四段)

齋宮の野宮におはします有様こそ、優しく面白き事の限とは覚えしが。經、佛など忌みて、中子、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ捨て難くなまめかきものなれや。物古りたる森の景色もたゞならぬに、玉垣し渡して、榊に木綿懸けたるなどいみじからぬかは。殊にをかききは、伊勢、加茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松の尾、梅宮。

(講譯)

齋宮が伊勢へ御下りにならせ給ふ前に嵯峨の野の宮に居らるゝ有様は、これほど優美にして面白いものはないと思

き給ふ前、此處に籠りて潔齋せらる、蓋し齋宮に立給ふに三年の神事、三度の禊あり、先齋宮になるを卜定する事、齋院へ入らる、時禊あり、明年野宮へ入らる、時、禊あり又明年伊勢に赴かる、時禊あり、二年八月より翌年八月迄野宮におはします也。經佛など忌みて、延喜式第五齋宮忌詞に「内七言、佛稱中子、經稱染紙、塔稱阿良々伎、寺稱瓦葺、僧稱髮長、尼稱女髮長、齋稱片膳云々」と蓋

つた齋宮では經とか佛とか云ふことを忌み嫌つて佛の事を中子、經のことを染紙と申せるのも面白い凡べて神社と云ふものは捨てにく、優美なるものである年敷を立てて生ひ茂つた森の景色さへ普通でないのにも上に玉垣をつくりめぐらして櫛の枝に白木綿を掛たるのなどは、どんなものでも優美でないとは云はぬ神社の中でも取り分けて優美であるのは伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船吉田、大原野、松尾、梅宮などである。

〔第二十五段〕

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しび行交ひて花やかなりし邊も、人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人改りぬ。桃李物云はねば誰と共に昔を語らん、況して見ぬ古へのやんごとなかりけん跡のみぞいと果敢なき。京極殿、

佛事に關する詞を其儘云ふを忌みてかく云ふ也。なまめかし、優美な、たならぬ、普通で無い、面白いの意。玉垣、垣の事、玉は美稱。木綿懸けたるなど、櫛に白き木綿(櫛の纖維で造れる)をかけたるを云ふ。春日は奈良に、平野は山城國葛野郡に、住吉は攝津に、三輪は大和國三諸山に、貴船は山城國愛宕郡に、吉田は京都神樂岡に、大原野は山城國乙訓郡に、松尾、梅宮は共に山城國葛野郡にある神社なり。

法成寺など見るこそ、心ざしとゞまり事變じにける様はあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ御門の御後見、世の固めにて、行末迄と思し置きし時、如何ならん世にも斯ばかり禊せ果てんとは思してんや。大門金堂など近く迄ありしかど、正和の頃南門は焼けぬ。金堂は其の後倒れ伏したる儘にて、取り立つる業もなし。無量壽院ばかりぞ其のかたとて残りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、鮮やかに見ゆるぞあはれなる。法花堂なども未だ侍るめ

【第二十五段】

飛鳥川の淵瀨 大和國高市郡にあり、源を稻淵山に發し磯城郡初瀨川に會す、昔は淵瀨常に定まらざりし由、古今集にも「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨となる」とあり。常ならぬ世を引起す爲めに置きたる詞なり。野原 野原 桃李物云はれば、菅原文時の詩に「桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖」京極殿 御堂關白藤原道長の住みし所に在り、道長入道して後住みし所。心ざし留り

り。これも又いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、自から礎ばかり残るもあれど、定かに知れる人もなし。されば萬に見ざらん世迄を、思ひおきてんこそ果敢なかるべけれ。

（講譯）

我々人間の世は古歌にも云つてある通り飛鳥川淵瀨常ならぬやうに無常迅速の世であるから時を經事變り樂を云ふも一時悲しみと云ふも一時誠に變轉極りなく行き變り昔しは花やかに榮えて盛んであつたあたりも今では住む人もないもの毒い荒野原となり偶々家が變らなければそれに住む人が變つて居る桃や李は今も昔しに變らず美しく花は咲いて居れどこれには語るべき口を持たぬ誰れと共にその昔しのことを語らうやまして昔し貴い人の住まれた跡の荒れ果てたる所を見ると特にはかないものである道長卿の建てられたる京極殿や法性寺などを見ると昔しの人々が後の世まで

事變じ 古人の後の世迄傳はれかした願つた志は残つて居ても、其事物は變つて居る。御堂殿 道長 庄園多く寄せられ 寺領の田園多く寄せられ 御族 藤原氏の一族 御門の御後見 皇室の御後見即ち攝政、關白、大臣となつて輔國の任に當ること 大門 惣門の事 金堂 本堂のこと 正和 花園天皇の時の年號 無量壽院 法成寺にある阿彌陀堂 丈六の佛 丈一丈六尺の佛像 行成大納言 正二位大納言藤原行

と願つて居つた志が残つて居るが而もその事物が變つたる有様は悲しき感じを起させる、御堂殿（道長）が立派に立て、莊園も多く寄附して我が藤原家の一族こそは天皇陛下の御後見天下の固めたる守護者として永遠に立つべきものだと思はれたる頃はいつの世になつたとかう迄荒れ果てるものであらうとは思はれなかつたことであらうその大門や金堂などが近代まで存在して居たが正和の年號時代頃に南門は焼け失せてしまつた又金堂はその後古びて倒れて仕舞つたまゝで取り起さうとするものない、かういふことにて今は無量壽院のみが存在して居て一丈六尺の阿彌陀佛が九体貴い姿で並んで御座る行成大納言が書いた額兼行が書いた扁がハツキリと外から見えるのは悲しい事である法華堂などもまだ昔しのもので存在して居るがこれも亦ながくていつまでであるであらうかおつつけくだけてなくなるものであらうよ兔に角にまあ之だけでも残つて居るがこればかりのものさへなくなつて仕舞つたところは礎石位はあるけれどもそ



成、能書を以て聞ゆ、道風、左理と合せて日本三蹟と稱す。兼行、大和守藤原兼行、後冷泉、後三條二朝の大嘗祭の悠忌主基の屏風を書きし人也。法花堂、法花三昧を行ふ所、本尊は阿彌陀也。かばかりの各蹟だに無き所、法成寺の跡の如くに跡方の無き所はの意。萬に見さらん世、萬事見る事の出来ない死後の世。思ひおきてんこそ、計畫して置くこと。

【第二十六段】

風も吹きあへず 古今集に「さくら花疾く

れが皆何んのあつた所などと確かに知つて居れるものもないそれだから萬事につけて自分が見ることの出来ない死後の世の事まで計畫て置くのはつまらぬ事であらう。

【第二十六段】

風も吹きあへず移らふ人の心の花に、馴れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉毎に忘れぬものから、我世の外になり行く習ひこそ、亡人の別れよりも勝りて悲しきものなれ。されば白き糸の染まん事を悲しび、道の衢の分れん事を歎く人もありけんかし。堀川院の百首の歌の中に、昔見し妹が垣根は荒にけり茅花まじりの莖のみして、寂しき景色、さること侍りけん。

(講譯)

散りぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ。移らふ人の心の花。古今集に「色見えて移らふものは世の中の人心の花にぞありける」。我世の外になり行く、世上の心の外に移り變り行く事也。亡人の別れ、死別れ。白き糸の染まん事を墨子の語に「墨子見練絲而泣之、爲其可ニ以黄ニ可ニ以黒ニ可ニ以黄ニ可ニ以黒」道の衢の分れん事を楊子の語に「見達路而哭之、爲其可ニ以南ニ可ニ以北」堀川院の百首 權大納言藤

風が吹くと花はバラ／＼と散るしかしその花よりも更にはかなく風の吹くのも待たずして散つて行く人の心の花かく變り易いが常であるがしかもその一時の情に馴れて戀ひだの愛だのと騒いだるときの事を思ふとあはれと聞いた戀人のやさしい言葉は今も尙ほ昔しのまゝに忘れぬもの、いつかまた路傍の人となつてゆくのは亡き人となり行くものに別るゝ死別にも越すところの悲みであるされば墨子は白糸を見てはやがて染むべきものであらうことを悲み楊子は眞直な道を見てはやがて分岐すべきものであらうことを思ふて嘆いたと云ふことである畢竟此等は事の盛りの後の悲しみを達観した者である過去に葬り去られたる戀ひの悲しいおもひでは堀川院百首の中にもある、かつて相愛しあつたあの戀人は今はどうなつたことであらう、垣根は荒れてさびしい庭には茅花まじりに莖か咲きにほうて居るときさびしい景色であるそんなこともあつたであらう。

原公實卿が勳進にかゝるもの、茲に引けるは公實卿の歌也。茅花ちがやの花也。昔見し云々。昔通つて居た當時見た妻の家の垣根は美しかつたが、今は荒れ果て、茅の花交りに葦の花が咲いて居るのみである。

【第二十七段】

御國讓りの節會 天皇の皇位を皇太子に譲り給ふ時の節會、節會とは朝廷にて節日或は定れる公事ある時の宴會をいふ。内侍所三種神器の中の鏡を奉安せらるゝ所に賢所といふ、茲ては鏡の事也。

御國讓りの節會行はれて、劔、璽、内侍所、渡し奉らるゝ程こそ限りなう心細けれ。新院の御所、渡させ給ひての春詠ませ給ひけるとかや。殿守の伴の御奴よそにして拂はぬ庭に花ぞ散りしく。今の世の事繁きに紛れて、院には參る人も無きぞ寂しげなる。斯る折にぞ、人の心も顯はれぬべき。

（講譯）

天皇御即位の節會が行はれて三種の神器を（新帝）に御讓り渡しになさせ給ふときは此の上もなく心細い者である。花園天皇が御位を御讓りになつてから春の頃にお詠みになつたところの御製だとか「殿守の伴の造よそにして拂はぬ庭に花ぞちりしく」といふのがある當代の朝廷の御用の忙がしいのに取り紛れて御隱居遊ばされたる院の方へは參候する人もなきのは寂しさうである、こ

即ち劔、璽、内侍所は天位の御座たる三種の神器の事也。新院 花園天皇を申し奉る、おとり居させば天位を御讓りになることなり、文保二年（一九七八）二月の御讓位なり。殿守の伴の御奴云々 殿守は主殿寮の伴の御奴は主殿寮の役人、一首の歌の心は、主殿寮の役人共が院の御所を捨置いて顧みない故庭に櫻の花が一げに散亂して布いて居る。今の世 今帝即ち後醍醐天皇のこと。人の心も云々 今帝の時にぞ、今迄まめやか仕へた人々も其れが

んな時にこそ——今まで能く仕へた人の心も（眞實であつたが又時勢に詭ふ心であつたか）よくわかるものであらう。

【第二十八段】

諒闇の年ばかりあはれなる事はあらし、倚廬の御所の様など、板敷をきげ、葦の御簾を懸けて布の帽額あらくしく、御調度ども疎かに、皆人の装束、太刀平緒まで、異様なるぞゆゝしき。

（講譯）

天皇が崩御になつて國民等しく喪に服する間なる所謂諒闇の年ほど物悲しい事はまたとあるまいよ御息の間の御假御所の有様など板敷を低くさげ葦のおん簾を懸けて目のあらひ布の帽額を張りお手廻りの諸道具なども疎末に略され凡べての人の装束、太刀、平緒までがいつもとは變つた有様であるのはいましくしいことである。

誠心誠意であつたか、或は時代に阿る考へてあつたかよくわかるの意。

【第二十八段】

諒闇 天皇崩御ありて國民喪に服する間を云ふ。倚廬 諒闇中の假の皇居をいふ。禮記雜記上の註に「廬在中門外東壁倚木爲、故云倚廬」とあり。布の帽額 荒布を鼠色に染めて、御簾の上邊に横に張るものを云ふ。葦の御簾 平常は竹の御簾なるを諒闇には葦のを用ふ。裝束 諒闇の服色は鈍色。太刀

【第二十九段】

静に思へば萬に過ぎにし方の戀しさのみぞせん方なき。人静まりて後、永き夜のすさびに、何となき具足取りした、め、残し置かじと思ふ反古など破り捨つる中に、亡き人の手習ひ、繪書きすさびたる、見出でたるこそ、只其の折の心地すれ。此頃ある人の文だに久しくなりて、如何なる折何時の年なりけんと思ふはあはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心も無くてかはらず久しきいと悲し。

(講譯)

心を静かにして考えて見ると凡べて過ぎ去つた方のことは無暗に戀しい者である夜更けて人の寢静まつた後に秋の夜長の眠られないところから何と云ふ事もない手慰みにこれと云

黒作りに銀金具也。平緒 太刀につける緒を云ふ。喪中は無紋鈍色のを用ふ。

【第二十九段】

せん方なき 思ふまゝいとしても思はれて仕方が無いの意。人静まりて後 人の寢静まりて後。すさびに 手すさびに即ち手慰みの意。何となき具足 是と定めは無いがこれこれの道具類の意。其の折の心地すれ 故人が生前を書いた當時の様な心持がする。此頃あらん 今生き居る人。心も無くて 器物は無

ふきまりもつけず手當り次第にその邊の道具類を取り片付け残しては置くまいと思ふやうな反古類などを破つて棄てる中に今はもう死んで故人となつた人の書いた文字や繪などを見出すと丁度そのなりその文字や繪杯を書いた當時の心持がする死んだ人でなくとも生きて居る人の文でも書いてから久しくなつた後にこれはいつの年のどんな折に書いたのだなど思ひ出すはあはれの深い者であるその他久しく持ち馴れた道具類なども人は變るも無心の者は遂に變らず昔の儘で残つて居るがこれも誠にあはれを覺えしめるぢや。

【第三十段】

人の亡き後ばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便悪しく狭き所に數多あひ居て、後の業ども營みあへる、心あわたし。日數の早く過ぐる程ぞ物にも似ぬ。果ての日はいと情なう、互に云ふ事もなく、我賢げに物ひきした、め、散

心にして持主死するも遺愛の品空しく残りて昔に變らす久しくあるを云ふ。

【第三十段】

◆中陰 人の死後四十九日間をいふ人、死して未來世の中間に先づ五陰の形を得る故に中陰といふ◆後の業 死後の法事◆心あわたりし 心忙しい◆物にも似ぬ 物に譬へん方も無い◆果ての日 四十九日也、即ち中陰の最終日◆行き分れぬ 退散したの意◆あなかしこ 恐れ入つて謹んでの意◆かばかりの中に

々に行き分れぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。しかくの事はあなかしこ、跡の爲忌むなる事ぞなどいへるこそ。かばかりの中に何かはと人の心はなほ憂たて覺ゆれ、年月経ても、つゆ忘るゝにはあらねど、去る者は日々に疎しと云へる事なれば、さは云へど、其の際ばかりは覺えぬにや。よしなし事言ひて打ちも笑ひぬ。骸は氣疎き山の中に納めてさるべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆も苦むし、木の葉降り埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ、言問ふよすがなりける。思ひ出でゝ忍ぶ人あらん程こそあらめ、其もまた程なく失せて、聞き傳ふるばかりの末

欠

# 欠

常にたきしめた香の匂也。しめやかにしつとりと忍びたる氣情世を忍んで居る様子。よき程にて出で給ひぬい、加減で其立寄つた家から出で来て、事さまの優に覺えて、其家の有様が優美に見えたので、妻戸、寢殿造の家屋の四隅に在る開戸を云ふ、後世は殿の正面中間に在る開戸を云ふに至る、主客共に出入する戸口也。妻戸は端戸の義也。

戸を今少し押しあけて、月見るけしきなり。頓て駈け籠らましかば口惜しからまし。あとまで見る人ありとは如何でか知らん。斯様の事は只朝夕の心づかひによるべし。其の人程なく亡せにけりと聞き侍りし。

### (講譯)

九月の二十日頃のことであつた或人の誘ひを受けて夜通しをなし夜の明けがたまで月を見て歩いた事があつたがふと途中で立ち寄るべき所を思ひ出されて案内をなさせ或家に這入つた折柄荒寥たる暮秋の庭には露が一杯に降り居つて慙と炷いたのでは無い空炷の香の匂ひがしつとりと薰つて世を忍んで居る様子が甚だ風情である、よい加減で出で來たられたが餘りそのやうすが優美であると思つたので物のかげより暫らくの間見て居ると妻戸を開いて月を眺めて居る様子である、客が歸るとすぐ内に駈け這入つたならば残念であつたらうがこんな跡まで見る人があるとは何うして知つて居やうかういふ事は平生のたしなみの如何に由ることであ

【第三十三段】

◆今の内裏 冷泉萬里  
小路の皇居をいふ◆有  
職の人々 故實典禮に  
精通せる人々◆遷幸  
新殿に移御の事◆支輝  
門院 伏見天皇の母后  
藏原陪子、左大臣藤原  
實雄公の女元徳元年八  
月薨去◆閑院殿 御殿  
の名、二條の南、西洞  
院の西一町に在り◆櫛  
形の穴 俗に云ふ火燈  
口、書院などに造くる  
もの也◆葉の入りて  
五葉の松千葉の花など  
いへる字の意なるべし

らうその人は程なく死んだと聞いた。

【第三十三段】

今の内裏造り出されて、有職の人々に  
見せられけるに、何所も難なしとて、既に遷幸の日近  
くなりけるに、支輝門院御覽じて、閑院殿の櫛形の穴  
は圓く縁も無くてぞありしと仰せられける、いみじか  
りけり。是れは葉の入りて、木にて縁をしたりければ  
誤りにて直されにけり。

（講譯）

今の皇居が新たに造り出されて出来上つて宮中の故實を  
よく知つて居る所の人々に見せられたところが何所にも  
非難する所がないと云ふので最早天皇陛下が遷御に相成る日も近く  
なつた所が支輝門院が御覽になつて「閑院殿の櫛形の穴は圓くつて  
縁もなかつた」と仰せられたのは感じ入つた事であるこれは葉が入  
りて木にて縁を附けてあつたから全く間違つて居たのですぐお直し

になつた。

【第三十四段】

◆甲香 貝の名にして  
螺屬也◆武藏の國金澤  
神奈川縣久良岐郡に  
在り、横濱の南三里、  
海に臨み、金澤八景の  
勝なり。

【第三十四段】

甲香は、法螺貝のやうなるが、小さく  
て口の程の細長にして出でたる貝の蓋なり。武藏の國  
金澤といふ浦にありしを、所の者は、へなたり、と申  
し侍るとぞ云ひし。

（講譯）

甲香（かいかう）と云ふものがあるがこれは法螺貝のやう  
なもの、もつと小さくして口の所が細長く出でた貝の蓋  
である武藏の金澤の浦にあつたのをその地の者は「へなたり」と云つ  
て居つたと云ふことである。

【第三十五段】

◆文 手紙の意也。

【第三十五段】

手のわるき人の、憚らず文書き散らす  
はよし。見苦しとて人に書かするはうるさし。

（講譯）

下手なる人が構はずドシ／＼と手紙を書くのはよいが自  
分の字が見苦しいからと云つて他人に書かせるのは煩は

【第三十六段】

久しく音づれぬ頃、いかばかり恨むら  
通つて居た女の許へ久  
しく疎遠して居た時は  
の意仕丁 下部也奴  
僕の類を云ふ一人な  
ど 奴僕一人を雇いた  
いとさる心様したる  
人 女はそんな心掛の  
者がよいと。

しいことである。

【第三十六段】

久しく音づれぬ頃、いかばかり恨むら  
んと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、  
女の方より、仕丁やある、一人、など言ひおこせたる  
こそ、有難く嬉しけれ。さる心様したる人ぞよきと、  
人の申し侍りし、さもあるべき事なり。

（講譯）

長い間無沙汰をして居たころにどんなに恨んでゐたらう  
と自分が便をしなかつた事が胸に當つて云ひやるところ  
の言葉もない程濟まぬ心持で居ると女の方から下男が居れば一人賣  
してくれなど、言つて寄越したのはとりわけて嬉しいものである女  
はそんな心得の人がよいと或人が云つたのはさもあるべき事である

【第三十七段】

【第三十七段】

朝夕隔てなく馴れたる人の、ともある

ともある時 何か事  
のある時、儀式ばりた  
る時を云ふ實に  
しく 尤もらしくよ  
き人 よい心掛の人  
疎き人 平生疎遠なる  
人を云ふ。

時に、我に心を置き引き繕へる様に見ゆるこそ、今更  
斯くやは、など云ふ人もありぬべけれど、猶實に  
しく、よき人哉とぞ覺ゆる。疎き人の打ち解けたる事  
などいひたる又よしと思ひつきぬべし。

（講譯）

朝夕何の隔てもなく睦じうに馴れたる人のひよつとした  
時妙に自分に氣兼ねをして改まつて見える事と今更何も  
さう他人がましくするにも及ぶまいなど、云ふ人もあらうけれども  
自分は矢張りこれも尤もなることにてよい人だと思ふのである又平  
生は餘り親しくない人が偶々心安さうなることを云ふとそれからそ  
の人をよく思ふこともある。

【第三十八段】

害を買ひ煩を招く  
文選に「不懷實以買  
害今不飭表以招累

【第三十八段】

名利に使はれて、静かなる暇なく、一  
生を苦むるこそ愚かなれ。財多ければ身を守るに貧し。  
害を買ひ煩を招く媒なり。身の後には金をして北斗

金をして北斗を支ふとも 白氏文集五十一  
 に「身後堆<sub>レ</sub>金<sub>ヲ</sub> 枉<sub>レ</sub>北斗<sub>一</sub> 不如<sub>レ</sub>生前一樽酒<sub>一</sub>とあり、北斗は北斗星のこと也 金は山に捨て玉は淵に投ぐ 文選東都の賦に「捐<sub>レ</sub>金<sub>於</sub>山<sub>一</sub> 沈<sub>レ</sub>珠<sub>於</sub>淵<sub>一</sub>とあり 埋もれぬ名 身は死して地に埋めらるゝも名は埋れざるの義也、白氏文集に「龍門原上土、埋<sub>レ</sub>骨<sub>不</sub>埋<sub>レ</sub>名<sub>一</sub>とあり 〇やんことなき 高貴なる 〇いみじかりし賢人 大賢人也 文選嵇康が絶文書に「老子莊周

を支ふとも、人の爲にぞ煩はるべき。愚なる人の目を悦ばしむる樂しび、また味氣なし。大なる車、肥えたる馬、金王の飾りも、心あらん人はうたて愚なりとぞ見るべき。金は山に捨て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは勝れて愚なる人なり。埋もれぬ名を、永き世に残さんこそあらまほしかるべけれ。位高くやんことなきをしも、勝れたる人とやは云ふべき。愚に拙き人も、家に生れ時にあへば、高位に昇り奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人聖人、自ら卑しき位に居り、時に遇はずして止みぬるまた多し。ひとへに高き官位を望むも、次に愚かなり。智慧と心とこそ、世に勝れたる譽れも残さまほしきを、つらく思へば、譽を愛するは

ハ我師也、親ラ賤シキ職ニ居ル 〇世に留まらず 死するを云ふ 〇譽は又毀の因なり 韓退之李愿を送るの序に「與<sub>レ</sub>其譽<sub>於</sub>前<sub>一</sub> 執<sub>レ</sub>若無<sub>レ</sub>毀<sub>於</sub>其後<sub>一</sub>、與<sub>レ</sub>其樂<sub>於</sub>身<sub>一</sub> 孰<sub>レ</sub>若無<sub>レ</sub>憂<sub>於</sub>其心<sub>一</sub>とあり 〇身の後の名 死後の名聲也 晉書に「張翰曰使<sub>レ</sub>我有<sub>レ</sub>身後名<sub>一</sub> 不如<sub>レ</sub>即時一盃酒<sub>一</sub>とあり 〇智慧出で、は偽りあり老子に曰く「大道廢有<sub>レ</sub>仁義<sub>一</sub> 智慧出有<sub>レ</sub>大偽<sub>一</sub>とあり 〇煩惱 大智度論に曰く「煩惱者能令<sub>レ</sub>心

人の聞きを喜ぶなり。譽むる人毀る人共に世に留まらず。傳へ聞かん人またく速に去るべし。誰をか恥ぢ誰にか知られんことを願はん。譽は又毀の因なり。身の後の名残りて更に益なし。それを願ふも次に愚なり。但し強ひて智を求め、賢を願ふ人の爲に云は、智慧出で、は偽りあり。才能は煩惱の増長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは。まことの智にあらず、如何なるをか智といふ。まことの人は智もなく徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ徳を隠し愚を守るにあらず、もとより賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心を持ちて、名利の要を求むるに斯の如し。



煩二作レ惱故名二煩惱一、又曰屬レ嬌屬レ賦屬レ痴是名二煩惱一とあり、不可は一條なり、莊子の齊物論に基きて善惡、是非、可不可、然不然は、一に歸するを曰へる也、まことの人、眞人也、莊子逍遙遊に、「至人無レ己、神人無レ功、聖人無レ名」とあり、萬事は皆非なり、杜甫の詩に「嘆息ス人間萬事非ナルヲ」。

萬事は皆非なり、云ふに足らず。願おがふに足らず。

(講譯)

名譽利祿の奴隷となつて安靜に思案する暫くの暇もなく生涯の間我と我が心身を苦めるのは馬鹿な者である財産が澤山であつても身を守る爲にはならぬ却つて害を買ひ累ひを招く所の媒介である死んでからの故に財産を積み重ねて北斗星につかえる程にしても子孫の爲には却つて害があるだらう馬鹿な人が見て羨むのを樂むといふ事も又つまらない事である大きな車やよく肥えた馬金銀寶玉の装身具などいふものも識者が見れば何んだ馬鹿々々しいと見るだらう金は山に捨てよ珠は淵に投げ込めよだ利慾に迷ふのは甚だしいところの馬鹿な人ぢや埋もれない名を永く後世にまで殘すといふことは願はしい事である位の高い貴い身分の人ばかりをえらい人だといふべきではあるまいよ馬鹿なる何にも出來ぬところの人にてはよい家筋に生れ時運に際會すれば高位に昇りたい放題の驕りをする者もあるし非常な賢人聖智をもつた人でも自分で富貴を望まず極低い地位に居つて時運に際會しないでその儘になつた人

も亦多いのである無暗に高位高官になりたいと思ふのは利慾に迷へる者に次いで第二の馬鹿者である智慧才能に就いては後世に立派な名譽を残したいと思ふがよく考えて見ると名譽を好むものは世間の外聞を喜ぶものであるしかし褒めるところの人そしるところの人何れも世間に生き残つて居るものではなくその評判を傳へ聞く人も亦間もなく死んで仕舞であらう故に誰に恥かしいと思ひ誰に知つて貰ふ事を願ふの必要があるであらうかほめられるものは亦そしられる元である死んでから名が残つたつて少しもやくにたゝないこんな事を願ふのはその次に馬鹿なることであるだが是非共智慧がありがたい賢くなりたいと願ふ人のために云はうなら智慧が出間違ふと偽りになる才智藝能と云ふ者は學問稽古の苦み惱みが積み重なつたものである人聞きや學問して知つたのは本當の智ではないそれではどんなのを智と云ふべきであらうか可と不可は一つであそそれではどんなのを善といふべきだらうか大智の人は智もなく徳もなく傳へらるべき功もなく世に知られる者もないされば誰が知つて誰が聞き傳へる

〔第三十九段〕

法然上人 美作國稻岡の人、源空と稱す、淨土專念宗を唱ふ、坊號を法然坊といふ建曆二年正月寂す享年八十  
上人 高德の僧に附くる稱號、摩訶般若經に曰く「何レ上人ト名クル、佛ノ言ク、若シ菩薩一心ニ阿耨菩提ヲ

だらうか之は智徳のあるものを態と隠して馬鹿らしく見せかけて居るのではない元來賢いとか馬鹿とか利得とか損失とかいふやうな境界に氣をとめて居ないからである迷ひの心を以て名聞利慾を求め結果はこんなものである所謂人間萬事皆非なりだ彼是と云ふ價もなければ色々の事を願ふ値打もない。

〔第三十九段〕

或人法然上人に、念佛の時睡に侵されて、行を怠り侍る事、如何してこの障りを止め侍らんと申しければ、目の覺めたらん程、念佛し給へと答へられたりける、いと尊かりけり。また往生は、一定なりと思へば一定不定と思へば不定なりと言はれけりこれも尊し。又疑ひながらも、念佛すれば往生すとも言はれけり。これも亦尊し。

〔講譯〕

或人が法然上人に念佛のときれむたくなつて行ひをなま

行ヒ、心散亂セザレバ是ヲ上人ト名ク」と往生 安樂淨土の世界に轉生するを云ふ。

〔第四十段〕

入道 剃髮せるものを云ふ、入道は佛道に入るの義言ひわたりけれども 嫁にもらいたいと言ひ寄越したけれども。

〔第四十段〕

因幡の國に、何の入道とかや云ふ者の女、容美しと聞きて、人數多言ひわたりけれども、この女只栗をのみ食ひて、更に米の類を食はざりければ、かゝる異様のもの人に見ゆべきに非ずとて、親許さゝりけり。

〔講譯〕

因幡の國に何のなにがしの入道とか云へる者の娘がきりやうよく美人であると聞いて方々から澤山な人が嫁に買

〔第四十一段〕

賀茂の競馬 毎年五月五日京都と賀茂別雷神社境内馬場にて行ふ今は六月五日に之を行ふ堀河天皇寛治七年に始まる 雜人 有象無象 埒 矢來也 榜の木 木の名也、梅檀のこと、大なるは高二三丈に達す 法師 僧侶のこと 人木石にあらねば 文選鮑照が詩に

ひ受けたいといつて申込んだけれども此の娘たゞ栗ばかり喰べて少しも米の類をたべなかつたければこんな變り者は人に嫁入すべきものではないと云つて親がやることを承知しなかつたとの事である。

〔第四十一段〕

五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人立ち隔てゝ見えざりしかば、各々下りて埒の際に寄りたれど、殊に人多く立ちこみ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる榜の木に法師の登りて、木の又またに跪居つひはるて物見るあり。取り付きながらいたう眠りて、墮おちぬべき時に目を覺さす事度々なり。これを見る人嘲あざけりあざみて、世の痴者かな、斯く危あやふき枝の上にて安やすき心ありて眠るらんよといふに、我心こころにふと思ひし儘に、我等が生死しやうじの到來只今にもやあらん、

「人非木石豈無感」とあり。

それを忘れて物見て日を暮す、愚おろかなる事は猶勝まさりたるものをと言ひたれば、前なる人共、まことに左にこそ候ひけれ、尤も愚おろかに候ふといひて、皆後を見かへりて此所へ入らせ給へとて、所を去りて呼び入れ侍りにき。斯程の理ことわり、誰かは思ひ寄らざらんなれども、折柄の思ひかけぬ心地こころして、胸にあたりけるにや。人木石ひときせきにあらねば時に取りて物に感ずる事なきにあらず。

(講譯)

五月の五日に加茂の競馬を見たところが物見車の前に下人だちが立ちふさがりそれに隔てられて見えなかつたが皆のものが各々その車から下りて矢來のきばに寄つたけれどもそのもとほとりわけ入込みが多くてそれを押しわけて這入ることが出来るやうにもなかつた丁度そのときに向ひの方にある梅檀の木に僧侶が登つてその木のまたになつた所にとりついて見物し居るのがあつ

たが木に取りつきながら居睡りをして居つて居睡りをして落るやうになつては目をさますことが度々であつたこれを見る人が嘲けり賤んで「馬鹿よかやうなあぶない木の枝の上で安心して眠つて居やがるのよ」と云つて居つたので我もふと心に思つたまゝに「我々が死ぬるのは今かも知れないのだがそれを忘れて競馬の見物をして日を暮らすなんてい馬鹿な事あの木の枝の上の坊主以上やあないか」といつたら前に居る人達が「誠にさうで御座いました馬鹿な事に違ひは御座いません」と云つて皆後に振り向いて「この方へいらつしやいまし」と自分の席を退いて呼び入れて呉たこれ位の理屈は誰だつて氣がつかないことはないのだがこんな見物の騒ぎの真最中で思ひがけない事をいはれた氣がして自分たちの腕に思ひ當つたのだらうか人木石にはあらずで時にとりて物に感ずることなからんやである。

〔第四十二段〕

〔第四十二段〕

唐橋中將といふ人の子に、

行雅僧都と

◆唐橋中將 參議中將源清惟 ◆教相 眞言宗にて經論聖教を學ぶなを事相とし、行ひをするる病 體内の毒氣が上にのぼりて、頭部に瘡を生じて甚だ醜き面貌となる病氣也 ◆二の舞の面 俗人の舞の面也「安摩」といふ舞の次に舞ふを二の舞と云ふ、色赤く怖しき面なりと云ふ ◆坊のうち 僧坊の内也、僧侶の居所を云ふ。

て、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやうく長くる程に、鼻の中塞がりて、息も出で難かりければ、様々に繕ひけれど、煩はしくなりて、目眉額なども腫れまどひて、うち覆ひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、只恐しく鬼の顔になりて、目は頂の方に付き、額のほど鼻になりなどして、後は坊のうちの人も見えす籠り居て、年久しくありて、猶煩はしくなりて死に、けり。か、る病もあることにこそありけれ。

(講譯)

唐橋中將と云へる人の子に行雅僧都と云つて經論聖教の學生を教へて居る僧があつた皮膚の腫上る持病があつて段々と年を取るに隨ひ鼻の中が腔塞がつて呼吸が困難だつたから色

々療治をしたが平癒せぬのみか重くなつて目も眉も額も何處が何處  
だかわからない位に腫れて目の上にふさがつたから物も見えずこの  
舞の時に被る面の様に見えたのが只怖ろしい鬼の顔の頂上の邊につ  
き額の所が鼻になりしたのでそれから寺中の人にも顔を合せず一  
室に引き籠つて居て永年生きて居たが餘計重くなりてとうとう死ん  
で仕舞つたこんな病氣も世間にはあるのだつた。

〔第四十三段〕

春の暮つ方 暮春の  
頃 艶なる空 清朗艶  
陽なる天氣 格子 格  
子戸 打ち解けたれど  
くつろいだ風をして居  
ること、容儀を取りつ  
くろはぬをいふ。

〔第四十三段〕

春の暮つ方、長閑に艶なる空に、賤し  
からの家の奥深く、木立物古りて、庭に散り萎れたる  
花見過し難きを、さし入りて見れば、南面の格子皆下  
して寂しげなるに、東に向きて妻戸のよき程にあきた  
る、御簾の破れより見れば、貌好げなる男の年二十ば  
かりにて打ち解けたれど、心悪く、長閑やかなる様し  
て、机の上に書を繰り廣げて見居たり。如何なる人な

欠

# 欠

官の最上位也、推古天皇の時初めて、これを置かる。

【第四十六段】  
◆柳原 京都七條停車場附近の地名也。

第四十六段

ければ、切杭きりくわの僧正と言ひけり。いよく腹はら立ちて、切杭を掘り捨てたりければ、その跡あと大なる堀にてありければ、堀池ほりいけの僧正とぞ言ひける。

(講譯)

公世の二位の兄様で良覺僧正と云はれたのは極怒りつほい人であつた寺の傍に大きな榎があつたから人が榎木僧正と云ふ渾名をつけた僧正はこれを知つてこんな名は不都合極まると云つてその榎を切らせて仕舞つた所が跡にまだ根が残つて居つたので今度はきりくひの僧正と云つたそこで愈々腹を立て、そのきりくひをも掘り棄てさせたすると今度はその跡が大きな堀になつてまた堀池の僧正と云つたとのことである。

【第四十六段】 柳原ほとりの邊に、強盜法印と號する僧ありけり。度々強盜にあひたる故に、この名を付けにけるとぞ。

〔第四十七段〕

◆清水 音羽山清水寺也、京都市松原通清水坂の東端にあり法相兼眞言宗にして本尊は十面千手千眼觀世音也  
◆尼 女の出家 ◆や、噓ひたる時 「や、」は暫くの意也 ◆比叡山 山城と近江の境、京都の東北にあり、高さ二八六〇尺、山上に延暦寺(天台宗)あり ◆斯く

〔講譯〕

京都の柳原の邊に強盜法印と渾名せられた僧があつた。ちよつと聞くと強盜でもした人間のやうであるが實はたゞ強盜に遇ふた、めにこんな名をつけたるものであると云ふことである。

〔第四十七段〕

或人清水へ參りけるに、老いたる尼の行き連れたりけるが、道すがら、くさめくと言ひもて行きければ、尼御前、何事を斯くは宣ふぞと問ひけれども、答へもせず、猶言ひ止まざりけるを、度々問はれてうち腹立ちて、や、噓ひたる時、斯く禁厭はねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡山に稚兒にておはします、たゞ今も噓ひ給はんと思へば、斯く申すぞかし、といひけり。有難き志なりけんかし。

〔講譯〕

或る人が清水寺へ參つたとき、年とつた尼と道つれにな

禁厭はねば、子供が暫くの間クサメをして止めざる時は傍にある者クサメくと云ひて其クサメの度毎に語を合はすこと也。

〔第四十八段〕

◆光親卿 正二位權中納言按察使藤原光親卿の事、堀川の中納言をも云ひ、承久三年六月出家して西親と云ふ ◆

〔第四十八段〕

光親卿、院の最勝講奉行して侍ひけるを、御前へ召されて、供御を出だされて食はせられけり。物食ひ散らしたる衝重を、御簾の中へさし入れて罷り出でにけり。女房、あな汚な、誰に取れとてか、

つたがくさめくと云ひながら行くからその男はあまり不思議の思ひをして「尼さん一体それは何の事を仰せられるのですか」と問ふたけれども尼はその答へもせず矢張りその「くさめく」を續けるのであつたが男はまたしてもその理由を問ふたあまり度々に問ふたので尼は遂に怒つて「噓をしたときかうしてまじなひをしなければ死ぬと云ふからやつて居るので實は自分の養育した若君様が比叡山に居られるのだが今にも噓をされるかと思ふと氣が氣でないからかうやうにして絶えずまじないをして居るのだ」と云つた世にも珍らしい厚い心がけであるであらう。

院 後鳥羽院を申し奉る  
最勝講 毎年五月中、日を卜して五日の間、宮中に於て金光明

最勝王經を講じて天下泰平を祈る儀式  
奉行 命を奉じて取行ふ役人

供御 天皇の御膳部

衝重 食器にして重箱の如き折敷也  
有職の振舞 供御を戴いて

食ひたるまゝ御簾の中に差入たるは大切なる奉行の役目を重じてなしたる事と上皇御賞美の詞也

〔第四十九段〕

老來りて始めて道を

など申し合はれければ、有職の振舞やんごとなき事なりと返す。感せさせ給ひけるとぞ。

〔講譯〕

光親卿が後鳥羽上皇の最勝講の係長となつて居つた上皇が御前にお召になつて御飯を出だしてたべさせられたる所がたゞ散らした容器を御簾の中へ差し入れた儘で急いで罷り出た宮女たちがまあ汚ない誰に片付させる積りであらうやと言ひ合はれたので上皇は聞かれて故實家のする事は感心なるものであると何遍もくりかへしてお感じ遊ばされたことである。

〔第四十九段〕

老來りて、始めて道を行せんと待つ事勿れ。古き墳多くはこれ少年の人なり、測らざるに病を受けて、忽ちに此の世を去らんとする時にこそ、始めて過ぎぬる方の誤れる事は知らるなれ。誤りと云ふは他の事にあらず、速にすべき事を緩くし、緩くす

年を取つてから始めて佛道を修行せんと也

古き墳多くは 古人の句に「待老來一始莫學道、古墳多是少年人」とあり

東の間も 只の一時も、草を刈りて束ぬる間の時間を云ふ也

聖 聖僧の事

禪林の十因 禪林は寺名也、東山永觀堂也 永觀律師の作れる往生十因を云ふ曰はく「一廣大善根故、二衆罪消滅故、三宿緣深厚故、四光明接取故、五聖衆護持故、六極樂他生故、七三業相應故、八三昧

七三業相應故、八三昧

べき事を急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり。その時悔ゆとも甲斐あらんや。人はたゞ無常の身に迫りぬる事を、心にひしと懸けて、束の間も忘るまじきなり。さらばなどか此の世の濁も薄く、佛道を勉むる心も忠實ならざらん。昔ありける聖は、人の來りて自他の要事をいふ時答へて曰く、今火急の事ありて、既に朝夕に迫れり、とて、耳を塞ぎ念佛して終に往生を遂げたりと、禪林の十因に侍り。心戒と云ひける聖は、餘りに此の世のかりそめなる事を思ひて、靜に跪居ける事だになく、常は躡まりてのみぞありける。

〔講譯〕

年をとつてから今更氣がついたやうにはじめて佛道の修行をなさうなどと云ふ氣ではゆかぬ死ぬのは何にも老ば



發得故、九法身同體故  
十隨順本願故」

れたるものばかりではない古い墳は多くこれ少年の墳ではないかウツカリして暮らして居る中に思ひがけない病氣になつて忽ち死なうとするやうな場合にはじめて我が過去のあやまれることに氣がつきあやまりと云ふのは外でもない健康であつたふだんに早くせればならなかつたことをうっかりして捨て、置いたり又すて、置いてもよい差し支へのないものを無暗に急いでしたりなどしてすべてやりそこなつたことの悔しいのであるさればとて末期になつて悔んだとて遂にこれは何の役にも立たない人はたゞ無常の身におしよせてくることを心にしつかりとりとめて暫くの間も忘れてはならぬものであるさういふ風にして居ると浮世の利慾に迷ふことも少なく佛道を勤める心も忠實になるであらう昔しの或る僧は人が訪れて来てお互に必要な用事を云ふとき『實は今非常な急用があつてそこに差迫つて居るので』と云ひ耳をふさいで念佛をしたかうして遂に死んで仕舞つたと云ふことであるこの話は永觀律師の作つた住生十因と云ふものに載せてある又心戒と云ふ高僧はこの世をかりそめにてあまりに

〔第五十段〕

◆應長 花園天皇の御時の年號(一九七一)◆  
率て上り 連れて上り  
◆白川 京都の地名◆  
西園寺 西園寺太政大臣實兼の邸宅◆院 院の御所◆東山 洛東一帶の地を云ふ◆安居院 京都の地名◆上さまの人 四條より上(北)の方の人◆院の御棧敷 昔一條大路に賀茂祭の時の行列を御見物なされるために院の棧敷を設

はかないものであることを思ひてちよつとでも靜かにおちついて居つたこととはなくいつも常にしやがんでのみ居つたとの事である。

〔第五十段〕

應長の頃、伊勢の國より女の鬼おにになりたるを率ひて上りたりと云ふ事ありて、その頃二十日ばかり、日毎ひごとに、京白川の人、鬼見おにみにとて出で惑まどふ。昨日は西園寺さいおんじに参りたりし、今日は院へ参るべし、只今は其所そこ々々になど言ひあへり。正ただしく見たりといふ人もなく、虚言うそといふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみ言ひ止やまず。其の頃、東山より、安居院の邊へ罷り侍りしに、四條より上かみさまの人、皆北を指して走る。一條室町むちまちに鬼あり、と匂のいしりあへり。今出川いまでの邊より見やれば院の御棧敷ごせきの邊り、更に通り得べうもあらず立ち込み

けありたる也。この徴候、二三日人の病ふ當時の流行病の前兆といふ事。

たり。早く跡なき事にはあらざめりとして、人を遣りて見するに、大かた逢へる者なし。暮る、迄斯く立ち騒ぎて、果ては鬭争起りて、あさましき事どもありけり。その頃おしなべて、二日三日人の病ふ事侍りしをぞ、彼の鬼の虚言は、この徴候を示すなりけりと言ふ人も侍りし。

〔講譯〕

應長の年號の頃に伊勢の國より女が鬼になつたのを伴れて上京したと云ふ噂があつてその頃廿日程と云ふものは毎日京白川の人鬼を見に行くと云つて方々へ出であるいた昨日は西園寺さんに行つた今日は院へ行くだらう今は何處そこに居るなど云ひ合つた儘に見たと云ふ人もないが嘘だと云ふ人もない貴人も賤民も只鬼の事ばかり評判をして止めないその時分東山から安房院の近邊へ行つたところが四條から上の方の人が皆北を向つて走りなが

〔第五十一段〕

◆龜山殿 龜山天皇御讓位後山莊を嵯峨の龜山の麓に立て、御隠居あり之を龜山殿といふ  
◆大堰川 丹波國保津川の下流、嵯峨嵐山松尾を過ぎて桂川となる  
◆宇治の里人を召して

ら一條室町に鬼が居ると騒ぎ合つて居る今出川の邊から見わたすと院の御棧敷の邊は少しも通られさうにもない程混雜して居るはじめから無根の風説でもなかつたのだと思つて人を見せにやると大抵鬼に遇つて歸つたものはない日暮までこんなに騒ぎ立つてしまひには喧嘩が起つて仕方もないことが色々あつたその頃大抵の人が二三日病氣をしたので彼の鬼が來たと嘘の評判は世に流行病のある前兆であつたのだと云ふ人もあつた。

〔第五十一段〕

龜山殿の御池に、大井川の水を引入せられんとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くの錢を賜ひて數日に營み出だして掛けたりけるに、大方旋らざりければ兎角直しけれども、終に旋らで徒らに立てりけり。さて宇治の里人を召して拵らへさせられければ、安らかに結ひて參らせたりける

宇治は京都府久世郡宇治町、宇治河畔にあり、此地は水車を以つて名あり、地人多く水車の構造に巧なるをもつて召されて修理せしめられたる也。やんごとなき 尊い

【第五十二段】

仁和寺 御室をいふ山城國葛野郡花園村に

が、思ふやうに旋りて、水を汲み入る、事めでたかりけり。萬に其の道を知れる者は、やんごとなきものなり。

(講譯)

龜山殿の御池へ大井川の水を引かうと云ふので大井の土民に命じて水車を作らしめられたこの時民には澤山の錢を賜ひて數日にして出来上つたところが愈々かけて見るとさつぱりまわらぬでいろく直したけれどもとうとう廻らすそのまゝ空しく立つて居たそこで今度は宇治の里人を召して同じく水車を作らしめられたが今度は無造作に作り上げて而もそれが思ふやうにまわつて立派に水を汲み入れた宇治は流石に水車の名所だけあつて矢張りうまい何でも専門と云ふものは尊いものである。

【第五十二段】

仁和寺に或る法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺えて或時思ひ立ちて、た

り、眞言宗御室派の大本山。石清水 男山八幡宮の事也、山城國綴喜郡木津川南岸の丘陵上にある神社、官幣大社也、清和天皇の貞觀年中宇佐八幡宮を此地に勧請せられしに初まる。極樂寺 高良神社と共に男山の麓に在り極樂寺は八幡宮護國寺の別當安宗の開山たり。高良 武内宿禰を祭る神社。神へ参るこそ石清水の八幡宮に参詣するが年來の本意。先達はあらまほしき石清水へ参ると出て

一人持杖詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍への人に逢ひて、年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん、床しかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山迄は見すとぞ言ひける。少しの事にも先達はあらまほしきことなり。

(講譯)

仁和寺に居た或法師が年をとるまでかの有名なる男山八幡宮に参詣したことがないので甚だ残念に思つて居つたが或る時いよく思ひ立つて只獨りテクテク歩いて参詣したそして極樂寺といふ高良とかいふ麓にある末社だけを拜んで肝腎なる八幡宮へは参らずに名高い八幡宮とはこんなものかと早合點して歸つて仕舞つたさて仁和寺へ歸つてから朋輩に語つて云ふには「長らく

肝心な石清水に参詣せ  
で歸りしは不案内なり  
しによる、故に少しの  
事にも案内者は入るも  
のなりとの意也。

【第五十三段】

各々遊ぶ事 童が法  
師の列に入るに就ての  
宴會を開きし也 足鼎  
三本足の鼎也火鉢の一  
種也 塞るやうにする

を 鼎の中に頭の入り  
難きを強いて押入れる  
事也 大方抜かれず  
少しは抜けたるも大  
部分は抜けざるを云ふ  
感ひ なるたへまは  
る也 響きて堪へ難け  
れば 鼎を割らんとす  
る爲めの響のために痛  
み甚しく堪へ難きを云  
ふ 三足なる角 鼎を  
サカサマに冠りしを以  
て其三本足が上向ひて  
角の如くなれる也 ぐ  
もり聲 こもり聲に  
てハツキリしない聲の  
こと 聞くらんとも覺  
えず 傍へ泣いて居る

思つて居つたことをとうくしとげました又特別でこれまで人から  
聞いて居つたにも増して尊いやうに思ひましたところが爰に只一つ  
合點のゆきかれるのはあすこへ参つた連中が誰も彼れも皆山へ登り  
ましたあれは一体どうしたんでせう自分も内々行つて見たいやうな  
氣もしましたが元來神へ参るのが目的なのだから山までは見ません  
でした馬鹿な話で自分のまゐりたいと思つたところは遂に参らずど  
うでもよい所を拜んでそれで満足して歸るこれも畢竟誰も教へてく  
れる人がなかつたからだ一寸したことでも案内者と云ふものは必要  
である

【第五十三段】

これも仁和寺の法師、童の法師になら  
んとする名残りとして、各々遊ぶ事ありけるに、酔ひて  
興に入る餘り、傍らなる足鼎を取りて頭に被ぎたれば  
塞るやうにするを、鼻を押し平めて、顔を差し入れて

舞ひ出でたるに、満座興に入る事限りなし。暫し奏で  
後抜かんとするに、大方抜かれず。酒宴事醒めて、  
如何はせんと感ひけり。兎角すれば、首のまはり缺け  
て血垂り、たゞ腫れに腫れ満ちて、息も塞りければ、  
うち割らんとすれど、容易く割れず。響きて堪へ難か  
りければ、かなはで爲べきやうなくて、三足なる角の  
上に帷子を打ち掛けて、手を引き杖をつかせて、京な  
る醫師の許に率て行きける。道すがら、人の怪み見る事  
限りなし。醫師の許にさし入りて、對ひ居たりけん有  
様、さこそ異様なりけめ、物を言ふも、ぐもり聲に  
響きて聞えず。斯る事は文にも見えず、傳へたる教も  
なしと云へば、また仁和寺へ歸りて、親しき者老いた

聲が本人には聞えて居る様にも見えない。枕上 枕元 缺け穿けながら 耳鼻の缺けて跡に穴のあきたる様になりたるをいふ

る母など、枕上により居て泣き悲めども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に或者の云ふやうは、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも命ばかりはなとか生きざらん。只力をたて、引き給へとて、藁の蒂をまはりに差し入れて金を隔て、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺げ穿けながら抜けにけり。辛き命儲けて、久しく病み居たりけり。

(講譯)

これも仁和寺の法師が稚兒が法師になる前の名殘だと云つてみんなして遊んだが酒に酔つて面白かつた餘り傍にあつた足のついた火鉢をとつて頭にかぶつたらつかへるやうであつたのを身を推して平たくして無理に顔をその中にさし入れて舞ふて出た所がその席に居る人は皆大層面白がつたところが暫らく舞を奏してから顔を抜かうとすると大部分抜けないので酒宴の面白味かさ

めてどうしやうと皆困つた兎や角動かして居ると首のまわりがすれて血が垂れて方々が一面に腫れて呼吸がつかつたので火鉢を割うとしたところが容易に割れないで頭に響いて辛抱が出来なかつたら抜くことは出来ず何う仕様もないので火鉢の三足が角のやうになつた上へ紗のきれを掛けて手を引いて杖をつかせて京都の醫者のところへ伴れて行つたが道々人が不思議相に見ること限りもない醫者の所へいつて醫者と向ひ合ひつゝ居たやうすはそれこそ變つて居たらう物を云ふものも籠り聲に響いて聞えず全体こんなことは醫書にも書いてないし療治の方も傳つて居ないと醫者が云ふので又仁和寺に伴れ歸つて親戚や朋友年老つた母親などが枕元に寄り集つて泣き悲んで居るが火鉢の中へは聞えて居ると思はれないさうかうして居るうちに或者が云ふには假令耳や鼻が切れて無くなつても命だけは助からぬ事もあるまい只力を出して引張りなさい藁の心を顔の廻りへ挿し入れて火鉢の金を隔て、居いて頭もちぎれる程引張つたら耳や鼻は缺けて肉が掘れはしたかそれでも抜けたのでやつとのこと

【第五十四段】

御室 仁和寺のこと  
 いみじき稚兒 大變  
 美しい稚兒、稚兒とは  
 寺にありて未だ得度せ  
 ざる少年を云ふ  
 如何かして能あ  
 る 藝能ある 風流の  
 破籠やうのもの やさ  
 しい優美な辨當様なも  
 の 箱風情の物 箱の  
 やうなもの 雙の岡  
 山城國葛野郡に在り、  
 嵯峨野より京郷へ至る  
 途中にあり 御所 仁  
 和寺の事也、仁和寺の

命を拾つたがその後永いこと病氣をして居つた。

【第五十四段】

御室にいみじき稚兒のありけるを、い  
 かで誘ひ出だして遊ばんと謀む法師どもありて、能あ  
 る遊び法師どもなど語ひて、風流の破籠やうのもの懇  
 ろに營み出で、箱風情の物に認め入れて、雙の岡の  
 便よき所に埋み置きて、紅葉散らしかけなど、思ひ寄  
 らぬ様にして、御所へ参りて、稚兒を唆かし出でにけ  
 り。嬉しく思ひて、此所彼所遊び巡りて、ありつる苔  
 の筵に並み居て、いたうこそ困うじにたれ、あはれ紅  
 葉を焼かん人もがな、驗あらん僧たち、祈り試みられ  
 よなど談合ひて、埋みつる木のもとに向きて、數珠お  
 し擦り、印ことくしく結び出でなどして、苛甚く振

門跡は代々法親王諸務  
 を總括せらる、故に御  
 所と云ひし也 苔の筵  
 青苔一面に生じて筵の  
 如くなれるを云ふ  
 いたうてこそ困うじにた  
 れ 甚しく草臥れた  
 あはれ紅葉を あ、誰  
 か紅葉を焼いて酒をた  
 る人はないかとの意、  
 白樂天の詩に「林間煖  
 酒焼紅葉、石上題詩  
 拂緑苔」とあり 驗あ  
 らん僧たち 加持祈禱  
 の靈驗ある僧たち 印  
 眞言宗にて、指にて  
 種々の形を作り、呪文  
 を唱へて 觀想するこ

舞ひて、木の葉を掻き除けたれど、つや／＼物も見え  
 ず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく、山を求  
 れども無かりけり。埋みけるを、人の見置きて、御所  
 へ参りたる間に盗めるなりけり。法師ども言の葉なく  
 して、聞憎く諍ひ腹立ちて歸りにけり。餘りに興あら  
 んとする事は、必ず興無きものなり。

(講譯)

御室なる仁和寺に非常に愛らしき稚兒があつたが之をい  
 かにもして誘だして遊ばうとせるところの法師があつた  
 葉の出来る法師ども仲間に入れて一生懸命にしやれた破籠のやう  
 なものを拵へ箱なやうな者に入れて双の岡に遊ぶに都合のよさ、う  
 な所に埋めたそしてその上に紅葉など散らしかけて全く知れないや  
 うにしかけて御所へ稚兒を呼びに行つたさていよく連れて來たの  
 で一同に嬉しがつて彼方此方と遊び廻つた上側の苔の生えた所に居

とを印を結ぶと云ふ  
苛甚く振舞ひて  
くしく振舞ひて  
や／＼一向山を求  
れども山中を探求し  
たけれども言の葉な  
くて呆れ果てて聞  
憎く諍ひ腹立ちて側  
から見て聞にくい程の  
言ひ争ひをして

【第五十五段】

◆遺戸 敷居鴨居の溝  
にはめて左右に開閉す  
る様造れる戸にして、  
今の戸障子の構造に同  
じ◆蕪 日除の戸◆定

並び「どうも疲れた誰か紅葉を焚いて酒を暖めるんでもないかなど  
うだ一つ祈れる人は祈つて見たら」など互に云ひ合つて前埋め置い  
た木の下の方へ向いて珠数を押し摺り印象を大層らしく結び出した  
りして仰々しい仕業をして木の葉を掻き除けたが一切何物も見えな  
い所が違つたのかと思つて堀らない所もない程山中を探したけれど  
も無かつた埋めて居るのを人が見て置いて法師たちは御所に参つて  
居る間に盗んだのであつた法師たちは呆れて物も云はれず聞きにく  
ひ言ひ争ひをなして腹を立て、歸つたあまり面白がらさうとする時  
はきつと面白味のないものである。

【第五十五段】

家の造りやうは夏を主とすべし。冬は  
如何なる所にも住まる。暑き頃悪ろき住居は堪へ難き  
事なり。深き水は涼しげなし。浅くて流れたる遙に涼  
し。細かなる物を見るに、遺戸は蔀の間よりも明し。

めあひ 評論すること

天井の高きは冬寒く燈火暗し。造作は用なき所を造り  
たる、見るも面白く、萬の用にも立ちてよしとぞ、人  
の定めあひ侍りし。

(講譯)

我々その住居する家の造り方は夏の場合に適するやうに  
するがよい冬の寒い間はどんな家でも住んで居られるが  
しかし夏の場合となり暑くなると悪いところにはとても住めないも  
のであるそこで一口に夏に適するやうにと云つても泉水などのあま  
り水の深いのは涼しさうにもない浅い水がチヨロ／＼と音を立て、  
流れて居る方がすつと涼しいそれからこま／＼とした造作について云  
ふと蕪の間よりは遺戸をつけた方が明るし又天井の高いのは冬は寒  
く夜は燈がくらしいすべて造作は單に實用と云ふことばかりも主とせ  
ず平生には用のない所を作つて置けば見て眼面白く又時には何かの  
用に立つて都合がよいとも人が評しあつて居つた。

【第五十六段】

◆あいなけれ イヤな

【第五十六段】

久しく隔たりて逢ひたる人の、我が方

ものである。次機の人。第二流下の人。下品な人。白地に。假初の義。よき人。上品の人。見る事のやうに。現に目前に見る事の様。に針小棒大に云ふ意也。品の程。話す人の人柄がの意也。おのが身に引きかけて。自分の事を話の引合に出して。定規にして言ふのはの意。いと佻し。大變聞きにくい。

にありつる事、數々に残りなく語り續くるこそあいなけれ。隔て無く馴れぬる人も、程經て見るは恥かしからぬかは。次機の人、白地に立ち出で、も、興ありつる事として、息もつぎあへず語り興するぞかし。よき人の物語するは人數多あれど、一人に向きて云ふを自ら人も聴くにこそあれ。よからぬ人は誰ともなく數多の中にうち出で、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひの、しる、いと亂がはしをかき事をいひても、いたく興せぬと、興なきことをいひても、よく笑ふにぞ、品の程量られぬべき。人の容姿の善し惡し、才ある人はその事など定めあへるに、おのが身に引きかけて言ひ出でたる、いと佻し。

(講譯)

久し振りに逢つた人が自分の方にあつたところの事のみを色々と話して分るのはイヤなものである。どんなに隔てなく馴れて親しき人だとも云つても時たつて逢ふのは耻かしくないであらうか。下等なる人はちよつと外出して來ても今日これ、の事があつたといつて息もつが面白がつて話をするもの。上品な人が話をするときは人が澤山居つてもその中の一人に向つて靜かに云ふのを自然と引き入れられて外の人も聞くであらう。下品な人は誰れと云ふこともなく澤山の人の中にシャリ／＼出て今見る事のやうに輪をかけて話をするのを座中のものが皆同じやうに笑ひ囁きなどして如何にも亂雑である。可笑しい事を云つてもそんなに面白がらないのと面白味のないことを云つてもよく笑ふのとて人品は大概その推量は出来るものである。人の姿の善惡才智ある人はそれ／＼の事であるなど批評しあつて居るときに自分の事をその定規にして言ひ出だしたのは甚だ聞きにくいものである。

【第五十七段】 人の語り出でたる歌物語の 歌の惡き

【第五十七段】 歌物語 歌に關する



話 本意なけれ つまらぬものである 其道の道也 いみじと思ひ 歌道の心得ある者はそんなつまらぬ歌をよいと思つてはの意かたはら痛く 笑止千萬の意 即ち傍観するに得堪へない事

〔第五十八段〕

道心 佛道の心得也 後世を願はん 後生安樂を願はん也 生死を出でん 生死の境涯を超越せんと 勇ましくはあからむ 勇ましくはあからむの意 心は縁に

こそ本意なけれ。少しその道知らん人は、いみじと思ひては語らじ。總ていゝとも知らぬ道の物語りしたる傍痛く聞きにくし。

(講譯)

人が歌について話をなす時に肝腎のその歌が悪いのは實にがっかりするものである少しも歌のことがわかつた人ならばそんなものをよいと思つては話さないであらうさうじて何も知らぬの其の事の道理を話しますのどうも聞きにくいものである

〔第五十八段〕

道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交るとも、後世願はんに難かるべきかはといふは、更に後世知らぬ人なり。實にはこの世を果敢なみ、必ず生死を出でんと思はんには、何の興ありてか朝夕君に仕へ、家を願る營みのいさましからん。心は縁に引かれて移るものなれば、静ならでは道は行じ難し

引かれて移る 縁は俗縁也、即ち心は外界の情實によつて移り變るとなり 道は行じ難し 佛道の修行は出来にくい 其のうつはもの 其の器量 昔の人 釋尊の苦行さては當時の阿羅漢等の苦行を云ふ 世にあらぬ業 世に生きて居られないから 世を食ふ 浮世の慾望を食ふこと 背むる 甲斐なし 世に背いて 佛門に歸した甲斐が無い 何故に 世を捨ててか也 流石に 併し乍ら 紙の衾

其のうつはもの昔の人に及ばず、山林に入りても飢を助け、嵐を防ぐ便無くては、あらぬ業なれば、自ら世を食ふに似たる事も便に觸ればなとか無からん。さればとて、背ける甲斐もなし、左ばかりならば、なじかは捨てしなどいはんは、無下の事なり。流石に一度道に入りて、世を厭はん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢の設け、藜の羹、いくばくか人の費をなさん。求むる所は易く、その心早く足りぬべし。形に恥づる所もあれば、さはいへど悪には疎く、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れん事こそあらまほしけれ。偏に貪る事を努め

紙の如く薄い衣具<sup>一</sup>鉢の設け 一鉢の御飯也、三衣とて僧の齋食は一鉢に限れり<sup>一</sup>黎<sup>一</sup>形に恥づる所もあれば 自分の剃髪染衣の姿に恥ぢて惡に親まざるを云よ<sup>一</sup>菩提 梵語にて「道」或は「智慧」と譯す、佛書に「道之極者稱曰菩提」とあり。

て、菩提に赴かざらんは、萬の畜類に變る所あるまじくや。

（講譯）

佛道を守る心さへあつたなら別に住む所にもよるまい俗家に居つても社會の俗人と交つて居ても後の世の安樂を願ふことが出來やうといふ人はしも後世と云ふことを知らぬところの人である眞誠に此の世の中をばかなく思つて生きたりまた死んだりすることがある境涯より必ず出離れやうと思ふならば何の面白味があつて毎日奉職をしたり家族のために事業をすることに氣が進まうか兎角心は外界の情實に引がされて移り變はるべき者である故閑靜にして身一つで居なくては佛道修行と云ふことは到底出來ぬその器量が昔しの修行者に及ばずして世を捨て靜な山林へ遁入つても餓ゑを満たし嵐を防ぐため衣食がなくてはとても生きて永くこの世には居られないから自然生活上の慾望を食るに類した事も時によれば無いことはなからうしかしそれでは世に背いた甲斐もないそんなこ

〔第五十九段〕

大事を思ひ立たん人 人間一生の大事たる佛道修行を志す人<sup>一</sup>本意を遂げずして 其本來の考を達し得ないで

〔第五十九段〕

大事を思ひ立たん人は、さりがたき心にかゝらん事の、本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。暫し此の事果て、同じくは彼の事沙汰し置きて、しかくの事人の嘲りやあらん。行末難なく認

④さながら 其儘にし  
 て沙汰し置きて 結  
 着をつけて置いて 行  
 末難なく 行末の生活  
 上に難儀の無い様に用  
 意をしてから發心せん  
 の意 ④年頃もあれはこ  
 そあれ 今迄永年發心  
 しないで 此儘でなれ  
 ばなれたのであるから  
 ④少し心ある際は 少  
 し位佛道に心ある分際  
 の人々は ④一期 一生  
 ④水火の攻むるよりも  
 止觀七に曰く「若シ無  
 常ノ洪水猛雨、掣電ヨ  
 リモ過ギタルコトヲ覺  
 ラハ山海空市逃レ避ク

め設けて、年頃もあればこそあれ、その事待たん程あ  
 らじ。物騒しからぬやうになど思はんには、得去らぬ  
 事のみいと、重なりて、事の盡くる限りもなく、思ひ  
 立つ日もあるべからず。大概人を見るに、少し心ある  
 際は、皆此の豫期にしぞ一期は過ぐめる。近き火など  
 に逃ぐる人は、暫しとやいふ。身を助けんとすれば、  
 恥をも顧みず、財をも捨て、遁れ去るぞかし。命は人  
 を待つものかは、無常の來る事は、水火の攻むるより  
 も速に遁れ難きものを、その時老いたる親、幼き子、  
 君の恩、人の情、捨て難しとて捨てざらんや。  
 (講譯)  
 苟も大事を思ひ立つ程の人は外の事などに氣を散らして  
 ぐづぐづとして居るやうでは駄目である己むを得ぬ心に

ル處ナシ」

かゝる事でもそんなものは凡べて之をそのままに捨て、先づその最  
 大目的に向つて邁進するものであるそれを何歟に心を引かれてちよ  
 つとまあこれをやつておいてとか同じことなら彼の事も片付けておい  
 てとか或は何々のことはやつておかぬと人が何とか云ふかも知れぬ  
 將來の事もチャンと始末しておかればならぬ何も今更あわてなくて  
 も直に出来ることであるからさうせき立てることもいるまいなど、  
 考えると己むを得ぬことばかりが重なり來たつて俗事の絶える暇も  
 なく到底自分の目的は達せられない天体世の中の人を見るに下賤の  
 ものは云ふまでもなく少し物のわかつた連中は大抵かう云ふ豫期で  
 以て一生を過ごして仕舞ふやうであるしかしよく考えて見るがよい  
 近所に火事などが起つて逃げだすときには一寸待つてくれなど、の  
 んきなことはとても云へないことである身を助けるためには恥もな  
 ければ財産もない只一生懸命に逃げだすばかりぢや人間の用事がど  
 うのかうの言つたところで命は決してそれを待つものではない而も  
 無常のくることはこの火事やこの洪水どころの話ぢやない忽ち電光

〔第六十段〕

真乘院 仁和寺の塔  
 中也 盛親僧都 傳記  
 不詳 僧都は僧正に次  
 ぐ僧官也 談義の座  
 講釋の座也 二七日  
 十四日 即二週間也  
 異様に用ふる事なく  
 芋魁を買ふより外の事  
 に用ふる事なく 三萬  
 疋 三貫也 とは何物  
 ぞ 白瓜とは何物ぞ  
 學匠 學問の意 宗の  
 法燈 眞言一宗の棟梁

のやうな早さで押し寄せて来て逃げだすなど云ふ暇はないそんな急  
 なる場合となつて今更老いたる親だの幼ない子だの君の恩だの人の  
 情けだのとぐづぐづしたることは到底云つて居れることではないよ  
 固より皆棄て、仕舞はればならぬのである

〔第六十段〕

眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智  
 者ありけり。芋魁といふ物を好みて多く食ひけり。談  
 義の座にても、大なる鉢に堆高く盛りて、膝もとに置  
 きつゝ、食ひながら書をも讀みけり。病ふ事あるには、  
 七日二七日など療治とて籠り居て、思ふやうによき芋  
 魁を選びて、殊に多く食ひて、萬の病を癒しけり。人  
 に食はする事なし、只一人のみぞ食ひける。極めて貧  
 しかりけるに、師匠死にさまに、錢二百貫と坊一つを

の意 世を軽く思ひた  
 る 世間を馬鹿にした  
 るの意 時非時 佛家  
 の法 一日一食也 即ち正  
 午に食ふ之を「時」と云  
 ふ「非時」とは其以外  
 の食事を云ふ、後には  
 晩飯の事を云ふに至る

譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋  
 を芋魁の錢と定めて、京なる人に預け置きて、十貫づ  
 づ取り寄せて、芋魁を乏しからず食しけるほどに、ま  
 た異様にも用ゐる事なくて、その錢皆になりにけり。  
 三百貫の物を貧しき身にまうけて、斯くはからひける、  
 誠にありがたき道心者なりとぞ人申しける。この僧都  
 或る法師を見て、しろうるりといふ名を付けたりけり。  
 こは何物ぞと、人の問ひければ、さる物を我も知らず、  
 若しあらましかば、此僧の顔に似てんとぞ言ひける。  
 この僧都容美く力強く、大食にて、能書、學匠、辯説、  
 人に勝れて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれた  
 りけれども、世を軽く思ひたる曲者にて、萬自由にし

て大方人に随ふといふ事なし。出仕して饗膳などに着く時も、皆人の前据る渡すを待たず、我前に据るぬれば、頓て獨りうち食ひて、歸りたければ、獨りつい立ちて行きけり。時非時も人に等しく定めて食はず。我食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、睡たければ晝もかけ籠りて、如何なる大事あれども、人の云事聴き入れず。目覺めぬれば、幾夜も寝ねず。心を澄まして嘯き歩きなど、尋常ならぬ様なれば、人に厭はれず、萬許されけり。徳の至れりけるにや。

(講譯)

真乘院に盛親僧都といつて貴いところの智者があつたが芋頭が好きで澤山たべた講義の席でも大きな鉢に高く盛り上げて膝下に置いて食へながらお経を讀んだ病氣にかゝることがあると一週間か二週間程養生すると云つて引き籠り居り思ふやうよ

い芋頭をよつて一層多たべて大抵の病氣をなほした而も人にたべさすることはなく唯一人だけで以てたべた極めて貧乏であつたが師匠が死にぎはに錢二百貫と坊一つをかたみに譲られたのがその坊を百貫にて賣り彼是三百貫を芋頭の代金と定めて京都に居た知人に預けて置いて十貫がづ、取りよせて芋頭を不自由なく食へて居るうちに外の事には少しも使はないでその金がすつかりなくなつて仕舞つた三百貫の金も貧乏な身分で儲けてかういふくらしたしたのは誠に珍らしい道心者であると世の中の人々が評判である此の僧都が或る法師を見て「白うり」といふ名をつけた白うりと云ふのはどんなことであるかと人に聞いて見るとそんなものは俺も知らない若しあつたら此の僧の顔が似て居るであらうといつた此の僧都は容貌が美しく力が強く大食で字を書くこと學問も辯説も人よりはよく出來てその宗旨の法燈とも云ふべき人であつたから同寺中でも大切に思はれて居たが世の中を茶にして居る個人で何でも我儘にして世間に従ふことがない佛事などいつて馳走をされるときも皆人の前へお膳が揃

〔第六十二段〕

〔飯〕 飯を炊く器也、御産の時御殿の棟より之を轉がす事より、皇子御誕生には南に落し皇女御誕生には北へ落すを例とす。〔御胞衣滯る時〕 胞衣は胞内にて子の敷物となるもの

〔第六十一段〕

御産の時、飯落す事は、定れる事にはあらず。御胞衣滯る時の禁厭なり。滯らせ給はねばこの事なし。下さまより事起りて、させる本説なし。大原の里の飯を召すなり。古き寶藏の繪に、賤しき人の子産みたる所に、飯落したるを描きたり。

〔講譯〕

宮中で御産のあるときに飯を家の棟から落すことがあるのであるがこれは何々でさうすると定まつたことではな

即ち子敷飯と相通すエナの滯りて出でざる時飯を落して禁厭する也。下さまより事起りて飯を轉す風習は下様より起つたとの意。させる本説。さしたる根據。大原の星の飯。大原の飯大原は洛北の地大原は大腹と相通じて之れ一種の禁厭となる也。

〔第六十二段〕

〔延政門院〕 後醍醐上皇の皇女、悦子内親王の御事。〔二つ文字〕 牛の角文字。い。直。

く御胞衣の滯つてよく出でないときするところのまじないであるされば御胞衣の滯らないときにはこのことではないのであるこの事は又下々の方から起つたることと云ふよりどころもないことだ飯は大原から御取りよせになるのである古い寶藏の繪に賤しい者が子を産んだところに飯をおとした所を書いたものがある

〔第六十二段〕

延政門院幼くおはしましたしける時、院へ参る人に、御言傳として申させ給ひける御歌、ふたつ文字牛の角文字直な文字曲み数字とぞ君は覺ゆる。こひしく思ひまいらせ給ふとなり。

〔講譯〕

延政門院がまだ御幼少であつた時に父の帝なる後醍醐上皇の御所にまゐる人こんな歌をよんでことづけられたふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおほゆるこればわたしはあなたを戀しく思ひますと云ふの意味である

な文字 し曲み文字  
く、即ち以上は「こいし  
く」の意也

【第六十三段】

後七日 毎年正月八  
日より七日間、宮中眞  
言院にて行はる御佛事  
金剛界と胎藏界と交互  
に修法せらる阿闍梨  
僧侶の事、梵語にて  
僧の師範たる可きもの  
を云ふ、唐にては軌範  
と譯し隋にては正行と  
言ふよく弟子の行を糾  
正する故也武者を集  
むる事 警護の武士を  
集めて宮中の四門を警

【第六十三段】

後七日の阿闍梨、武者を集むる事、い  
つとかや盗人に逢ひにけり。宿直人とて斯くごとく  
しくなりにけり。一年の相は此の修中の有様にこそ見  
ゆなれば、兵を用ゐんこと穩ならぬ事なり。

（講譯）

宮中の後の七日の佛事を勤める法師が武士を召集して四  
門を警固させるのはいつの事だつたか同じ佛事のとときに  
盗難にあつてから夜番に頼むのだと云つてこんな仰山らしいことに  
なつたのである一年の凶相吉相は此の佛事をして居る中の有様に現  
はれると云ふのであるから兵具を用ゐるのは戦亂の相を致すやうで  
穩かならぬことである

【第六十四段】

車の五緒は必ず人によらず。程につけ  
て、極むる官位に至りぬれば、乗るものなりとぞ、或

人仰せられし。

（講譯）

五緒の車は必ず何もの、乗用と定りたるものではない其  
の身分に應じて昇進のできる限りの官位に昇つたときに  
乗るものだと或人が申された

【第六十五段】

此頃の冠は、昔より遙に高くなりたる  
なりとぞ、或人仰せられし。古代の冠桶を持ちたる  
人は、はたをつぎて今は用ゐるなり。

（講譯）

此頃の冠は昔にあつたものよりもよつほど高くなつた  
とのだと或人が仰せられた昔の時代の冠桶を持つて居る  
ところの人はふちばたのところにつきをうして今は使つて居るのであ  
る

【第六十六段】

岡本關白殿、盛なる紅梅の枝に鳥一雙  
を添へて、この枝につけて參らすべき由、御鷹飼下毛

【第六十四段】

車の五緒 牛車の籠

固せしめる事 四季物語に  
かや云々 大治二年の御  
修法に、盗人多く群り  
居て、よひの僧阿闍  
梨などの衣、あるは佛  
具など奪ひ取りしより  
御修法の度には宮の中  
に六衛府の司人、檢非  
違使の下人など弓やな  
ぐひを備へ、篝あかう  
ともして守れる云々  
一年の相 一年中の  
吉凶禍福の相 此修中  
後七日の御修法の事

五緒の飾あるものなりとの説と車の天井につけて車の動搖する際取附く緒なりとの説あり程につけて身の程につけて也即ち身分に應じて極むる官位極位極官を云ふ

【第六十五段】

冠桶 冠箱の事はたをつきて冠桶の肌をついで足して丈を高くする也肌とは俗に云ふ一ガハ也

【第六十六段】

岡本關白殿 左大臣

野武勝に仰せられたりけるに、花に鳥附くる術知り候はず、一枝に二つつくる事も存じ候はず、と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、又武勝にさらば己れが思はん様に附けて參らせよ、と仰せられたりければ、花もなき梅の枝に一つを附けて參らせけり。武勝が申し侍りしは、柴の枝、梅の枝、蓄みたると、散りたるに附く。五葉などにも附く。枝の長さ七尺、或ひは六尺、かへし刀五分に切る、枝の半ばに鳥を附く。附くる枝踏まする枝あり。黒葛藤の割らぬにて二所附くべし。藤のさきは、火打羽の長けに比べて切りて、牛の角のやうに撓むべし。初雪の朝枝を肩にかけて、中門よりふるまひて參る。大砌の石を傳ひ

藤原家平を云ふ、左大臣家基の子也鳥一雙雌雄二羽の雉を云ふ  
下毛野武勝 下毛野は氏、武勝は名參らすべき由 御所に參らすべき由也五葉 五葉の松かへし刀 木或は竹をばち切りにして其裏を切りそぐを云ふ  
雨覆の毛 鷹の尾の附け根にある毛を云ふ、雨を覆ふ爲の毛なり  
二棟の御所 棟二つある様に造れる御所  
祿賜はりものを云ふ 使者に對する當座の褒美也、御衣のこと多し

て、雪に跡を付けで、雨覆の毛を少しかなぐり散らし、二棟の御所の高欄に寄せかく。祿を出ださるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、沓のはなぬ隠れぬ程の雪には參らず。雨覆の毛を散らす事は、鷹は弱腰を捕る事なれば、御鷹の捕りたる由なるべしと申しき。花に鳥つせずとは、如何なる故にかありけん。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、君が爲にと折る花は時しも分かぬ、と云へる事、伊勢物語に見えたり。作花は苦しからぬにや。

(講譯)

岡本の關白殿なる藤原家平卿がとく咲いて居るところの紅梅の枝に雉一番ひを添へて此の枝につけて宮中へ差しあげるやうにと御鷹司の役なる下毛野武勝と云ふものに命ぜられた



◆長月ばかりに 伊勢物語に「昔おほきおほいまうちぎみと聞こゆる、おはしけり、仕う奉る男、長月ばかりに梅の作り枝に雉をつけて奉るとて、わがたのむ君がためにと折る花は時しも分かぬ物にぞありける云々」とあり

る所が花に雉をつける法式は存じません又一つの枝に二羽つける事も存じませんといったので料理番の役人に尋ねられ外の人々にも聞かれて又武勝にそれなら自分の思ふやうにつけてさしあげよと仰せられると武勝は花の附いて居ないとこの梅の枝に雉一羽をつけて宮中へ差しあげたが武勝が云へるには鳥柴の枝は梅の枝ならば苔の尺か六尺返し刀五分に切つて枝の真中に鳥をつけてそれには付る枝と鳥に足にて踏ませる枝とがあるつゞら藤の割らないのは二箇所結び付くべき者でそのつゞら藤のさきの方は鳥の火打羽の長きに比べてきつて牛の角のやうに矯めるべきものである初雪の降つた朝枝を肩に擔ひて中門から禮儀を正して參上する大庭の眼の軒下の右を傳ひ歩きして雪の上へ足跡をつけず鳥の雨覆ひの毛を少しかきちらして二棟の御所の高欄に鳥柴の枝をもたせかける若し祿をお出しになるならば肩にかけて拜禮して退出するのである初雪のなりでも沓の先きがかくれる程積らない雪のときには行かない雨よけの毛を散らす

【第六十七段】

◆賀茂の岩本橋本 共に上賀茂神社にある社にして岩本は在原業平を、橋本は藤原實方を祭れり◆業平 平城天皇の皇子阿保親王の五男、姓を在原と云ひ、世に在五中将と云ふ◆實方 侍從藤原定時の子にて右近衛中将とな

【第六十七段】

賀茂の岩本、橋本は業平、實方なり。人の常に云ひ紛へ侍れば、一年参りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼び留めて尋ね侍りしに、實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覚え侍べる。吉水の和尙、月をめて花をながめし古へのやさしき人はこゝにあり原、と詠み給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、おのれらより

りしが、禁中にて行成卿と争ひ冠を打落したる處により歌枕見て参れとて陸奥へ左遷せられ彼地で没す。吉水和尚、慈鎮和尚の事、法性寺關白忠通の子にして東山の吉水に居たり故に吉水和尚と云ふ、和尚は禪家にてはオシヤウと讀み聖家にてはクワシヤウとよむを正しとす。今出川の院、龜山天皇の中宮藤原嬉子の君、西園寺公相公の御女なり。近衛、今出川院の女官近衛局の事大炊御門庶流大納言

は中々御存じなごもこそさぶらはめと、最恭しく言ひたりしこそいみじく覺えしか。今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前に水にて書きて手向けられけり。誠にやんごとなき譽れありて、人の口にある歌多し。作文詩序などいみじく書く人なり。

（講譯）

加茂の岩本の社は在原業平橋本の社は藤原實方を祭つた所である世の中の人がいづまでも言ひ違へて居るが我或年に参詣したるに年老いたる宮司が通りかゝつたので呼び止めて聞いて見ると「實方の社は御手洗川に影のうつつた所だと縁起に書いてあります。が橋本の方は此の處より一層水に近いからその方ぢやあないかと思ひます。吉水和尚が一月をめて花を眺めて古へのやさしき

伊平の女也。手向け供へる

【第六十八段】

筑紫 九州の舊稱、後には九州の北部に限るに至る。押領使 二郡或は三郡を代々治め居るものにして國司の如く任期無し。土大根 大根の事。萬にいみ

【第六十八段】

筑紫に、なにがしの押領使など云ふやうなる者のありけるが、土大根を萬にいみじき薬として、朝ごとに二つ宛焼きて食ひける事、年久しくなりぬ。或時館の内に人も無かりける隙を計りて、敵襲ひ來りて圍み攻めけるに、館の内に兵二人出で來て命を惜ま

人は此處に吉原」とお詠みなさつたのは岩本の社だと聞いて居ます。が私共よりは却つて貴君の方がよく御存知でいらつしやいませうとひどく町噂に云つたのには感心した。今出川の院の近衛の局と云つて歌集などに澤山その作を掲載されたる人ば若かつたときよく百首の歌を讀んで彼の岩本橋本の二社の御前の水で書いてそれを業平實方に手向けられたが誠に貴い名譽があつて人口に膾炙した名歌が澤山ある文章や漢詩詩の小序などをたくみに書いたところの人である。

じき薬 萬事に卓効ある薬、大根は其成分中  
るデアスターゼを含み  
澱粉性食物を消化する  
の効あり。日頃此所に  
物し給ふ 平生此所に  
お出でになるの意

す戦ひて、皆追ひ返へしてけり。いと不思議に覺えて  
日頃此所に物し給ふとも見ぬ人々の、戦ひし給ふは如  
何なる人ぞと問ひければ、年來頼みて、朝なく召し  
つる土大根らにさぶらふ、と言ひて失せにけり。深く  
信を致しぬれば、斯る徳もありけるにこそ。

(講譯)

四海道の筑紫(九州)になにがしの押領使と云ふやうなも  
のがあつたが大根が非常な好物で萬病の大妙薬ちやと云  
ふので毎朝二づゝを焼いて食つたかうして長らく續けて居たが或時  
のことであつた無人の所を見はからつて突然敵が攻め寄せて來た所  
が又不思議にも館の中に二人の武士が飛んで來て命を惜まず戦つて  
とうく敵を追ひかへしたがあまりの不思議さに「平生はとんとお  
見受け申さぬ方も御座りますがかうに戦ひ下さつたのはいかなる  
方で御座りまするか」と問ひたる所が二人は「年來毎朝お上りになる

【第六十九段】

書寫の上人 書寫と  
は播磨國書寫山(高一  
二二一尺)の事、山中  
に圓教寺あり此寺に性  
空上人あり、書寫の上  
人とは即ち此人にて橋  
善根の子也。法華讀誦  
法華經の讀誦。六根  
淨 六根は眼 耳 鼻  
舌、身、意の六を云ふ  
法華經を讀誦すれば六  
根清淨なる事法師功  
徳品にあり。旅の假屋  
旅宿の事

【第六十九段】

書寫の上人は、法華讀誦の功積りて、  
六根淨に適へる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけ  
るに、豆の殻を焚きて、豆を煮ける音のつぶくと鳴  
るを聞き給ひければ、疎からぬ己れ等しも、怨めしく  
我をば煮て、辛き目を見するもの哉、と言ひけり。焚  
かる、豆殻のはらくと鳴る音は、わが心よりする事  
かは、焼かるゝは如何ばかり堪へ難けれども、力なき  
事なり、斯くな恨み給ひそとぞ聞えける。

(講譯)

書寫の上人は法華經を讀誦したる功によつて遂に六根悉  
く清淨となつた人であつた或時旅の宿に遣入ると丁度そ

〔第七十段〕

◆元應 後醍醐天皇の御時の年號◆清暑堂 大内裏豊樂院九堂の一年此處で神樂を行ふ大嘗會、五節をこゝにて行ひし事あり◆玄上 琵琶の名、醍醐天皇の朝、支那より傳來せる名器なりと云ふ◆菊亭の大臣 右大臣今出川兼季◆牧馬 玄上と一雙の名器◆柱 樂器の弦を張るもの、琴に云ふ「チ」也◆糰飯一ソクヒ一の事、飯粒を粘つて作る◆衣被き 衣を

こで豆殻を焚いて豆を煮て居るところの音がするそれが上人にはお前達は赤の他人でもないぢやないかそれに乃公達を煮てひどいめにあはせやあがある怨めしい奴だ」と云ふのだところが又焼かれる豆殻の聲を聞くと「ナニ乃公達の心ですることぢやあない乃公達だつて焼かれるのはつらひさ併しどうも仕方がないのだ恨むな恨むな」と云つて居るやうに聞えた

〔第七十段〕

元應の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし頃、菊亭の大臣牧馬を弾じ給ひけるに、座に着きて先づ柱を探られたりければ、一つ落ちにけり。御懐に續飯を持ち給ひたるにて、附けられにければ、神供の參る程に、よく乾て事故無かりけり。如何なる意趣かありけん、物見ける衣被の寄りて放ちて、元のやうに置

被きたる女即宮女のこ

きたりけるとぞ。

（講譯）

元應の時代の清暑堂の御遊のときに玄上の琵琶は無くなつて居た時分であつたから菊亭の大臣が牧馬の琵琶をお彈きになつたが席に就いて先づ一番に柱を探つて見ると一つ落ちた大臣は御自分の懷中に持つて居られたソクヒで早速その柱をおつけになつた故大神宮へ御飯をあげるところの儀式をして居る間によく乾いて無事にすんだがこれは何ういふつもりでか見物をして居た宮女が人の知れない間に近寄つて柱をとりはづしてそつと元の通りにして置いたからであつた

〔第七十一段〕

◆名を聞くより 人の名を聞くとすぐ其人の面影を推測するを云ふ

〔第七十一段〕

名を聞くより、頓て面影は推し量らる心地するを、見る時は、又かねて思ひつる儘の顔したる人こそ無けれ。昔物語を聞きても、此頃の人の家のそこ程にてぞありけんと思え、人も今見る人の中

に思ひよそへらるゝは、誰も斯く覺ゆるにや。又如何なる折ぞ、只今人の云ふ事も、目に見ゆる物も、我心の内も斯る事の何時ぞやありしかと覺えて、何時とは思ひ出でねども、正しくありし心地のするは、我ばかり斯く思ふにや。

(講譯)

其の名を聞くとすぐ顔付は推量の出来るやうな氣がするが逢つて見ると又前以て思つて居た通りの顔をした人でもないのである昔しの立派であつた家や人の話を聞いてもその處は此頃の人の家にすれば何處そこの家のものであらうと思ひ人物も今生きて居る中で誰々に似て居た人であつたらうと思ひ比べられたりするのは誰もそう思ふ事であらうか又どうしたる時であるか現在人の話して居る事も目に見えるものも自身の心中に思つて居る事もこんな事がいつのことであつたかと思つてそれが何日であつたと思

【第七十二段】

賤しげなるもの。卑しい様子に見へるものはの意にて「居たるあたり」より「多く書き載せたる」迄の主語となれり。持佛堂、佛間の事。前栽、庭園。願文、神佛に對する祈願文。作善多く、くだくだしく多くの善事を書き聯れて神佛に祈願するをいふ。文車、書物を積置く車、一種の書棚にして出火の際などに運搬に便せし也。

【第七十二段】 賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。持佛堂に佛の多き。前栽に石草木の多き。家のうちに子孫の多き。人に逢ひて詞の多き。願文に作善多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、文車の文塵塚の塵。

(講譯)

賤しいやうすに見えるものは居まはりに道具の多いの硯に筆の多いの持佛堂に佛の多いの庭に石や草木の多いの家に子や孫の多いの人に逢ひてから言葉の数の多いの祈願の文章に自分の善い事したるのを多く書き載せてあること澤山あつて見苦しくないは文車の文はきだめの塵だ。

〔第七十三段〕

◆無興 面白なきこと  
 ◆あるにも 現在の  
 事實でも 過ぎて 事  
 實以上に誇大に 定ま  
 りぬ 虚言でも 本當の  
 事にきまるを云ふ 道  
 々 諸種の専門の藝能  
 ◆頑なる 偏屈なる  
 浮きたる事 浮言にて  
 根據の無い虚言也 ◆お  
 ぼめき ホンヤリと云  
 ふこと ◆つまく 端  
 々なり、話の前後なり  
 ◆詮なく 仕方ない  
 から ◆善き人 高貴な  
 人 ◆拙者 化身のた

〔第七十三段〕

多くは皆虚言なり、世に語り傳ふる事、實は無興きにや、  
 に、況して年月過ぎ、境も隔たりぬれば、云ひたき儘  
 に語りなして、筆にも書き留めぬれば、頓て定まりぬ。  
 道々の物の上手のいみじき事など頑なる人のその道知  
 らぬは、そ、ろに神の如くにいへども、道知れる人は  
 更に信も起さず、音に聞くと見る時とは、何事も變る  
 ものなり。且つ顯はるゝをも顧みず、口に任せていひ  
 散らすは、頓て浮きたる事と聞ゆ。又我も真しからず  
 は思ひながら、人の云ひし儘に鼻の程おごめきて云ふ  
 は、その人の虚言にはあらず。げにしく所々うち  
 おぼめき、能く知らぬ由して、さりながら、つまく

欠

# 欠

つまうぬも似  
 ずみやかに  
 持つて来い  
 この物に  
 迷ふをかける  
 を知らずいか  
 何ぞ云ひ

【第七十五段】  
 外の塵 世俗の塵事  
 外の聞に従ひ 他人

第七十五段

あれは卑賤なる人もあり老人あれば青年の年若き人もあるのであるが是等の人々は各々行く處もあればその歸るべき家もありてよくなるに寝て朝になれば起きるこの人はそんなにして全体何をして居るのだらうかと云ふと出来得る限り長壽にして金儲けをしたいと始終そのみを願つて居るのである身体を養ふて何を待つのであるや待つて居つて来るものと云へば只年のよることと死期に至ることである此の二つのものが来ることは非常に早くて暫らくの間もジツト休息をして居るやうなことはない老人になつたり死ぬるのを待つて居るのが何の樂みであらうやと云ふところが迷つて居るものは年をとることも死ぬる事も怖ろしいとはせずそれは名聲利慾にのみ溺れ本心を失つて冥途の近い事を考へて見ぬ故である馬鹿者は又これを悲んで歎くこれは何時迄も生きて居りたい事を思つて萬物は凡べて變化を免れぬ道理を知らないからである

【第七十五段】 つれづれに佗ぶる人は、如何なる心ならん。紛る、方なく、唯一人あるのみこそよけれ。世に

の機嫌を取つて其氣に入る様に云ふこと。心にあらず。本心で無いことを云ふに至るの意。はれて忘れたる事。老死の近づけるを忘れたるを云ふはれては恍惚としての意也。誠の道。こゝでは佛道の事也。縁を離れて。世のすべてのかゝづらひを脱却してなり。摩訶止觀。天臺大師(智顛)の觀心の事を述べたる書。摩訶は「大」の義也。止觀第四に曰く「縁務有。四、一生活、二人事、三伎能、四學問」と此

したが、心外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交れば詞よその間に隨ひてさながら心にあらず。人に戯れ物に争ひ、一度は怨み一度は喜ぶ、其の事定れる事なし。分別妄りに起りて得失止む時なし。惑の上に醉へり、醉の中に夢をなす。走りて忙はしく、惚れて忘れたる事、人皆斯くの如し。未だ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を静かにし、事に與らずして心を安くせんこそ、暫く樂むともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸縁を止めよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。

（講譯）

世を遁れて閑にして居れば退屈で困るといふ人はどふ云ふ心であるのだらう唯一人で居る方が外へ心が移らなくてよいのである世間の思潮に従ふと本心を外界の汚れたる慾望に奪

等の事皆我心のさはりとなればすてやめよと云ふ意也

【第七十六段】

世の覺え花やかなる

【第七十六段】

世の覺え花やかなるあたり、嘆きも

はれるものであるから物に迷ひやすく人の中に出で交れば言ふこともそれを聞く人の機嫌をうかゞい計つてその人の氣にいるやうにするものである故少しも本心ではない人と戯れて見たり喧嘩をして見たり或時には恨み或時には喜ぶなどちよつとも定つたることがなく分別がとりどめもいらくに起つて來て損をやつたりとくもしたりすることの絶えまがないこんなやうな人だちは既に本心がちがつて居る上に酒に酔ふたやうになり酔つて居る中に夢を見て居るのであるさうして方々に奔りあるいて忙しさうに名利を追ひホケて仕舞つて死ぬることが眼前に迫まつて來居るを忘れて居る人と云ふものは大概こんなものであるのだまだ佛道を知らないでも世間の諸縁を離れて心身を静なるところに置き世の中のことに關係をなさないで心を安らかにして居れば先づ先づ「樂む」とも云へるものであらう生活人事、伎能、學問などの諸縁を止めよこんな事も我が心のさはりになるといふ事が摩訶止觀と云ふ書物にも載せられ居るぢや



あたり 其時代の權勢  
家 嘆きを喜びも 凶  
事、吉事を云ふ 云ひ  
入れ 案内を云ひ入れ  
たる也 さらすともと  
そんな事をしないで  
もよいにとの義也

〔第七十七段〕

人のもてあつかひぐ  
世間に流行する評  
判 いろふ 手に觸れ  
るの語義、轉じては關  
係する 干渉するの意

喜びもありて、人多く行き訪ふ中に、聖法師の交りて、  
云ひ入れ佇みたるこそ、さらすともと見ゆれ。さるべ  
き故なりとも、法師は人に疎くてありなん。

(講譯)

世間に名望のある家に悲みのことや喜びのことがあつて  
人が澤山たづねて参る中に聖法師が交つて案内を言ひ入  
れて門の外に立つて居れるのはわざ／＼、そんなせいでと見えるら  
や相當なる理由があつても法師は俗事にうとくしくありたいもの  
である

〔第七十七段〕

世の中に其の頃人のもてあつかひぐさ  
に言ひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、能く案  
内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそ受け  
られぬ。殊に片ほとりなる聖法師などを、世の人の上

に用ふ 案内知りて  
事件の真相をよく知り  
ての意 受けられぬ  
受け取り難い合點のゆ  
かぬの意 片ほとり  
片田舎 云ひ散らす  
云ひふらす

〔第七十八段〕

今様の事 當世風の  
流行事 心にくし 奥  
ゆかしい 今更の人  
今度初めて遭つた人  
ことごとくに云ひつけた

はわが如く尋ね聞き、いかで斯ばかりは知りけん、  
覺ゆる迄ぞ云ひ散らすめる。

(講譯)

世間の中にその時人の評判にして言ひ合つて居る事をそ  
んな俗事には係り合ふてはよくなからうべき法師がよく  
様子を知つて居て人に話して聞かせたり根ほり葉ほり聞いたりする  
のはまことに合點のゆかぬことである殊に片田舎に居れるところの  
法師などは世間の人の事を自分の事のやうに聞いたりどうしてこれ  
程に知つて居れるのだらうと思はれる位に言ひちらしたりするやう  
だ

〔第七十八段〕

今様の事共の珍しきを、言ひ廣めめて  
なすこそ、又受けられぬ。世に事舊りたる迄知らぬ人  
は心にくし。今更の人などの、ある時、こつもとに  
ひつけれたる言種、物の名など心得たるとち、片端言ひ

る言種 其あたりだけで云ひつけて居る流行言葉 同志、輩の意 心知らぬ人 其云ひ合ひ居る言葉の意味を知らない人 心得ず思はする 何を言つてゐるのか分らない様に思はせる事は

【第七十九段】

何事も入立たぬ 萬事につけ、其道に立入つて物知り顔をする様

交はし、目見合せ笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず思はする事、世馴れず好からぬ人の必ずあることなり

（講譯）

當世風の種々珍づらしい事を言ひ廣めて流行にならせるのはどんな心で之をするのかこれ亦合點の行かぬことである世の中の人々が皆知つて居つても古くなるまで流行などを知らず居る人は奥床かしい初めて人など參つた時その邊だけで言ひつけて居るはやり言葉が符牒綽名などを知つて居る同志で片端だけ言ひあつたり目を見合はせて笑つたりしてそのわけを知らない初めての人に何を言つて居るのか知れないと思はせるのは世間馴れない下品なる人にきつとある事である

【第七十九段】

何事も入り立たぬ様したるぞよき。よき人は知りたる事として、さのみ知り顔にやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、萬の道に心得たる由の

な事の無いのがよい 反語にして言ふべきか否決して言ふまじの意 世に恥しき方もあれど 中には聞いて自分が耻しく思はれる程よく物事に通曉して居る人もあるがの意也 思いみじ えらいと思ふ事

【第八十段】

我身に疎き事 自分に直接緊要の關係なき

差し答へはすれ。されば世に恥しき方もあれど、自らもいみじと思へる氣色 頑なり。よく辨へたる道には必ず口重く、問はぬ限りは云はぬこそいみじけれ。

（講譯）

藝事でも何でも人の前ではその道に立ち入つた事のない様子をして居るのがよい知徳のある人は知つて居れる事でもそれ程に知つて居るやうな顔をせぬ片田舎より出で、來たりする人が何でも知つて居る風なる應答をなすものであるそれ程なら都人も耻かしい位よく萬事に通曉して居る人もあるから自分でえらいと思つて居れる様子が如何にも片意地に見える本當によく知つて居る道の事は必ず口を重くして人より聞かれない以上は言はないのがえらいのである

【第八十段】

人毎に我身に疎き事をのみぞ好める。法師は兵の道を立て、夷は弓引く術知らず。佛法知りた

藝能を云ふ、疎きは親しからざる事。夷田舎の武士を指す。管絃音楽。愚なる己れが道。下手な自分の本職と云ふ意。上達部三位以上の公卿、四位以上の参議。殿上人、昇殿を許されたる六位以上の人。上さま、上流社會の人々の意にて上達部、殿上人の同格名詞也。名を顯す。武勇の名を顯はす事。人倫に遠く云々。彼我相闘ひ相殺傷する事は人倫に遠く云々也。其家にあらずは、武職の家で

る氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されど愚なる已れが道よりは、なほ人に思ひ悔づられぬべし。法師のみにあらず、上達部殿上人、上さま迄おしなべて、武を好む人多かり。百度戦ひて百度勝つとも、未だ武勇の名を定め難し。その故は運に乗じて仇を碎く時、勇者に非すと云ふ人なし。兵盡き矢窮りて、遂に敵に降らず、死を安くして後、始めて名を顯すべき道なり。生けらん程は武に誇るべからず。人倫に遠く禽獸に近き振舞、その家にあらずば好みて盡なき事なり。

(講譯)

人は皆自分に關係の遠い薄い學術や藝術をすくものである。僧侶軍人のなすべき武術を研き田舎武士は弓を引く道

なければ

【第八十一段】

障子 現今のカラカ

【第八十一段】

屏風障子などの繪も文字も、頑なる筆

も知らないで佛法を知つたやうなる顔をし連歌をなしたり笛を吹き琴を調べるなど音楽を嗜み合つたりして居るしかしそんな事はいくら上達したからとて下手なる自分の道の事よりも餘計に人に馬鹿にされるであらう僧侶のみに限らない上達部殿上人など上流社會の人まで一体に武術を好む人が多い武術は百度戦争をやつて百度勝つからとてまだ武勇の譽ある人は定められないぢやそれは何故であらうやと云ふに運よくトン拍子に敵を破るときにはどんな人だつて勇者でない者はないけれども刀折れ矢盡きて仕舞つても何うしても敵に降参せず立派に死んでから始めて勇者の名を人に知られるのである生きて居るうちは武勇を自慢すべきものではない元來武術と云ふものは彼我相争ひ相殺傷するのである故人倫の道に遠く鳥や獸に近い野蠻の舉動である其の家代との職務でなければ好いた所で無益な事である

ま(襖)の事、今の障子は古くは明り障子と云ひし也。拙く劣る、未熟の意にて、宿の主人がつまらないの意也。心劣り、心の見劣りする事。品なく見悪き様。下品な見にくい様に。煩しく好みなせるを云ふなり。色々な趣向をめぐらして、うるさい好みをしてあるのが心劣りして居ると云ふのであるとの意。

様して書きたるが、見悪きよりも、宿の主の拙く覺ゆるなり。大方持てる調度にて、心劣りせらるゝ事はありぬべし。さのみ善き物を持つべしともあらず、損せざらん爲とて、品なく見悪き様にしなし、珍しからんとて、用なき事共爲添へ、煩しく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、痛く事々しからず、費もなく物柄の善きが善きなり。

(講譯)

屏風や襖などの繪や字が下手なのはその文字や繪の下手にして醜いのもその家の主人がつまらなく思はれるものである大概持つて居れるところの道具類でもその趣味が下劣だと思はれることがあるであらう何にもそんなによいもの持てといふのではない損じないものが爲だと云つて下品な見苦しい風に拵へた

〔第八十二段〕  
羅の表紙 表紙は表装の意にて、主として巻物に云へり、羅の表紙は羅で造つた表装。頓阿 小野宮大納言能實の後裔二條爲世卿の門弟、當時和歌四天王の一人也。いみじけれ値打ちがある、優つて居るの意也。弘融僧都 伊賀國佛性寺住職權少僧都、和歌に堪能なり。

〔第八十二段〕

羅の表紙は疾く損するがわびしきと、

人のいひしに、頓阿が、うすものは上下はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ、と申し侍りしこそ心まさりて覺えしが。一部とある草紙などの同じやうにもあらぬを、見悪しといへど、弘融僧都が、物を必ず一具に整へんとするは。拙き者のする事なり。不具なるこそよけれと言ひしも、いみじく覺えしなり。總て何も皆事の調りたるは悪しき事なり。仕残したるを

調りたる 調ひたる  
に同じ 内外の文 内  
典外典を云ふ、内典は  
佛書外典は儒書百家の  
書を云ふ也

さて打ち置きたるは、面白く生き延ぶる業なり。内裏  
造らるゝにも、必ず造り果てぬ所を殘す事なりと、或  
る人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章  
段の闕けたることのみぞ侍る。

（講譯）

一羅の表紙はどうも早く損じていかのト或人が云つたら  
頓阿が「さうぢや羅の表紙はむしろ上下の端の所が損じ  
たのがよい螺鈿の軸も貝が落ちてからがよいのだ」と云つた見上げ  
た意見である又世間では一部となつた草紙などの体裁の揃つて居な  
いのを見苦しいやうに云ふが是もよくない弘融僧都が「何でもチヤ  
ント揃へておかうとするのはつまらぬ事だ揃つて居ないがよい」と  
云つたが之も甚だ感心な言葉である何んでもチヤント整頓したのは  
よくないのだ半分し掛けてその儘に捨て置いたのが面白みがある内  
裏を張られるにも必ず何處か一所はしのことした所をそのままで置い

【第八十三段】

竹林院入道左大臣殿  
西園寺公衡を云ふ。  
太政大臣藤原兼實の子  
也 一の上 左大臣の  
事也、宮中の事すべて  
左大臣之を統領す、故  
に「一の上」と云ふ也、  
左大臣關白たる時は右  
大臣を一の上と云ふ  
洞院左大臣 従一位左  
大臣洞院實雄公 甘心  
し 満足されての煮  
相國 太政大臣の唐名  
元龍の悔 易の乾の

とくのだ」と或人の語であつたその他儒佛の本にしても章段の缺け  
たものが非常にある

【第八十三段】

竹林院入道左大臣殿、太政大臣に上り

給はんに、何の滞りかおはせんなれども、珍らしげな  
し、一の上にて止みなん、とて、出家し給ひにけり。  
洞院左大臣殿この事を甘心し給ひて、相國の望おはせ  
ざりけり。元龍の悔ありとかや云ふ事侍るなり。月滿  
ちては缺け、物盛りにしては衰ふ。萬の事先の詰りた  
るは、破れに近き道なり。

（講譯）

竹林院入道大臣殿は太政大臣に昇進されるのに何の不都合  
もないが上るべき人が上るのは別に珍らしくもないお  
れは左大臣限りで止らうよと云つて剃髪して出家せられた所が洞院

卦に「上九亢龍、有悔」と、象に曰く「亢龍有悔、盈不可久也」と、蓋し天上高く上りつめた龍は後悔するの意也

〔第八十四段〕

法顯三藏 法顯は晋の安帝の隆安三年印度に赴きし支那の高僧、三藏とは經、律、論の三者を修得せし高僧を云ふ也 天竺 印度 故郷の扇を見て云々 法顯傳に曰く「法顯漢地ヲ去ルコト積年與ニ交接スル所、悉ク異域

左大臣殿が此の事を聞いて満足され太政大臣にならうとの望みはなかつた亢龍悔ありと云ふことがある月も満月になればそれから缺け始め物事も盛んになれば必ずまた衰へる萬事行くべき所まで行つてもうそれより先きがなくなれば破滅に近いといふのが物の道理である

〔第八十四段〕

法顯三藏の天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、さばかりの人の無下にこそ、心弱きけしきを、人の國にて見え給ひければと、人の言ひしに、弘融僧都、優に情ありける三藏かな、といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にく、覺えしか。

(講譯)

支那の法顯三藏が印度へ渡つて故郷をなつかしめる餘り支那の扇子を見ては悲しみ病氣になつては漢の食物がほ

ノ人、山川草木目ヲ擧クルモ舊ナシ、又同行坡或ハ流レ或ハ亡ス、形ヲ顧ミテ唯己心常ニ懷悲ス忽ニ此玉像ノ邊ニ商人ノ一白絹扇ヲ供養スルヲ見テ、覺エズ悽然トシテ涙下ツテ目ニ滿ツ」と

〔第八十五段〕

人の賢を見て羨む 論語里仁篇に「見賢思齊焉、見不賢而内自省也」とあり 下愚の性 論語陽貨篇に曰く「上智與下愚不移」と 惡人の眞似云々楊

しいと云つたのを聞いて或人が「あれ程の人物が無暗に心弱い様子を外國人に見せたものだ」と云つたところが弘融僧都が「いやさしいものゝ分つた人ぢや」と云つたさうぢやが弘融こそ坊主にも似合はぬゆかしい男だ

〔第八十五段〕

人の心素直ならねば、偽りなきにしもあらず。されど自ら正直の人、などか無からん。己れ素直ならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たましく賢なる人を見てこれを憎む。大なる利を得んが爲に、少しきの利を受けず、偽り飾りて名を立てんとすと誘ふ。己れが心に違へるによりて、此嘲りをなすにて知りぬ。この人は下愚の性移る

子の法言二に曰く「人之性也善惡混、修其善一則爲善人、修其惡一則爲惡人」  
楊子の法言一に曰く「驥之馬亦驥之乘也、驥之類之人亦驥之從也」  
舜を學ぶ、孟子曰く「堯舜之道孝弟而已矣、子服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而矣」と

べからず。偽りて小利をも辭すべからず。假にも愚を學ぶべからず。狂人の真似とて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人の真似とて人を殺さば、悪人なり。驥をまなぶは驥の類ひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても、賢を學ばんを賢と云ふべし。

(講譯)

元來人間の心と云ふものは正直なものではないから偽りが無いとは云へぬしかし世間の皆が皆まで虚言つきと云ふ譯はない假令自分は真直な者でなくても世の中の賢者を見て羨むは人情であらう只極端なる馬鹿者だけが偶々賢者を見んのだそして「彼等は大きな利を得るために小さい利を捨て偽善をなして名譽を得やうとするものである」と云ふ所がこれは自分の心に眞の賢者の心持が分らないのでこんな悪口を云ふに過ぎないのであるから云ふ連中はとても教育の見込がないたとひ偽つても小利を捨てる必要は

【第八十六段】

惟繼中納言 葛原親王の裔にして平氏也、建武二年文章博士に任ぜらる。精進 弘訣に「維ルコト無キ故ニ精、間ルコトナキ故ニ進云々」とあり、俗事一切を離れて佛道修行に入れる心身の状態を云ふ。寺法師 叡山の山法師に對して三井寺の法師を寺法師と云ふ。圓伊僧正 伊平大納言の孫也。文保 花園天皇の御治世の年號。三井寺 近江國滋賀郡

ない悪人を學ぶの必要もない例へば狂人の真似だと云つて大道を走つたならば取りも直さず狂人である悪人の真似だからと云つて人を殺さば即ち悪人である千里の馬を學ぶものはその馬既に千里の馬の資質がある者だ大聖舜を學ぶものはその人既に舜と同種の人なのである假令偽りても賢を學ぶが賢であらう

【第八十六段】

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同居して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて、御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺は無れば、今よりは法師とこそ申さめといはれけり。いみじき秀句なりけり。

大津町の西北三井に在り、天武天皇二年の創建、天臺宗寺門派の本山、一に園城寺と云ふ延暦寺を單に山門或は山と稱するに對し三井寺を寺門或は寺と云ふ文保元年四月廿五日山門の徒によりて燒かる

◆下部 下劣の者也 ◆心すべき 心づかひす べき ◆宇治 山城國宇治なり ◆申し睡ひ 云

【第八十七段】

（講譯） 惟繼中納言は詩歌の方に富んだところの人である一生他事なく佛道修行をしてお経ばかり讀んで三井寺法師の圓伊僧正と同宿して居たが文保元年に三井寺が燒かれたるときも僧正に遇つて御坊のことを寺法師といふが寺はなくなつたから今日からは只法師と申さうと云はれたよく出來たシヤレである

【第八十七段】

下部に酒飲まする事は心すべき事なり 宇治に住みける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を小舅なりければ常に申し睡びけり。或時迎に馬を遣したりければ、遙なる程なり。口つぎの男に先づ一度せさせよとて、酒を出したれば、さし受けさし受け、よつと飲みぬ。太刀うち佩きてかひくしげなれば、頼もしく覺えて、召し具して行く程に、木幡の邊

ひ寄り親しむこと ◆逃なる云々 具覺坊の言にして遠路である云々也 ◆口つぎの男 馬の口取の男 ◆一度させよ 酒を一盃飲ませよ ◆木幡 山城國宇治郡にある地名 ◆奈良法師の兵士 奈良の僧兵也、昔は三井寺、延暦寺の外奈良の五大寺も兵備を爲し僧兵許多ありし也 ◆矢矧げ 弓に矢をつかへること ◆現心なく 本心なき 狂亂の心の義 ◆高名仕らん 手柄を立てる ◆梶原 梶の木多き原の意、木

りにて、奈良法師の兵士數多具して逢ひたるに、この男立ち向ひて、日暮れにたる山中に怪しきぞ、止まり候へ、といひて、太刀を引き抜きければ、人も皆太刀抜き矢矧げなどしけるを、具覺坊手に摺りて現心なく酔ひたる者に候ふ、枉げて許し給はらん、と言ひければ、おのゝ嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、御坊は口惜しき事し給ひつるものかな、己れ酔ひたる事侍らず、高名仕らんとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつる事と怒りて、專斬りに斬り落しつ。さて山賊ありと匂りければ、里人おこりて出で合へば、我こそ山賊よと言ひて、走りかゝりつ、斬り廻りけるを數多して手負せ打伏せて縛りけり。馬は血つきて、宇



幡附近ならん<sup>辛</sup>辛き命  
生きたれど 辛うして  
生きては居たもの、

治大路ちおほぢの家に走り入りたり。あさましくて、男ども數  
多走はしらかしたれば、具覺坊ぐかくぼうは梶原くちなしはらに呻吟よひ伏したる  
を、求め出で、昇かきもて來つ。辛からき命いのち生きたれど、腰こし  
斬り損そんせられて、不具ふぐになりけり。

(講譯)

下賤な者に酒を飲ませるのは注意すべきことであるこれ  
に就いてこんな話がある宇治に住んで居た或男京の具覺  
坊と云ふ風流な僧が丁度小勇であたるので常に心安く交つて居た所  
が或時のことであつたこの男から具覺坊へ馬をつけ迎へにやつた具  
覺坊は「こゝから宇治は道程も随分あるから先づ馬方に一杯飲せて  
やれと云つて酒を出させて飲せた馬方も大喜びで随分澤山に飲んだ  
が馬方などの身分には似ず刀をさして如何にも勇ましい様子である  
から具覺坊も頼みがひがあるやうに思ひて連れたところか木幡まで  
參ると彼方から奈良法師が兵士を澤山引き連れて來たれるに出逢ふ

た例の馬方は早速相手になつて「一体日の暮れてからこんな山中を  
やつて來るとは怪しい奴等ぢや先づ立ち止め」と云つて刀を抜く先  
方も應じて刀を抜き矢をばげなどする中に立つた具覺坊は只もう喫  
驚手をすりながら「此奴は生根も何もなくなつた酔漢どうかまあ特  
に御許しな」と願ひ出たので兵士どもは嘲りながら行つて仕舞つた  
所が今度は具覺坊に相手になつて「あなたはどうも残念なことやつ  
てのけた私は決して酔ふては居ない今日こそ大てがらをしゃうと思  
つた所が折角抜いた刀まで益に立たなくなつて仕舞つたとて非常に  
怒つて切つてかゝつたさて大き聲で「山賊だ々々」と呼ばはつたの  
で村人ども大勢出で來たつて立ち向ふと「ナニ乃公が山賊ぢや」と  
走りかゝつて切りまはすので多勢で先づやつとの事で傷を貰はせて  
取り抑へ縛りあげた一方彼の宇治の家では馬が血まみれになつて歸  
つて來たのでこれは必定たゞ事ではあるまいと愕きあきれて下男ど  
もを方々へさがしにやると具覺坊は梶原に倒れてうめいて居る漸く  
搜し出して昇いで歸つた兎に角かうしてやつと命だけは拾いたる者

〔第八十八段〕

◆小野道風 藤原佐理 藤原行成と共に日本三蹟と稱せらる、書道の達人也、從四位上木工頭に任ぜらる、醍醐、朱雀、村上の三朝に仕へ、康保三年十一月七十一歳にて卒す◆和漢朗詠集 四條大納言藤原公任卿の撰、和漢の詩を集めて上下二巻とせるもの也昔は之にフシをつけて誦ひしと云ふ◆御相傳うける事には、うける事は浮虚の事の意、お家代々の申

の具覺坊は腰のところを切られたる爲に不具者になつて仕舞つた  
〔第八十八段〕 或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、或人、御相傳受ける事には侍らしなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かん事、時代の違ひ侍らん、覺束なくこそ、といひければさ候へばこそ世に有り難き物には侍りけれ、とて愈秘藏しけり。

(講譯)

或者が小野道風の書いた和漢朗詠集であると云つて持つて居つたのを他の人がこれを聞いて「お家代々の申し傳へには根據のないところの説ではありますまいけれども四條大納言が撰ばれたる朗詠集を道風が書くと云ふことは時代が違やあしませんか心もとなく思ひます」と言つたらば「だから世間に珍らしいの

です」と云つて愈々大切に秘藏し置いた。

〔第八十九段〕

奥山に猫またといふ物ありて、人を食ふなると人のいひけるに、山ならねども、これらにも猫の經上りて、猫またになりて、人取る事は有なるものをと云ふ者ありけるを、何阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺の邊にありけるが聞きて、一人歩かん身は心すべき事にこそと思ひける頃しも、ある所に夜更くる迄連歌して、唯一人歸りけるに、小川の端にて音に聞きし猫また、あやまたず足のもとへふと寄り來て、頓て搔き付く儘に、頸の程を食はんとす。肝心も失せて、防がんとするに力もなく足も立たず。小

し傳へは偽ではあるまい也◆時代や違ひ侍らん 公任卿の生年は小野道風の没年たる康保三年也故にかく云ふ也

〔第八十九段〕

◆猫また 猫の老成して位をとりしもの種々の怪事を演ず、之を猫またと云ふ◆何阿彌陀佛 何は不時の意はず字、阿彌は相阿彌、世阿彌など昔はよくある名也陀佛はワザと附加せしもの、要するに連歌師の名也◆行願寺 賀茂神社の側にあり、

寛弘二年僧行の圓創建にかゝる連歌の賭物連歌の賞品として主人より出せる引出物即ち懸賞品也(はふく)遣々の體なり、失心して充分に立歩し能はざる也

川へ轉び入りて、助けよや、猫また、よやと叫べば、家々より松明ども灯して、走り寄りて見れば、このわたりに見知る僧なり。こは如何にとて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇小箱など懐に持らたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたる様にて、はふく家に入りけり。飼ひける犬の暗けれど、主を知りて飛び付きたりけるとぞ。

(講譯)

奥山に猫またと云ふものがあつて人を食ふさうだと云つてゐる者があつたすると又「なに山でなくてもこの邊でも猫か年をとつて猫またになつて人を取る事があるどころぢやあないよと云ふものがあつたところが行願寺のあたりに何阿彌陀佛とか云つて連歌に上手な法師があつたが之を聞いて非常に恐れ一人歩くな

〔第九十段〕

大納言法印 大納言

〔第九十段〕

大納言法印の召し仕ひし乙鶴丸、やすら

りには何時でも用心しなければならぬと思つて居た丁度その頃或所で夜おそくまで連歌をして人通りもない夜中の道を獨りトボトボと歩つた所が小川の所まで来たると話に聞いたその猫またが果して足もとに來て忽ちかみつき頭の邊を噛まうとする喫驚仰天正氣もうせて防がうとするが力もなければ足も立たぬ川の中へころげ落ちて「やあ、猫また、助けてくれ助けてくれ」と大聲をあげて叫べたのでこれを知りつけたる家々からは松明をなだれとして驚いて走つて來て見れば近所の僧である一体まあどうしたる事かと川の中から抱き起して見ると連歌に勝つて貰つた扇や小箱は懐に入れたまゝづぶぬれである法師はまるで九死に一生を得たと云ふやうな風で逃げらるやうにして歸つて仕舞つた實はその猫またと思つたのは自分の家の飼犬が暗い中にも主人を知つてとびついたものであつたのである

たりし人入道して法印  
になれる者乙鶴丸  
召使ひし少年の名や  
すら殿 安良殿、名字  
不詳常に行き通ひし  
に平生往来せし也、男  
色の交ならん。

殿といふ者を知りて、常に行き通ひしに、或時出で、  
歸り來たるを法印何所へ行きつるぞ、と問ひしかば、  
やすら殿の許罷りて候ふといふ。そのやすら殿は、男  
か法師かと又問はれて、袖かき合せて、いかゞ候らふ  
らん、頭をば見候はず、と答へ申しき。などか頭ばかり  
の見えざりけん。

(講釋)

大納言法印の召し使つて居た童に乙鶴丸といふのがあつ  
たがやすら殿と云へる人と男色の契りと呼んで始絶そこ  
へ通つて居たが或時の事であつた暇つた所を主人に見られて「何處  
へ行つて來たか」と問はれたで「やすら殿の所へ行つて來ました」  
と云ふと又「そのやすら殿と云ふのは一体俗人が法師か」と問ひつ  
められる乙鶴丸はかしこまつて袖をかきあはせ「さあどうでしたか

〔第九十一段〕

赤舌日 所謂る赤口  
日也、通書大全には此  
日に客を會し事を證し  
賣買する事を忌むとあ  
り陰陽道 天文曆數  
の道也陰陽察ありて之  
を司とる、賀茂(曆道)  
安倍(天文道)の二家之  
が世職たり末通らず  
行先成就しない無  
常乘易の境 世の中は  
諸行無常で何事も變易  
する境涯である物皆  
幻化なり 幻化とは幻

頭は見ませんでしたから」と云つたそんなに親しくして居つてどう  
して又頭だけが見えなかつたのだらう  
〔第九十一段〕 赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なき  
事なり。昔の人これを忌まず、此頃何者のいひ出で、  
忌み始めけるにか。この日ある事末通らずといひて、  
その日いひたりし事、したりし事叶はず、得たりしも  
のは失ひ、企てたりし事成らずと言ふ愚なり。吉日を  
選びて爲したる業の末通らぬを、數へて見んも又等し  
かるべし。その故は、無常變易の境有りと見るものも  
存せず。始ある事も終り無し。志は遂げず、望は絶  
えず、人の心不定なり、物皆幻化なり、何事か暫くも

の如く何事も果敢なき  
を云ふ、玄義止觀にも  
「諸法ノ體幻化ノ如シ」  
とあり

住する。此の理<sup>り</sup>を知らざるなり。吉日<sup>きちじつ</sup>に惡<sup>あく</sup>をなすに必  
ず凶<sup>きやう</sup>なり。惡日<sup>あくじつ</sup>に善<sup>ぜん</sup>を行ふに必ず吉<sup>きち</sup>なりといへり。吉  
凶は人によりて日によらず。

（講譯）

赤吉日といふ日は客を呼んだり證人に立つたり賣買した  
りすることがすべて悪いと云ふ事を云ふがしかしこんな  
ことは陰陽道には別に何とも云つてないことである昔しの人はこの  
日を忌むことはなかつたところが近頃になつて何と云ふ人の云ひ始  
めたることなであらうかこの日に起つたことは後までもうまく行か  
ないと云ふのでこの日云つた事やした事は成就しない得たものは失  
ひ企てた事は成就しないと云ふしかしこれは馬鹿なる事である若し  
そんな事を云はうならば試みに吉日にしたことを數へて見ても成就  
しない割合はこれと同じことであらう何となればこの世の中は常に  
變化極りないところのものだから今日に見て居るからと云つて何時  
までもあるものではないあるかと思へば忽ち消え始めがあつたから

【第九十二段】

諸<sup>しよ</sup>矢<sup>や</sup> 二筋の矢を云  
ふ 初<sup>はつ</sup>心<sup>しん</sup>の人 初<sup>はつ</sup>めて  
其<sup>その</sup>道<sup>みち</sup>に志<sup>し</sup>した人 得<sup>とく</sup>失<sup>しつ</sup>  
なく 得<sup>とく</sup>は失<sup>しつ</sup>の中<sup>なか</sup>の事  
失<sup>しつ</sup>は矢<sup>や</sup>の中<sup>なか</sup>の事、茲

【第九十二段】

或<sup>ある</sup>人<sup>ひと</sup>弓<sup>ゆみ</sup>射<sup>い</sup>る事<sup>こと</sup>を習<sup>なら</sup>ふに、諸<sup>しよ</sup>矢<sup>や</sup>を手<sup>た</sup>挟<sup>はさ</sup>み  
て的<sup>まと</sup>に向<sup>むか</sup>ふ。師<sup>し</sup>の曰<sup>いは</sup>く、初<sup>はつ</sup>心<sup>しん</sup>の人<sup>ひと</sup>二<sup>ふた</sup>つ<sup>つ</sup>の矢<sup>や</sup>を持<sup>も</sup>つ事<sup>こと</sup>勿<sup>な</sup>か  
れ、後<sup>のち</sup>の矢<sup>や</sup>を頼<sup>たの</sup>みて初<sup>はつ</sup>の矢<sup>や</sup>に等<sup>な</sup>閑<sup>ま</sup>の心<sup>こころ</sup>あり、毎<sup>まい</sup>度<sup>ど</sup>たゞ  
得<sup>とく</sup>失<sup>しつ</sup>なくこの一<sup>いっ</sup>矢<sup>や</sup>に定<sup>さだ</sup>むべしと思<sup>おも</sup>へ、といふ。僅<sup>わずか</sup>に二

とて必ずしも終りがチャンとうまくゆくものでもないかうい世の  
中だから志もその思ひ通りに行くのは少なく人の心も時と場合とに  
依つていろ／＼に變化する萬事皆變轉極まりなく一として常住なる  
ものはないのである然るに世の中の人はこの理を悟らず獨り勝手な  
る事を思つて日の選擇などをして居るしかし實際の事を見ればたと  
ひ吉日でも惡をすればその結果は必ず惡となる又惡日でも善事をす  
るときは必ず吉だと或人が云つた實際吉凶と云ふものは日によつて  
定まるものではない事を行ふ人によつて起る所の結果でなるのであ  
る

では最初の矢を射損じても次の矢を當てんと  
の依頼心を除いての意也。懈怠の心、等閑にする心。夕には朝あらん事を思ひ云々。明日ありと思ふて懈怠心を起すを云ふ、朱文公勤學の文に「謂フ勿レ今日學バズトモ來日アリト、謂フ勿レ今年學バズトモ來年有リト、日月逝キマ、歳我ト延ビズ嗚呼老イヌ是レ誰ガ愼ゾ」とあり。一刹那一瞬間の意、慧林一切經音義二十七に曰く、「一刹那ハ時ノ極少也」

つのは、師の前にて一つを疎にせんと思はんや、懈怠の心自ら知らずと雖も、師之を知る。此の誠め萬事に渡るべし。道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、重ねて懇に修せん事を期せり。況んや一刹那のうちに於て、懈怠の心ある事を知らんや。何ぞ只今の一念に於て、直ちに於する事の甚だ難き。

（講譯）

或人が弓を射る事を習ふのに二筋の矢を挾んで的に向ふと先生がそれを見て初めて弓術に志すところの人が二つの矢を持つてはいけないそれは後に今まだ一本あるといふことを特みにして初めの矢はどうでもよいと云ふ氣になるものちやいつも初めの矢で射損じて二度目の矢で當てやうなどと云はす只此の一矢

俱舎に曰く「百二十刹那恒刹那ノ量ト爲ス臘縛ハ此六十、此三十須臾此レ三十晝夜三十晝夜ハ月ナリ、十二月ヲ年ト爲ス」と、以て刹那の時量を知るべし

【第九十三段】

◆牛の價鷲毛よりも  
司馬遷の書に一人固有  
ニ一死一或重ニ於泰山一或  
輕ニ於鵝毛一とあるに  
依る。◆萬金を得て此  
萬金は命を指す、次の  
一錢は牛を指す。◆此の

で必ず當てやうと思へと云つた僅二本しかない矢を先生の前で一つをおろそかにしやうとは思ふまいなまける心があるのを弟子自身で知らないが先生にはそれがわかる者である此の弓の先生が弟子を戒められた言葉は萬事に渡つてよい戒めであらう學問をする人は晩には明日の朝があると思ふ朝になると又晩があることを思ふて後によく充分修業しやうなど、期する事が多い況して一瞬する間になまける心が起つた事を知らう答がないどうして人は今思つた時すぐにする事が出来にくいだらう

【第九十三段】

牛を賣る者あり、買ふ人、明日その價をやりにて牛を取らんといふ。夜の間に牛死ぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損ありと語る人あり。是を聞きて傍なる者の云ふ、牛の主まことに損ありと雖も、又大なる利あり。其の故は生ある者死の

財 命の事也 生死の相に與らず 生とか死とか云ふことを超越して居る事 實の理 不生不滅の實理を指す

近き事を知らざる事、牛既に然かなり。人亦同じ。計らざるに牛は死し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金よりも重し。牛の價鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありと云ふべからずといふに、皆人嘲りて、その理は牛の主に限るべからずと云ふ。又曰く、されば人死を惡まば生を愛すべし、存命の喜び日々に樂しまざらんや。愚なる人この樂を忘れて、煩がはしく外の樂を求め、此の財を忘れて危く他の財を貪るには、志滿つる事なし。生ける間生を樂しますして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。若し又

生死の相に與らずと云はゞ、實の理を得たりと云ふべしといふに、人いよく嘲ける。

(講譯)

牛を賣るものがあつたところがそれを買ふものが代價は明日にやるそして牛はそのときに賣つて販るからと云つてその牛を賣手に預け置いて販つたところが生憎その夜の間にその牛は死んで仕舞つたこれは買手の方に得であつて賣手の方に損であるかう云ふことを話したるところが之を聞いたる側に居つた一人が云ふには「なる程その賣手の方は損であるが又非常な得もして居る何となれば生きて居るもので自分の死と云ふことは氣のつかないのはこの牛が既に然りである人間も亦同様である所がこの場合には思ひがけなくも牛が死んで思ひがけなくもその持主は生き残つて居る然らばその生き残つた人間の一日の命は萬金よりも重くこれに比べて言つた時分には牛の價は殆んどゼロと云つたつてよからうぢやあないか萬金を得てその代りに僅かに一錢だけを失つたとすればそ

の人は決して損ではない」と云ふとそこに聞いて居つた連中は皆この人を嘲り笑つて「何も生死のわからぬことはこの牛の持主に限つたことではないぢやあないか」と云ふすると又前の一人がつゞひて云ふには「一体人間が死と云ふものを憎むならばその代りに生を愛するがよいかくして世の中に生きて居ると云ふことは楽しいことではないかとところが愚人はこの生の樂しみを忘れて煩はしくも外の樂しみを求めこの天から授かつた生と云ふ貴い寶を忘れて仕舞つて危くも外の寶を貪るがそれ等は元來自分の身について居るものではないから何時までやつても足ると云ふことはない生きて居る間にはこの貴い生を樂しますずして死ぬるときになつて俄かに死を恐れるとは理風のわからぬことである抑も人間がこの生を樂しまないのは死を恐れないからである否な死を恐れない爲ではない死が何時襲つて來るかも知れぬ事を忘れて居るからである併し若し一步を進めてこの生死など、云ふ形の問題を超越したと云ふのならばそれを達人と云つてよからうと云ふと聞いて居る連中はいよ／＼ますます彼れを嘲り

〔第九十四段〕

◆常盤井の相國 太政大臣西園寺實氏、相國とは大政大臣のこと也  
◆勅書 天皇の勅旨を書きたる文書  
◆北面院 附の武官にして上北面下北面の二種あり、上北面は諸太夫下北面は五位六位の侍たり、白河院の時始めて北面の武士を置きて宿直せしめらる  
◆下るべからず 馬より下る可らず也 勅書を持てる者は高位高官の人に遭ふも會釋無用なり

笑つた

〔第九十四段〕

常盤井の相國出仕し給ひけるに、勅書を持ちたる北面遇ひ奉りて、馬より下りたりけるを、相國、後に、北面何がしは勅書を持ちながら下馬し侍りし者なり、斯程の者如何でか君に仕まつり候ふべきと申されければ、北面を放たれにけり。勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、下るべからずとぞ。

(講譯)

常盤井太政大臣が出仕された所勅書を持つた北面の武官が道で出逢つて馬から下りたのを常盤井大臣はその後になつて北面の武官何某は勅書を持ちながら馬から下りた不心得者であるこれ程の故實を知らないものがどうして君にお仕へ申すことが出来やうと云はれたらその武官は免職になつた勅書を持つて居ると



【第九十五段】

いづ方につけ侍るべき 紐を附ける場所に非ず、結び目をつける場所を問ひし也 有職の人 故實典禮に精通せる人 軸につけ表紙につくる 軸は左、表紙は右なり、これ巻物を開く時の考へより來れるなり 左と右との何れにつけても差支無いの意

きに高位の人に出逢つたら勅書を馬に乗りながらさし上げて見せらるべきものにして決して馬や車から下りてはいけけないのださうだ

【第九十五段】

箱のくりかたに緒をつくること、いづ方につけ侍るべきぞと、ある有職の人に尋ね申し侍りしかば、軸につけ表紙につくること兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は多くは右につく、手箱には軸につくるも常の事なりと仰せられき。

(講譯)

文箱や手箱の蓋の繰り方の所に緒をつけるのはどちらの方へ結び目をつけるものでせうかと或る故實家に尋ね聞いたるところ右につけると云ふのと左につけると云ふのと兩様の説がある故どちらの方でも差支はないしかし文箱は大抵右の方につけるし手箱ならば左の方につけるの方普通の事であると云はれた

【第九十六段】

めなもみ 稀蕒の事也、菊科の植物にして原野に生ず、高さ三四尺の方形の莖を有し、葉圓く先端尖れり 蝮毒蛇也俗にマムシと云ふ

【第九十六段】

めなもみといふ草あり。蝮に刺されたる人、かの草を揉みて附けぬれば則ち瘡ゆとなん、見知りて置くべし。

(講譯)

めなもみ(稀蕒)と云ふ草がある蝮にかまれたるところの人がこの草の葉をもみて噛まれたる所につけるとすぐなほるさうだ見覚え知つて置くがよからう

【第九十七段】

小人に財あり 小川か財寶を有すると却つて其れが身の仇となる事は明也 君子に仁義あり 比干が紂王を諫めて胸をさかれ、伯夷叔齊が武王を諫めて用ゐられず首陽山に飢え

【第九十七段】

その物につきて、その物を費し損ふもの數を知らずあり。身に虱あり。家に鼠あり。國に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

(講譯)

物についてその物を減らし害するものはその數のわからない程に澤山あるものである、人間の身体には虱があり家には鼠があり國には賊があり智恵のない人に財寶があり君子には

たる類、これ皆仁義の君子を賊せしもの也

〔第九十八段〕

◆一言芳談 書名、上下二冊本、著者不明◆しやせまし云々 爲やうか、爲まいかの意◆後世を思はん者 春乗坊の言、來世淨土を願ふ者の意◆糞汰瓶 糞味増のこと◆よしなき事 いはれの無い、つまらぬ事の意◆遁世者 俗世を遁れて佛門に歸せる者◆無きに事かけぬやう 無くとも事足りないと云ふ程度◆過

仁義があり坊主には佛法がある

〔第九十八段〕

尊き聖の云ひ置きける事を書きつけて

一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心に合ひて覺えし事ども

一しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、大様は爲ぬはよきなり。

一後世を思はん者は、糞汰瓶一つも持つまじき事なり持經本尊に至るまじよきものを持つ、よしなき事なり。

一遁世者は、無きに事かけぬやうを計ひて過ぐる、最上のやうにしあるなり。

ぐる日を過ぐるにて生活するの意也◆上臈は臈は出家する者、髮をそり授戒して一夏九旬の勤行する事、僧の位は戒臈の前後によりて次第す、轉じて位階に用ふ、茲では上臈、下臈は上位下位と云ふに同じ◆佛道を願ふ佛道に入るを願ふ也◆暇ある身 郵家に放下着と云ふ事あり、萬事を抛棄するを云ふ

一上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。  
一佛道を願ふといふは別の事なし。暇ある身になりて、世の事を心にかけてぬを第一の道とす。  
この外もありし事ども覺えず。

(講譯)

尊い聖僧だちの言つて置いたことを書きあつめて拵えたる一言芳談とか名をつけたる書物を見たがその中で自分の意見の通りだと思つたことは  
(一)しやうかすまいかと思ふことは大概ならはせぬがよい(二)後世を思ふものは糞味増瓶一つも持たないやうにすべきものである  
持て居るお經の本や毎日拜む佛像の類までよい物を持つのは理由のないことである(三)世を遁れたる僧侶などは無くしても事の缺がないやうの程度を考へてくらすのが一番よい態度である(四)佛

道に這入らうと思ふたならば上位に居る者も位を捨て、下位になり智恵のあるものも智を捨て、馬鹿になり金持は財寶を捨て、貧乏人となり技能ある人はその能を捨て、無能者となるべきものである(五)佛道を願ふと云ふのは別條に難儀なることではないひまのある身体になつて世の中のことをその氣にかけぬのが一番である

此の外にも色々のことを載せてあつたがそれは覺えて居らぬ

〔第九十九段〕

堀川の相國 太政大臣久我基具公也、岩倉内大臣具實の子樂しき人 安氣な人、自由なき人、金持だつた人 過差 驕奢 大理 檢非違使別當の唐名、

〔第九十九段〕

堀川の相國は、美男の樂しき人にて、その事となく過差を好み給ひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見苦しとてめでたく作り改めらるべき由仰せられけるに、この唐櫃は上古より傳はりて、その始めを知らず數百年を

今の警視總監也 廳務 檢非違使廳の事務 唐櫃 訴訟文書など納むる櫃にて、足六本あり めでたく作り 派に作る也 古弊 年數経て古く弊れたること 規模 規矩模範なり 故實の諸官 故事 慣例に委しき諸役人

經たり。累代の公物、古弊をもちて規模とす、たやすく改められ難き由、故實の諸官等申しければ、その事止みにけり。

〔講譯〕

堀川の太政大臣は美男子の金を持つたところの人で何事にも派出にし奢りを好まれた自分の子の基俊卿を檢非違使別當にして檢非違使廳の政務を行はれたるが役所の公文書を入れたる所が「此の長持は昔からのものにていつの時代からあるのやらわからない五六百年もたつて居るものである代々を累れたるところの朝廷の御器物は古く破れて居るのを以て手本とするたやすく捨て直すことは出来ぬ」と云ふことをよく先例のことを知つて居るところの諸役人が云つたのでそのことはさたやみになつて仕舞つた

〔第百段〕

久我の相國 太政大

〔第百段〕

久我の相國は、殿上にて水を召しけるに、

臣久我雅實公也、六條大臣顯房の子也、主殿司、宮中の殿庭掃除、松柴、炭燦の事を管掌する役人、土器、ドキとよむ、節會の時の盞也、鏡、殿上の定器にしてツルべ、玉瓶を云ふまげもののこと

〔第百一段〕

任大臣の節會、今の大臣親任式、内辨、任大臣節會の奉行役なり、節會の時、承明門内にて諸事を辨備する者を内辨、門外にてなすを外辨と云ふ、内記、中

主殿司土器を奉りければ、鏡を參らせよとて、鏡してぞ召しける。

〔講譯〕

久我太政大臣が殿上で水を持つて來いと仰せられたので、主殿寮の役人が土器をさしあげると曲物を持つて來いと云つて曲物でお飲みになつた

〔第百一段〕

或人任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記の持ちたる宣命を取らずして、堂上せられけり。極りなき失禮なれども、立ち歸り取るべきにもあらず、思ひ煩はれけるに、六位外記康綱、衣被の女房を語らひて、かの宣命を忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

〔講譯〕

或人大臣親任式の時に内辨と云ふ役をつとめられたるが、ついでつかりして書記官たる内記の持つて参つたる宣命を受けとらずに堂上せられた、これはこの上もなきところの過失であるのであるがさればと云つて一旦上つたるものを今更元へ返つて受け取るわけにも参らずどうしたらはいやらと思案にくれて居られたる所が丁度幸ひ六位の外記中原康綱がきぬかつぎの女房をうまくとりいれてかの宣命を持たせてソツと内辨の方へしのびやかにやつた實際うまくやつたものである

〔第百二段〕

尹大納言光忠入道、追儼の上卿を勤められけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けられければ、又五郎男を師とするより外の才覺候はじとぞ宣ひける。かの又五郎は老いたる衛士のよく公事に馴れたる

務省中の官名、文墨を司り、詔勅を作り、禁中の動靜を録する事を司る、宣命を取らずして、宣命は大臣親任の辭令書、宣命は内記、之を草して奏覽後、内記に一旦返し給ふを節會の時持参し、内辨之を受取つて堂上するを式とす、然るに之を取らずして堂上したるを以て失禮と云ふ、堂上す、紫宸殿へ上ること、六位外記康綱、外記は恒例臨時の公事叙目叙位等を奉行する官也、康綱は中原康綱、正六

位上権大外記なり衣被の女官 衣被は宮中女官の一階級也

〔第百二段〕

尹大納言光忠入道 彈正尹源光忠也、從一位内大臣六條有房の子入道して賢忠といふ追儼の上卿 追儼執行の奉行也、追儼は毎歳十二月晦日疫鬼を拂はんが爲め宮中にて行はる、儀式「鬼やらひ」とも云ふ 洞院右大臣 右大臣藤原實泰 次第追儼を行ふ次第也 才覺 分別 衛士 衛

者にてぞありける。近衛殿着陣し給ひける時、膝突を忘れて外記を召されければ、火焚きて候ひけるが、先づ膝突を召さるべくや候ふらんと、忍びやかに吐きけるいとをかしかりけり。

（講譯）

尹大納言光忠入道が追儼の上卿を勤められたるが洞院右大臣殿にその順序を尋ねられると又五郎を師としてそれに教へて貰ふより外にはよい分別はなからうと云はれた其の又五郎と云ふのは老年の衛士でよく宮中の儀式に慣れ覚えたものであるであつた、其近衛殿が陣の座にお着きになつたときに小半疊のうすべりを忘れられたるので外記をお呼びになるとそのときに又五郎衛士はお庭にて火を焚いて居つたがさつと一番に膝つけを持つて來いと仰せられるのであらうとそつと小さい聲で云つたのは甚だ感心なることであつた

門兵衛府の被官、火を焚いて宮中を警護する也、歌に「見かきもり衛士のたく火のよるはもえ、ひるは消つ、物をこそ思へ」とあり 着陣 陣の座に着く事 膝突 うすべり也

〔第百三段〕

大覺寺殿 後宇多法皇を申し奉る嵯峨の大覺寺に在らせられし故也 近習 院の近侍の士也 醫師忠守 正四位下典藥頭丹波忠守のこと、歌人也 大納言 公明卿 從二位民部卿

〔第百三段〕

大覺寺殿にて、近習の人ども、謎々をつくりて解かれける處へ、醫師忠守参りたりけるに、侍從大納言公明卿、我朝の者とも見えぬ忠守かな、と謎々にせられにけるを、唐瓶子と解きて笑ひ合はれければ、腹立ちて退り出にけり。

（講譯）

大覺寺殿にてお側づきの人だちが互に謎をかけては解き合つて居たと、ころへ典藥頭忠守が行つたところが侍從大納言公明卿が早速「我が國のものとも見えぬ忠守とかけて何ととく」と謎をかけられたるに座中の一人「唐瓶子」と解いて皆笑つたので謎の本人忠守は腹を立て、飯つて仕舞つた

〔第百四段〕

荒れたる宿の人目無きに、女の憚る事あ

實仲の子也。唐瓶子平氏忠盛の義也、忠盛は清盛の父也。

【第百四段】

◆憚る事ある頃 物忌など世間を憚る頃 ◆夕月夜の覺束なき程に ◆夕日夜の薄暗き時分に ◆の意、夕月夜は宵の間月の出づる頃にて、月光微なり ◆頓て案内させて 知り合ひの人なれば、直ちに下司女をして案内せしめたる也 ◆心細げなる有様 其住家の周囲の有様を云ふ也 ◆持て静めたる

る頃にて、徒然と籠りたるを、或人訪らひ給はんとて夕月夜の覺束なき程に、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことごとくしく咎むれば、下司女の出で、何所よりぞと云ふに、頓て案内せさせて入り給ひぬ。心細げなる有様、いかで過すらんと、いと心苦し。あやしき板敷に、暫し立ち給へるを、持て静めたる氣色の若やかなるして、此方へ、といふ人あれば、たてあげ所狭げなる、遣戸よりぞ入り給ひぬる、内の様はいたく荒涼じからず、心に、火は彼方に仄なれど、物の綺羅など見えて、俄にしもあらぬ匂、いと懐しう住みなしたり。門よく鎖してよ、雨もぞ降る、御車は、門の下

氣色の 靜にしとやかな氣色の也 ◆たてあげ所狭げ あけたての窮風な引戸の意 ◆心に、奥つかしい ◆物の綺羅 裝飾の金具などのきら／＼したものを ◆門よく鎖してよ云々 下司女に女房の命令する詞 ◆この程の事共 此前に來て以來の事共なり ◆夜深き鶏 一番鳥の事 ◆眞實なる御物語 眞心こめた御物語 ◆撓み給へる ユツケリしてくつろで居ると ◆卯月 四月

に、御供の人は其所／＼に、と云へば、今宵ぞ安き寢は寢べかめると、うち私語くも忍びたれど、程無ければほの聞ゆ。さてこの程の事共細やかに聞え給ふに、夜深き鶏も鳴きぬ。來し方行末かけて、眞實なる御物語に、この度は鶏も花やかなる聲にうち頻れば、明け離るゝにやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所の様にもあらねば少し撓み給へるに、隙白くなれば、忘れ難き事などいひて、立ち出で給ふに、梢も庭も珍しく青み渡りたる、卯月ばかりの曙の艶にをかしかりしを思し出で、桂の木の大なるが隠るゝ迄、今も見送り給ふとぞ。

(講譯)

所は田舎の人目はなれたわびしい住居そこに何か物忌み  
 などで一人寂しく籠つて居つた女のところへ或夕月夜の  
 薄暗ひ頃ソツとかくれて忍び尋れて参つたところの人があつた珍ら  
 しい來客であるので犬が盛んに吠え立てるとこれに驚かされて召使  
 の女が来て「何誰様で御座いますか」と云ふ客はちよつと何處から  
 だと云つたまゝで其の儘にすぐ案内させて内へ這入つたいかにも物  
 さびしげなる所の有様どうして暮らして居るのだらうと氣の毒なや  
 うな氣がする客は暫らく粗末な板敷の所に立つて居ると極めて落ち  
 ついたる若さうなる女の聲にて「どうか此方へ」と云ふがタムと  
 いかにも明けたてのしにくさうな遣戸から這入つて見ると外の割合  
 には内の方は案外にひどくもない燈火は少しあちらへ離れてともし  
 てあるがいかにも物のかざりなどもうつすらと見えてたきしめた香  
 のにはひがする人が参つたる故遽にたいたと云ふのでもないどうも  
 懐かしい住まひである女房達が「門をよくおしめなさい雨が降るか  
 もしれません御車は門の下がようございませうそれから御供の方は

〔第百五段〕  
 ◆北の屋蔭 家の屋根  
 の北側の日蔭になつた

〔第百五段〕

北の屋蔭に消え残りたる雪の、いたう凍  
 りたるに、さし寄せたる車の轆も霜いたく燦きて、有

何處そこで」など云つて居るとお供の方では又「今夜はまあゆつく  
 り寝られるわい」と小さな聲で云つて居るが狭い所であるからぼん  
 やりと聞えるさて室内では暫らく達はなかつた間のことなどかれこ  
 れと話して居るといつかもう夜もふけて一番鶏の鳴く聲がするそれ  
 からシミとく話して居ると今度はもう曉方近く鶏も頻りに鳴き立て  
 る「やあもう明けたらしい」と云つたものゝかう云ふ田舎で人目も  
 ないからさう急いで販る程のこともないから少しグズグズして居ら  
 れると戸の隙間などが漸く白んで來るのでいよく別れの甘い言葉  
 などを残して立ち出で給ふと折柄四月頃の曙梢も庭も新しい緑の色  
 がさめるやう——その美しい朝の景色となつかしい人とを後に無常  
 な車は早や走つて行く車上の人は名残惜しげにその大きな桂の木が  
 遂にかくれてしまふまで振返り振返りする

所<sup>○</sup>車<sup>○</sup>の轅<sup>○</sup> 車を挽く  
 棒<sup>○</sup>有明の月 夜の明  
 けがたに残れる月なり  
 限なくはあらぬ 物  
 蔭の無いのでは無い<sup>○</sup>  
 尋常には非らず 普通  
 の身分の人では無い、  
 相当身分のある人、殿  
 上人を云ひたるものか  
<sup>○</sup>長押 上下にあり、  
 承塵ともかく、敷居の  
 所に別に横に長く渡し  
 たる、木茲では下の長  
 押也<sup>○</sup>傾容首を傾けた  
 容貌<sup>○</sup>氣情 物語のけ  
 はひなり<sup>○</sup>はづれく  
 話の端々也

明の月さやかなれども、限なくはあらぬに、人離れな  
 る御堂の廊に尋常には非ずと見ゆる男、女と長押に尻  
 懸けて、物語りする様こそ、何事にかあらん盡きまじ  
 けれ。傾容などいとしと見えて、得も云はぬ匂ひの  
 さと薫りたるこそをかしけれ。氣情など、はづれく  
 聞えたるも床し。

（講譯）

家の北の陰になつた所に消え残つた雪がきつう凍つて居  
 るのにさし寄せたる車の柁棒にも霜が澤山キラ／＼と光  
 つて有明の月の光がキツパリとはして居るが暗い蔭がないではないの  
 に人が来たか御堂の廊下に普通の身分ではないと見える男が女と列  
 んで下長押に腰をかけて話をする様子は何の話をして居るのか知ら  
 ないが言葉も盡きないことであらう首を傾げた女の格好など誠に美

〔第百六段〕

高野 紀伊國高野山  
 にあり、山頂の金剛峯  
 寺は弘仁七年空海の草  
 創にかゝる<sup>○</sup>證空上人  
 事蹟不明<sup>○</sup>腹悪しく  
 短氣なる事<sup>○</sup>狼籍 狼  
 の踏跡也、亂暴な振舞  
 の意<sup>○</sup>四部の弟子 法  
 華經に比丘、比丘尼、  
 優婆塞、優婆夷を云ふ  
<sup>○</sup>比丘、比丘尼 比丘  
 は僧、比丘尼は尼なり  
<sup>○</sup>優婆塞 信士男即ち

〔第百六段〕

高野の證空上人、京へ上りけるに、細  
 道にて馬に乗りたる女の行き逢ひたりけるが、口引き  
 ける男悪しく引きて、聖の馬を堀へ落してけり、聖  
 と腹悪しく咎めて、こは希有の狼籍かな、四部の弟子  
 はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞  
 は劣り。優婆塞より優婆夷は劣れり。斯くの如くの優  
 婆夷などの身にて、比丘を堀に蹴入れさす。未曾有  
 の悪行なり、と云はれければ、口引の男、如何に仰せ  
 やる、やらん、えこそ聞き知らね、といふに、上人猶

しく見えて何んとも言はれぬ佳い香がサツと薫つたのはよいもので  
 ある話のはし／＼の聞えたりするのが奥床かしい



俗男の佛弟子を云ふ。優婆夷、信七女即ち俗女佛弟子を云ふ。斯く優婆夷などの身にて比丘を、この優婆夷は馬に乗りたる女、比丘は證空上人の事。聞くに聞き知られ、聞き知り得ない即ち一向か、らないの意也。息捲きて、息さしの荒くなる意荒ぼく罵ること。つと思ひける氣色、餘りひどく言ひ過ぎたと思つたやうな様子での意也。

息捲きて、何といふぞ、非修非學の男、と荒らかにいひて、極りなき放言しつと思ひける氣色にて、馬引き歸して遁げられにけり。貴かりける諍なるべし。

（講譯）

高野の證空上人と云ふ僧が馬に乗つて京へ上るときに或る細道でこれも同じく馬に乗つたる女の行くのがあつてこれに出逢つたがどうしたはづみであつたのか女の馬子が仕損つて上人の馬を堀の中へ落したこれがために上人はまつ赤になつて非常に怒つて『とんでもない亂暴なことぢや一體釋迦の御弟子にては男の僧が一番尊ひのであるぢやその次が尼で次が俗の男で飯依したるものぢや俗の女で來たるものはまだも一つのその次に位するのぢやこんな低い身分のもので自分のやうな男の僧を堀へ蹴り入れをするやうなることをいたせるは以ての外のことである眞にこれ大惡業である』と云つたればその女の方の馬子の男無學のため何のことを云ふのだからよくわからない『何と仰しやるのやら手前共にはと

【第百七段】

有り難きもの、稀有のもの、めつたに無いもの、意しれたる女房、ざれたる女、いたづら好の女也。堀川内大臣、従一位内大臣岩倉具守公。難なし、批難する所無し。の意。浄土寺前關白、九條師教公のこと。浄土寺と號す。安喜門院、後堀河天

んと譯がわかりません』と云ふと上人は益々立腹して『何んだと馬鹿者め』とは云つたもの、すぐ又これは餘計なことを云つたと思ふ様子にて馬を引き返して逃げ行つて仕舞つた、尊い喧嘩と云ふべきあらう。

【第百七段】

女の物言ひかけたる返事、取敢へずよき程にする男は有り難きものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども若き男たちの參らるゝ毎に、時鳥や聞き給へる、と問ひて試みられけるに、某の大納言とかやは、數ならぬ身はえ聞き候はず、と答へられけり。堀川内大臣殿は、岩倉にて聞きて候ひしやらん、と仰せられたりけるを、これは難なし、數ならぬ身むつか

皇の女御藤原有子<sup>山</sup>階左大臣 左大臣洞院實雄のこと、實氏公の弟也<sup>人我の相</sup> 惠能禪師の般若四相解に曰く一切ノ人ナ輕慢スルヲ我相ト名ク、仁義禮智ヲ行フト雖敬ヲ合セザルヲ人相ト名ク一とあり執我心の強きを云ふ<sup>たゞ迷を主として</sup>云々 只色に迷うと云ふ事を主として其戀の奴隸となつた時に限り女は優しくも面白くもあるもので其外にては女は頗るつまらぬものであるの意也

しなど、定め合はれけり。總て男をば、女に笑はれぬやうに生し立つべしとぞ、淨土寺の前關白殿は幼くて、安喜門院のよく教へ參らせさせ給ひける故に、御詞などのよきぞと人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、あやしの下女の見奉るも、いと恥かしく心遣ひせらるゝところ仰せられけれ。女のなき世なりせば衣紋も冠もいかにもあれ、ひき繕ふ人も侍らじ。斯く人に恥らるゝ女、如何ばかりいみじきものぞと思ふに女の性は皆僻めり。人我の相深く。貪慾甚しく、物の理を知らず、只迷の方に心も早く移り、詞も巧に苦

しからのぬ事をも、問ふ時は言はず、用意あるかと思へば、又あさましき事迄問はず語りにいひ出す。深くたばかり飾れる事は男の智慧にも勝りたるかと思へば、その事後より顯るゝを知らず、質朴ならずして拙き者は女なり。その心に隨ひてよく思はれん事は、心憂かるべし。されば何かは女の恥かしからん。もし賢女あらば、それも物疎くすさまじかりなん。たゞ迷を主として、彼に隨ふ時、優しくも面白くも覺ゆべき事なり。

(講譯)

女の方から何んとか云つて參つたるなりに其の返事を丁度よい工合にするところの男け減多にないものであると云ふので龜山院の御時にふざけた女官どもが若い男の參内をする毎

に「あなた杜鵑をお聞きになりましてや」と聞く、かうして始終試験をやつて見たるところが某大納言は「私のやうなつまらぬ者の耳にはまだ這入りませぬ」と云ふの答えをやつた堀川内大臣具守は「何でも岩倉あたりで聞いたやうです」と云つたこれを聞いた女官どもが評判をいたして云へるやう「この方は非難の打ち所がない、わざわざ私のやうなつまらぬ者にはなど云ふのはうるさい」とすべて男は女に笑はれないやうに育てるのがよろしいと云ふことがある、或人の話したるにも「浄土寺前關白殿は小さいときから安喜門院がよくそだて仕込まれたるもので御言葉つきなどもよい」と云はれたるさうである山階左大臣殿は「たとひ賤しいところの下女の見て居るところでも甚だ氣がおける」と云はれたかう云ふことよりして見るともしも世間の中に女と云ふものがなかつたならば衣紋も冠も繕ふやうなる人はあるまい、しからばかうして人から恥られる女はどんなにどえらいものであらうやと思ふとこれは又案外なるものにて女の本性は皆ひがんで居るものであるのぢや他人は他人自分は自

〔第百八段〕

〔第百八段〕

寸陰惜む人無し。これよく知れるか。愚

分自分さへよければよいと云ふ風で慾心がふかく道理がわからぬ迷ひやすい且つ口先きばかりが上手でつまらない事で問へば云はないのであるさらば常に言葉を慎んで居るやらと思ふと聞きしもないに云はなくてもよいことまでしやべりちらすのである又うまく表面だけをかざつて居るので男の智恵にも勝つて居るかと思ふにすぐ又化のあらはれることに氣がつかぬ一体心がれちけて居て馬鹿であるのは女であるこんなものゝ心に従つてよいやうに思はれたるところで何のやくにたゝぬ馬鹿なる話だして見ると何も女は恥かしい程のものではないのである若しも賢女と云ふものがあつたとすればそれは親しむことも何にも出来ない面白くもないものであらう故に女と云ふものは只こちらが色に迷つてかゝるときだけやさしくも面白くも感ずるのである悟つて仕舞へば色も慾もあつたものぢやあないのである

寸陰惜む 一寸の日  
 隆をも惜しむの意也、  
 淮南子に「聖人不貴  
 尺之璧而重寸之陰、  
 時難得而易失也」と  
 あり。道人 佛道修行  
 に志せる人、智度論に  
 曰く「得道ノ人チ名ケ  
 テ道人ト爲ス、餘ノ出  
 家ハ未得道ノ者モ亦道  
 人ト名ケ」と。便利  
 大小便の事。謝靈運  
 宋國の人、元嘉中永壽  
 守となる。法華の筆受  
 筆受は梵語の翻譯を  
 唐字にて筆記する事也  
 法華經は謝靈運の筆受

なるか。愚にして怠る人の爲にいは、一錢輕しと雖  
 も、これを累ぬれば貧しき人を富める人となす。され  
 ば商人の一錢を惜む心切なり。刹那覺えずと雖も、こ  
 れを運びて止まざれば、命を終ふる期忽ちに至る。さ  
 れば道人は、遠く日月を惜むべからず。只今の一念空  
 しく過ぐる事を惜むべし。若し人來りて、我命明日は  
 必ず失はるべし、と告げ知らせたらんに、今日の暮る  
 間、何事をか頼み、何事をか營まん。我等が生ける  
 今日の日、何ぞその時節に異ならん。一日の中に、飲  
 食、便利、睡眠、言語、行歩、止む事を得ずして多く

なりとの説信じ難し、  
 今の法華經は晋の維什  
 の譯、僧睿の筆受なり  
 との説あり。風雲の思  
 ひを觀す 龍吟虎嘯の  
 心ありて時に勢に乗じ  
 て功名を立てんと思ふ  
 義也。惠遠 廬山虎溪  
 東林寺に住す、大覺法  
 師之也、晋時代の人也  
 白蓮の交 惠遠師、  
 同志の士と共に西方に  
 向ひて一心に念佛し、  
 院内に白蓮花を植え、  
 九品淨土の思をなして  
 淨樂をつとむ、其結社  
 を白蓮社と云ふ、白蓮

の時を失ふ。その餘りの暇、幾何ならぬうちに無益の  
 事をなし、無益の事をいひ無益の事を思惟して、時を  
 移すのみならず日を消し月をわたりて一生を送る尤も  
 愚なり、謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風  
 雲の思ひを觀せしかば、惠遠白蓮の交りを許さざりき  
 暫くも是れなき時は、死人に同じ。光陰何の爲に惜む  
 とならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まん  
 人は止み、修せん人は修せよとなり。

(講譯)  
 世の中のことを見るに少しの時間位を惜しむ人はたんと  
 ないのであるがこれは惜しむべき必要がないと云ふこと  
 をよく知つて居れるためであるのであらうか或は馬鹿にしてそれが